

研究報告書第52号

教科に関する研究

生きて働く学力をはぐくむ学習指導

平成15・16年度

茨城県教育研修センター

目 次

教科に関する研究「生きて働く学力をはぐくむ学習指導」

1	研究の趣旨	1
2	研究主題	1
3	研究を行う教科（校種）	1
4	研究期間	1
5	研究方法及び研究経過	1
6	研究内容	1

国語

	『読むこと』の学習指導において思考力や想像力を高める指導と 評価に関する一考察	5
--	--	---

図画工作・美術

	「一人一人がもてる力を働かせ伸ばす図画工作・美術科学習指導の在り方」	41
--	------------------------------------	----

農業・工業・商業

	「生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方」	60
--	-------------------------------------	----

	研究関係者一覧	87
--	---------	----

	研究を終えて	88
--	--------	----

「生きて働く学力をはぐくむ学習指導」

1 研究の趣旨

「生きて働く学力をはぐくむ学習指導」（国語，図画工作・美術，農業・工業・商業）に関する研究を行い，学校教育における学習指導の改善・充実に資する。

2 研究主題

(1) 研究主題

生きて働く学力をはぐくむ学習指導

(2) 教科別研究主題

国語……………「読むこと」の学習において思考力や想像力を高める指導と評価に関する一考察

図画工作・美術……一人一人がもてる力を働かせ伸ばす図画工作・美術科学習指導の在り方

農業・工業・商業…生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方

3 研究を行う教科（校種）

国語（小学校，中学校，高等学校），図画工作・美術（小学校，中学校），農業・工業・商業（高等学校）

4 研究期間

平成15，16年度の2年間

5 研究方法及び研究経過

- (1) 各教科ごとに研究協力員を委嘱して，2年間にわたり8回の研究協議会を開催した。
- (2) 研究主題「生きて働く学力をはぐくむ学習指導」を設定するとともに，各教科ごとに教科別研究主題を設定して研究を進めた。
- (3) 研究主題について理論研究を行うとともに，「生きて働く学力をはぐくむ学習指導」に関する教師・児童生徒の意識，授業の実態について調査研究を行った。調査は，県内小学校100校，中学校100校，高等学校50校の教師及び県内の小学校4校，中学校4校，高等学校8校の児童生徒を対象とした。また，教科別研究主題に基づき，校種（小学校，中学校，高等学校）ごとに，研究協力員の所属学校で，平成15年10月から11月，及び，平成16年9月から10月にかけて授業研究を実施した。

6 研究内容

(1) 研究主題に関する基本的な考え方

教育課程審議会答申(2000年12月)では，学力について「知識の量の多少によってとらえるのではなく，学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容を確実に身に付けることはもとより，それにとどまることなく，自ら学び自ら考える力などの『生きる力』がはぐくまれているか

どうかによってとらえる必要がある。」と示されている。これは単に知識などを覚え込むのではなく、児童生徒が実感を伴って基礎的・基本的な内容を自らのものとし確実に習得し理解を深め、その後の学習や将来の生活に、生きて働く力としてはぐくむことを重視している。そこで、学力を知識や技能の量的な学力だけに限定せず、児童生徒が自ら考え、主体的に判断し、行動する資質や能力、生きていく際に自分自身の糧となる学力も含めたものを「生きて働く学力」としてとらえた。つまり中央教育審議会答申(2003年10月)の中で示された「確かな学力」は「生きて働く学力」ととらえることが可能であると考えられる。

こうした点を踏まえて、学校教育において、「生きて働く学力」をはぐくむためには、各教科等において、児童生徒が、基礎的・基本的な内容を確実に身に付け、応用・転移・活用できる力を育成することが重要なことと考える。

「確かな学力」の育成については、上述の中央教育審議会答申において、①知識や技能を剥落(はくらく)させることなく自分の身に付いたものとする、②それを実生活で生きて働く力とする、③思考力・判断力・表現力や学ぶ意欲などを高める等が必要であり、教師の指導においては、知識や技能と生活との結びつきや、知識や技能と思考力・判断力・表現力の相互の関連付け、深化・総合化を図ること等が重要であると述べられている。

本研究では、児童生徒が身に付けた知識や技能と思考力・判断力・表現力や学ぶ意欲などと関連させながら深化・総合化を図る過程を積み重ねていくことが、「生きて働く学力」をはぐくむことととらえた。

(2) 研究主題に関する実態調査

「生きて働く学力をはぐくむ学習指導」に関する教師・児童生徒の意識、授業の実態を探るために実態調査を実施した。

ア 調査期間

平成15年10月1日(水)から10月9日(木)まで

イ 調査対象

(ア) 教師

実態調査は、国語、図画工作・美術、農業・工業・商業の各教科について、県内の小学校100校で200人、中学校100校で200人、高等学校50校で200人の計600人の教科担当者を対象として行った。ただし、農業・工業・商業については17校の教科担当者を対象とした。なお、調査依頼校は、無作為抽出とした。

(イ) 児童生徒

児童生徒の実態調査は、国語、図画工作・美術、農業・工業・商業の各教科について、県内の小学校4校、中学校4校、高等学校8校(農業・工業・商業については6校)から2学級の児童生徒を対象として抽出して行った。

(ウ) 全教科共通設問(教師・児童生徒対象)の調査結果

ふだんの学習指導において「生きて働く学力をはぐくむ学習指導」についての教師・児童生徒の意識や取り組みの様子を把握するために、以下に示す五つの質問項目を全教科共通設問として調査を行った。調査対象回答者数は小学校教師200人、中学校教師195人、高等学校教師199人、計594人である。教師の回収率は99.0%である。同じく児童生徒は、小学校児童554人、中学校生徒492人、高等学校生徒892人、計1,938人に

へと進むにつれて表 全教科共通設問（教師・児童生徒対象）集計結果（割合％）

アが減少し、イが増加している。これはアとイの合計で見ると、明らかに88.9%から72.2%と減少しており、教師の70.8%から38.7%への減少程ではないにして、急激な減少である。また、イの児童生徒は、教師とは逆になっており、学年進行にともない高くなっている。また、アを答えた中学校教師の割合が小学校、高等学校の教師と比べて割合が低い。

教師用					児童生徒用				
質問項目③					質問項目③				
	ア	イ	ウ	エ		ア	イ	ウ	エ
小学校	3.0	48.2	47.8	1.0	小学校	21.5	48.5	25.1	4.9
中学校	3.4	46.3	47.4	2.9	中学校	13.6	44.3	33.2	8.9
高等学校	2.0	22.6	56.8	18.6	高等学校	12.4	41.1	35.1	11.4
全体	2.8	38.7	50.8	7.7	全体	15.3	44.0	31.8	8.9
質問項目④					質問項目④				
	ア	イ	ウ	エ		ア	イ	ウ	エ
小学校	3.5	49.0	47.5	0.0	小学校	15.3	49.3	29.5	5.9
中学校	2.9	41.1	52.6	3.4	中学校	12.8	42.0	36.8	8.4
高等学校	2.0	29.2	59.8	9.0	高等学校	9.0	37.4	40.6	13.0
全体	2.8	39.7	53.3	4.2	全体	11.8	41.9	36.5	9.8
質問項目⑤					質問項目⑤				
	ア	イ	ウ	エ		ア	イ	ウ	エ
小学校	9.0	68.8	22.2	0.0	小学校	30.9	47.1	16.6	5.4
中学校	5.7	58.3	35.4	0.6	中学校	18.6	33.1	36.3	12.0
高等学校	1.5	29.6	56.3	12.6	高等学校	9.7	32.7	37.7	19.9
全体	5.4	52.0	38.1	4.5	全体	18.0	36.9	31.3	13.8

③の課題解決については、小学校・中学校の教師は、ア・イとウ・エがほぼ半数ずつであり、必ずしも課題解決に教員が満足していないことがうかがえる。高等学校では、アとイで24.6%と約1/4であり、教師は課題の解決方法を考えられる生徒が少ないと感じていることが伺える。しかし、児童生徒は、小学校、中学校、高等学校とも半数以上が課題解決の方法を考えていると答えている。特に高等学校での教師と生徒の認識の差は大きい。また、高等学校で11.4%と一割を超す生徒がエを選択しており、生徒の授業への取り組みを積極的にするための何らかの手だてが必要であろう。

④の表現についての教師の結果では、小学校、中学校、高等学校と進むにつれて、イよりウの方が割合が高くなっている。ウは児童生徒より教師の方が割合が高い。

②から④では、教師よりも児童生徒の方が、ア、イを選んでいる割合が高い。特に、アを答えた児童生徒の方が教師のアを答えた割合よりも高い。

⑤の応用・転移・活用については、小学校、中学校の教師はイを答えている割合が高いが高等学校の教師はウを答えた割合が高い。また、アを答えた児童生徒の割合が教師のアを答えた割合よりも高い。

(3) 研究主題に基づく授業研究

教科・校種ごとに、研究協力員の所属校16校〔小学校国語、中学校国語、高等学校国語、小学校図画工作、中学校美術、高等学校農業、高等学校工業、高等学校商業〕で授業研究を行った。

《主な参考文献》

中等教育資料 大日本図書 平成12年9月号 No. 761

国 語

研究主題 「読むこと」の学習において思考力や想像力を高める指導と評価に関する一考察

研究の概要及び索引語

思考力や想像力は、言語活動である「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のそれぞれの活動の中で働き、続いて言語活動としての行為となっていく。国語科学習指導において、児童生徒の思考力や想像力を高めていくことが重要なことであり、このことは、児童生徒の生きて働く言語能力を育成することにつながると考える。本研究では、児童生徒と教師を対象に実施した実態調査を踏まえて、「読むこと」の学習において思考力や想像力を高める指導と評価について考察する。

索引語： 国語，思考力，想像力，指導と評価，生きて働く言語能力

目 次

1	国語科の研究のねらい	6
2	研究主題に関する基本的な考え方	6
3	国語科の学習及び学習指導にかかわる実態調査	8
4	研究主題に迫るための手だて	16
5	授業研究	16
	【授業研究1】小学校第6学年「『海のいのち～12歳のメッセージ～』を書こう」 小学校第5学年「読書の楽しさを伝えよう - 宇宙をみたよ - (毛利 衛)」	17
	【授業研究2】中学校第3学年「読むことの学習 - 『故郷』(文章を読んで人間の生き方や社会のあり方について考え、自分の意見をもつ。)」	24
	【授業研究3】高等学校第1学年 国語総合 「様々な文章を読んで自分の考えを深めよう - 私家版「おんなの鬼」の研究 - 」 高等学校第2学年「古典 随筆 『枕草子』 - 評価語(批評の言葉)を中心に読もう - 」	31
6	研究のまとめ	40

研究主題 「読むこと」の学習において思考力や想像力を高める指導と評価に関する一考察

1 国語科の研究のねらい

国語科の学習指導及び学習にかかわる実態調査を実施し、その結果を踏まえて小学校、中学校、高等学校ごとに授業研究を行い、「読むこと」の学習において思考力や想像力を高める指導と評価について考察する。

2 研究主題に関する基本的な考え方

(1) 国語科における思考力や想像力について

小学校学習指導要領（平成10年12月文部省）（以下、小学校要領と表す。同様に中学校要領、高等学校要領と表す。）国語の目標に「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」とある。また、思考力や想像力に関して、中学校要領の目標に「思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、」、高等学校要領の目標に「思考力を伸ばし心情を豊かにし、」とあるように、思考力や、心情を豊かにすることにつながる想像力を高めることが、小学校・中学校・高等学校の国語科学習指導を通じて求められているととらえることができる。

この思考力や想像力について、小学校学習指導要領解説国語編（平成11年5月文部省）（以下、小学校解説と表す。同様に中学校解説、高等学校解説と表す。）には、「その思考力や想像力とは、言語を手がかりとしながら論理的に思考する力や豊かに想像する力である。思考力や想像力などは認識力や判断力などと密接にかかわりながら、生きる力として期待される、新たな発想や思考を創造する原動力となるものである。」と述べられている。また、中学校解説には、これからの社会をよりよく生きる力として、論理的な思考力や想像力などを高めていくことが指摘され、高等学校解説では、思考力を伸ばすことは、問題を解決しようとする創造的な思考力を伸ばすことであり、心情を豊かにすることは、物事を深く、広く、豊かに感じ取りかつ味わうことができることであると指摘されている。

また、報告「これからの時代に求められる国語力について（審議経過の概要）」（平成15年1月29日文化審議会）（後の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」（平成16年2月3日））（以下、答申と表す。）において、「【考える力】とは、分析力、論理構築力などを含む、論理的思考力」であり、「【感じる力】とは、相手の気持ちや文学作品の内容・表現、自然や人間に関する事実などを感じ取ったり、感動したりできる情緒力」であり、「【想像する力】とは、経験していない事柄や現実に存在していない事柄などをこうではないかと推し量り、頭の中でそのイメージを自由に思い描くことのできる力である。」と述べている。この考え方を換用すると、小学校・中学校・高等学校学習指導要領で述べられる思考力は「考える力」、想像力は「感じる力」と「想像する力」につながるものと考えられ、答申において重要な国語力の中核として指摘されているととらえることができる。

思考力や想像力は、言語活動である「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のそれぞれの活動の中で働き、続いて言語活動としての行為となっていく。例えば、児童生

徒は話されたことを聞き，内容などを認識したり思考したり事柄を想像したりして，自分の考えを話している。また，文章を読み思考したり想像したりして考えたことや感じたことを文章に表している。日常の言語生活の中では，これら3領域の言語活動が状況に応じて様々に組み合わせられて用いられていることから，国語科学習指導において，児童生徒の思考力や想像力を高めていくことが重要なことと考える。

(2) 思考力と想像力を高める指導と評価について

内田伸子氏^{注1)}は、「読みの学習を通して思考力や想像力を養いたい。思考力とは答えが一つに収束するような「収束的思考力」を指している。一方，想像力とは，答えが必ずしも一つとは限らず，答えに至る道も様々であるような「拡散的思考力」を指している。」と述べている。このことから，思考力を「論理性を踏まえ収束的に思考する力」，想像力を「創造や発見につながるよう拡散的に思考する力」ととらえる。

本研究では「読むこと」という言語活動において，児童生徒が取り入れる言語情報を思考力や想像力を働かせて処理・操作する学習を取り上げることとした。児童生徒の日常の言語生活の中では，「話す」「聞く」「書く」「読む」の言語活動が状況に応じて様々に組み合わせられて用いられているのであるから，「読むこと」の学習において，文章を読み思考力や想像力を働かせて言語情報を処理・操作する際には，「話す」「聞く」「書く」の言語活動を関連させ，思考力や想像力を高めるために効果的な関連の言語活動を行うことが重要なことと考える。

児童生徒の言語活動における評価については，まず，授業前にその授業の目標に照らした児童生徒一人一人の学習の実現状況が現在どのような状況であるのかを指導者が診断的に把握することが大切である。この状況の把握がなされていないと，授業における指導は効果的に行われないと考える。そして，授業中の評価として，授業の評価規準とそれを基にして作成した評価のための尺度を拠り所として評価を行うことが重要である。授業では，生徒が何をすればより向上するのか具体的な学習活動を示してあげることが必要である。授業後の学習状況の確認は，授業後の評価として位置付けられる。また，授業後の評価は，指導者自身が指導に対する評価をする，指導者のための評価でもあると考える。

このように，指導と評価を確実にを行い，国語科学習指導において児童生徒の思考力や想像力を高めていくことで，「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の言語活動における児童生徒の言語能力が高まり，日常生活や社会生活に必要な生きて働く言語能力を児童生徒に身に付けさせることができると考える。

注1) 内田伸子(お茶の水女子大学大学院教授)『新中学校教育課程講座 国語 第2章第4節』，ぎょうせい，1999年

3 国語科の学習及び学習指導にかかわる実態調査

国語科の学習及び学習指導にかかわる実態を、本県の小学校、中学校及び高等学校の児童生徒と国語科を担当する教師を対象に、質問紙により調査した。

(1) 調査の対象

ア 児童生徒…校種別に学校規模や地域性を考慮して調査校を抽出した。小学校については4校の第5学年，中学校については4校の第2学年，高等学校については8校の第2学年，計1055人で実態調査を行った。回答者数は，小学校児童287人，中学校生徒258人，高等学校生徒510人の計1055人である。なお，回答率は100%である。

イ 教師………県内の公立小学校100校，公立中学校100校，公立全日制高等学校50校を無作為に抽出した。小学校については各校1人，中学校については国語科担当者各校1人，高等学校については国語科担当者各校2人，計300人を対象者とした。回答者数は，小学校100人，中学校98人，高等学校97人の295人である。なお，回答率は98%である。

(2) 実施時期 平成15年10月1日（水）から10月9日（木）まで

(3) 調査結果及び分析

- ・ 国語科学習に関する調査項目数は，児童生徒に対して5項目，教師に対して6項目とした。
- ・ 調査項目ア～カについての質問内容は，以下に示す。
- ・ 表中の数値は各問の，回答者数に対する回答数の割合（%）である。
- ・ 児童生徒用の質問内容は，小学生用のものを掲載する。

ア 重点的な指導の領域等について（表1，表2）

《児童生徒》質問文

あなたが，一番得意な学習はどれですか。あてはまるものを一つ選び，記号を回答欄に記入してください。

- | | |
|-------------------------------|--------------------|
| ア スピーチや話し合いなど，話したり聞いたりすることの学習 | ウ 物語や説明文などを読むことの学習 |
| イ 作文など，文章を書くことの学習 | オ 特にない |
| エ 漢字や言葉についての学習 | |
| カ その他 | |

《教師》質問文

児童生徒一人一人に，言語能力をふだんの授業の中で身に付けさせるために，重点的に考えている学習指導の領域等はどれですか。あてはまるものを一つ選び，記号を回答欄に記入してください。

- | | |
|------------------|-------------|
| ア 「話すこと・聞くこと」の領域 | イ 「書くこと」の領域 |
| ウ 「読むこと」の領域 | エ 言語事項 |
| オ 特に考えていない | カ その他 |

表1 一番得意な学習

(%)《児童生徒》

選択肢	小	中	高
ア スピーチなど話したり聞いたりすることの学習	4.7	8.1	10.9
イ 作文など、文章を書くことの学習	17.9	19.1	10.7
ウ 物語や説明文などを読むことの学習	28.7	24.4	18.2
エ 漢字や言葉についての学習	32.9	22.1	21.1
オ 特になし	15.8	23.6	38.5
カ その他	0.0	2.7	0.6

表2 重点的指導の領域等

(%)《教師》

選択肢	小	中	高
ア 「話すこと・聞くこと」の領域	55.0	34.7	17.5
イ 「書くこと」の領域	16.0	32.7	30.9
ウ 「読むこと」の領域	24.0	17.3	33.0
エ 言語事項	4.0	11.2	12.4
オ 特に考えていない	0.0	0.0	4.1
カ その他	1.0	4.1	2.1

児童生徒が漢字や言葉についての学習を一番得意な学習として挙げている割合は、小学校32.9%、中学校22.1%、高等学校21.1%を示した。漢字の読みや書きの力が身に付いていることが、テストによって表れやすいことが得意に感じる理由として考えられる。また、「物語や説明文などを読むこと」を一番得意な学習として挙げている割合は小学校28.7%、中学校24.4%、高等学校18.2%を示した。一方で、教師が「読むこと」の領域の学習に力を入れている割合は小学校24.0%、中学校17.3%、高等学校33.0%を示し、「読むこと」に関して教師が重点的に行っている学習指導が、児童生徒に「得意である」という意識をもたせることにつながっていると考えられる。

児童生徒が得意な学習としてスピーチや話し合いなど話したり聞いたりすることの学習を挙げる割合は小学校4.7%、中学校8.1%、高等学校10.9%と低い。一方で、特に小学校55.0%、中学校34.7%の教師が重点をおいて指導していることが示された。音声言語の学習指導において、今後、指導法や取り扱う題材を改善する必要があると考えられる。

また、児童生徒が一番得意な学習として「特になし」と答えた割合が小学校15.8%、中学校23.6%、高等学校38.5%を示したことに注目する必要がある。国語科学習に興味や関心が高まらない様子がうかがわれ、国語科学習指導について、学習の効果や指導法の問題点について再検討する必要がある。

教師が「書くこと」の指導に重点を置いて指導しているという割合は小学校16.0%、中学校32.7%、高等学校30.9%を示した。しかし、児童生徒が「作文など、文章を書く学習」を得意な学習として挙げる割合が小学校17.9%、中学校19.1%、高等学校10.7%となっていることは、教師は「書くこと」の学習指導に時間をかけているが、児童生徒は「文章を書く」という学習活動を嫌っている、という実態を反映したものと考えられる。

イ 言語能力を身に付けさせる学習指導について（表3，表4）

《児童生徒》質問文

あなたは、どのような学習をしたときに国語の学習の力が身に付いたと感じますか。あてはまるものを一つ選び、記号を回答欄に記入してください。

- ア 自分で課題を決めてそれを明らかにする学習 イ 漢字のドリルなど、何度も繰り返す学習
 ウ 教科書の学習のあとに、先生が出す少しむずかしい問題をとく学習
 エ 学習のねらいが自分ではっきりとわかっている学習
 オ 特に感じたことはない カ その他

《教師》質問文

児童生徒一人一人に、どのような学習指導を行えば言語能力を身に付けさせることができると思いますか。あてはまるものを一つ選び、記号を回答欄に記入してください。

- ア 児童生徒の主体的な学習活動に重点を置いた学習指導
 イ 知識や技能の定着に重点を置いた学習指導 ウ 発展的な学習に重点を置いた学習指導
 エ 学習の目標やねらいを児童生徒に十分理解させた学習指導
 オ 特になし カ その他

表3 力が身に付いたと感じるとき

(%)《児童生徒》

選択肢	小	中	高
ア 自分で課題を決めてそれを明らかにする学習	11.8	18.5	9.6
イ 漢字のドリルなど、何度も繰り返す学習	55.9	31.3	27.1
ウ 教科書の学習のあとにむづかしい問題をとく学習	10.0	12.3	12.2
エ 学習のねらいがはっきりとわかっている学習	7.2	14.0	16.1
オ 特に感じたことはない	15.1	21.8	33.4
カ その他	0.0	2.1	1.6

表4 言語能力を身に付けさせる学習指導

(%)《教師》

選択肢	小	中	高
ア 主体的な学習活動に重点を置いた学習指導	25.0	33.7	32.0
イ 知識や技能の定着に重点を置いた学習指導	40.0	31.6	40.1
ウ 発展的な学習に重点を置いた学習指導	2.0	3.1	7.2
エ 学習の目標やねらいを十分理解させた学習指導	30.0	29.6	18.6
オ 特にない	1.0	1.0	0.0
カ その他	2.0	1.0	2.1

国語の学習の力が身に付いたと感じるときとして児童生徒が漢字のドリルなど何度も繰り返す学習をしたときを挙げる割合は、小学校55.9%、中学校31.3%、高等学校27.1%を示した。教師が言語能力を身に付けさせる学習指導として知識や技能の定着に重点を置いて学習指導を行っている割合も小学校40.0%、中学校31.6%、高等学校40.1%を示した。多くの教師が、知識や技能の定着に重点を置いた学習指導を行えば言語能力を身に付けさせることができると考えていることが分かる。

児童生徒が主体的に自分で課題を決めてそれを明らかにする学習を挙げる割合は小学校11.8%、中学校18.5%、高等学校9.6%を示したが、教師が主体的な学習活動であるとして挙げている割合は小学校25.0%、中学校33.7%、高等学校32.0%を示し、児童生徒に比べて高い。

また、児童生徒が学習のねらいが自分ではっきりと分かっている学習を挙げる割合は、小学校7.2%、中学校14.0%、高等学校16.1%を示した。しかし、教師が学習のねらいや目標を十分に理解させた学習指導を挙げる割合は小学校30.0%、中学校29.6%、高等学校18.6%を示し、児童生徒に比べて高い。特に、小学校児童と教師との間にずれがあり、校種が進むにつれてその差が縮まっている様子がある。学習のねらいや目標を自覚するという、言語活動における目的意識の涵養が大切なことが小学校・中学校・高等学校解説で示されているが、発達段階の違いを考慮して、学習のねらいや目標を意識させる指導が必要であることを示していると考えられる。

児童生徒が力が付いたと特に感じたことがないとする割合が小学校15.1%、中学校21.8%、高等学校33.4%を示したことに注目するべきであろう。国語の学習の力を児童生徒に自覚的にとらえさせることが、容易ではないことを示していると考えられる。

ウ 「読むこと」の学習指導で、力を入れている学習について（表5、表6）

児童生徒が「読むこと」の学習で一番理解できたと思う学習として、物語を読んで登場人物の気持ちなどを考える学習を挙げる割合は小学校23.7%、中学校23.6%、高等学校27.4%を示した。しかし、教師が力を入れている学習指導として物語や小説などの文学的な文章の読解の学習指導を挙げる割合は小学校14.0%、中学校16.3%、高等学校8.3%を示し、高いとは言えない。

また、児童生徒が読書をするを挙げる割合は小学校38.7%、中学校20.4%、高等学校16.5%を示した。一方、教師は、小学校教師が読書活動につながる学習を挙げる割合は24.0%と比較的高いが、中学校と高等学校の教師は8.2%、7.2%と低い割合を示している。「読むこと」の学習が読書生活につながっているととらえる教師の割合は校種により差が見られる。

児童生徒が一番理解できたと思う学習として、「特にない」を挙げる割合は小学校6.3%、中学校9.8%、高等学校15.4%を示した。前項の「イ」で国語の学習の力が付いたと「特に感

《児童生徒》質問文

「読むこと」の学習で、あなたが一番理解できたと思う学習の内容はどれですか。あてはまるものを一つ選び、記号を回答らんに記入してください。

- ア 物語を読んで登場人物の気持ちなどを考える学習 イ 説明文を読んで書いてあることについて考える学習
 ウ 読書をする事 エ 教科書を声に出して読む学習
 オ 漢字の読み・書きや言葉の学習
 カ 文章の内容をまとめたり、まとめたものを発表したりする学習
 キ 文章に書かれていることについて感想や意見をもつ学習
 ク 特にない
 ケ その他

《教師》質問文

「読むこと」の領域の学習指導で、力を入れている学習はどれですか。あてはまるものを一つ選び、記号を回答欄に記入してください。

- ア 物語や小説などの文学的な文章の読解の学習 イ 論説文などの説明的な文章の読解の学習
 ウ 読書活動につながる学習 エ 音読や朗読
 オ 漢字の読み・書き、語句・語彙など言語事項の学習
 カ 「話すこと・聞くこと」や「書くこと」と関連させた学習指導
 キ 教材文に表れているものの見方や考え方について、自分の考えや意見をもつこと
 ク 特にはない ケ その他

表5 「読むこと」の一番理解できたと思う学習 (%)《児童生徒》

選 択 肢	小	中	高
ア 登場人物の気持ちなどを考える学習	23.7	23.6	27.4
イ 説明文に書いてあることについて考える学習	2.8	9.0	9.4
ウ 読書をする事	38.7	20.4	16.5
エ 教科書を声に出して読む学習	4.9	3.3	2.8
オ 漢字の読み・書きや言葉の学習	16.4	20.4	19.5
カ 文章の内容をまとめ、発表する学習	3.1	9.0	3.7
キ 文章の内容について感想や意見をもつ学習	3.8	4.5	5.3
ク 特にない	6.3	9.8	15.4
ケ その他	0.3	0.0	0.0

表6 「読むこと」の学習指導で、力を入れている学習 (%)《教師》

選 択 肢	小	中	高
ア 物語や小説などの文学的な文章の読解の学習	14.0	16.3	8.3
イ 論説文などの説明的な文章の読解の学習	4.0	21.4	29.9
ウ 読書活動につながる学習	24.0	8.2	7.2
エ 音読や朗読	22.0	4.1	8.3
オ 漢字、語句・語彙など言語事項の学習	2.0	11.2	30.9
カ 「書くこと」などの他領域と関連させた学習指導	25.0	13.3	4.1
キ 教材文の内容に対して、考えや意見をもつこと	9.0	25.5	11.3
ク 特にはない	0.0	0.0	0.0
ケ その他	0.0	0.0	0.0

「特にない」を挙げる割合が児童生徒に目立つ状況があることと考え合わせ、「読むこと」の学習指導においてもその改善が必要である。

教師が「読むこと」の学習として力を入れていることとして、論説文などの説明的な文章の読解の指導を挙げる割合は小学校4.0%、中学校21.4%、高等学校29.9%を示した。特に、中学校・高等学校において比較的高い。しかし、児童生徒がこの学習を一番理解できたとしてあげる割合は小学校2.8%、中学校9.0%、高等学校9.4%を示し、児童生徒は論理的な文章の学習を理解できたととらえていないと考えられる。また、この学習指導では、小学校の教師が挙げる割合が中学校・高等学校の教師に比べ低いことが特徴的である。

小学校と中学校の教師が「読むこと」と「話すこと・聞くこと」など他領域との関連指導に力を入れている割合は25.0%、13.3%を示したが、高等学校の教師は4.1%と低い。また、児童生徒がこのような学習を理解できたとする割合は小学校3.1%、中学校9.0%、高等学校3.7%と低い。

また、教師が教材文に表れているものの見方や考え方について自分の考えをもたせることに力を入れている割合は小学校9.0%、中学校25.5%、高等学校11.3%を示した。しかし、児童生徒が感想や意見をもつ学習を挙げる割合は小学校3.8%、中学校4.5%、高等学校5.3%と低く、物事や考えに対して自分を主体として思考する学習を理解できた学習ととらえていないと考えられる。自分を主体として思考する学習指導について検討する必要がある。

エ 「読むこと」の学習で期待することについて（表7、表8）

《児童生徒》質問文	
「読むこと」の学習で、あなたができるようにになりたいと思うことはどのようなことですか。あてはまるものを選び、記号を回答欄に記入してください。	
ア 文章の内容がわかること	イ 文章に表れている作者や ^{ひっしや} 筆者の言いたいことを考えることができること
ウ 読むことの学習の後、たくさん読書をするようになること	
エ 教科書を声に出してすらすら読めるようになること	
オ 漢字が読めたり書けたり、言葉についてわかったりすること	
カ 学習の方法がわかり、自分の力で学習できること	キ 生活に役立つような言葉の力を身に付けること
ク 文章に書かれていることについて、自分なりの考えや意見がもてること	
ケ 特に考えていない	コ その他
《教師》質問文	
「読むこと」の領域の学習指導で、児童生徒に特に期待することはどれですか。あてはまるものを選び、記号を回答欄に記入してください。	
ア 教材文に書いてある内容が理解できること	イ 作者や筆者の考えをとらえること
ウ 読書の量が増えること	エ すらすら読めるようになること
オ 言葉についての知識が増えたり、言語感覚が高まること	
カ 学ぶ方法（学習の仕方）を身に付けること	キ 生活に生かせる言語能力を身に付けること
ク 教材文に表れているものの見方や考え方について、自分の考えや意見をもつこと	
ケ 特に考えていない	コ その他

表7 「読むこと」の学習でできるようにになりたいこと（%）《児童生徒》

選 択 肢	小	中	高
ア 文章の内容がわかること	5.4	7.8	11.3
イ 作者や筆者の言いたいことを考えること	16.7	27.5	26.8
ウ 読むことの学習の後、読書をするようになること	6.9	4.9	2.0
エ 教科書をすらすら読めるようになること	12.7	4.1	4.6
オ 漢字や言葉についてできたりわかったりすること	24.2	20.9	15.7
カ 学習の方法がわかり、自分の力で学習できること	10.9	11.9	7.5
キ 生活に役立つような言葉の力を身に付けること	11.2	5.7	7.9
ク 自分なりの考えや意見がもてること	6.2	10.2	8.9
ケ 特に考えていない	5.4	6.6	15.1
コ その他	0.4	0.4	0.2

表8 「読むこと」の学習で期待すること（%）《教師》

選 択 肢	小	中	高
ア 教材文に書いてある内容が理解できること	17.0	14.3	16.5
イ 作者や筆者の考えをとらえること	16.0	18.4	16.5
ウ 読書の量が増えること	9.0	5.1	8.3
エ すらすら読めるようになること	5.0	1.0	0.0
オ 言葉の知識が増えたり、言語感覚が高まること	12.0	10.2	8.3
カ 学ぶ方法（学習の仕方）を身に付けること	7.0	11.2	3.1
キ 生活に生かせる言語能力を身に付けること	18.0	13.3	19.6
ク 教材文について、自分の考えや意見をもつこと	16.0	25.5	27.7
ケ 特に考えていない	0.0	0.0	0.0
コ その他	0.0	1.0	0.0

児童生徒が「読むこと」の学習でできるようにになりたいこととして、文章に表れている作者や筆者の言いたいことを考えることができることを挙げる割合は小学校16.7%、中学校27.5%、高等学校26.8%を示した。また、教師も作者や筆者の考えをとらえることを期待することとして挙げる割合は小学校16.0%、中学校18.4%、高等学校16.5%を示し、比較的高い。「読むこと」の学習指導において、要旨や主題をとらえる学習活動が多く行われ、児童生徒もそのことを自覚的に学習しようとしていると考えられる。

また、児童生徒が漢字を読めたり書けたり、言葉について分かったりすることを挙げる割合が小学校24.2%、中学校20.9%、高等学校15.7%を示した。「読むこと」の学習において児童生徒は漢字や言葉の学習についての意識をもっていることがうかがわれる。

児童生徒が生活に役立つような言葉の力を身に付けることを挙げる割合は小学校11.2%、中学校5.7%、高等学校7.9%を示した。一方、教師がこのことを挙げる割合は小学校18.0%、中学校13.3%、高等学校19.6%を示し、「読むこと」の学習指導において、教師が、読むことの学習の成果を児童生徒が生活の中で生かしていこうとする意欲や関心を、十分に高めることができていると考えられる。

高等学校の生徒が、できるようになりたいこととして「特にない」を挙げる割合が15.1%を示している。このことに注目して、高等学校における「読むこと」の学習指導の改善について検討する必要があると考える。

教師が「読むこと」の学習で期待することとして教材文に書いてある内容が理解できることを挙げる割合は小学校17.0%、中学校14.3%、高等学校16.5%を示した。さらに、教材文に表れているものの見方や考え方について自分の考えや意見をもつことを期待することを挙げる割合は小学校16.0%、中学校25.5%、高等学校27.7%を示した。しかし、児童生徒が文章に書かれていることについて自分なりの考えや意見をもてることを望む割合は小学校6.2%、中学校10.2%、高等学校8.9%と低く、「読むこと」の学習において、児童生徒が自覚的に主体的な読みを行えるよう学習指導の改善に取り組む必要があると考える。

オ 評価をするために力を入れていることについて（表9，表10）

《児童生徒》質問文

国語の学習で、あなたはどのような^{ひょうか}評価をしたりされたりすると、やる気が出ますか。あてはまるものを二つ選
び その記号を回答欄に記入してください。

- ア 授業中に自分について^{ひょうか}評価をすること
- イ 友達と互いに^{ひょうか}評価をしあうこと
- ウ これまでの学習の成果を先生が知らせてくれること
- エ 先生が学期末の「通知票」によって^{ひょうか}評価をしてくれること
- オ どんなところを^{ひょうか}評価するのかを先生が知らせてくれること
- カ テストの結果を先生がほめてくれること
- キ 書いた作文やノートの書き方を先生がほめてくれること
- ク 特にない
- ケ その他

《教師》質問文

児童生徒一人一人の言語能力を評価するために、力を入れていることはどのようなことですか。あてはまるものを二
つ選び 記号を回答欄に記入してください。

- ア 児童生徒の自己評価を工夫したり充実させたりすること
- イ 児童生徒の相互評価を工夫したり充実させたりすること
- ウ 評価に関する個人ごとの学習記録（個人カルテ等）を累積して活用すること
- エ 評価・評定のために計画的に評価したり評価方法を工夫したりして教師の評価を充実させること
- オ 評価規準を見直して工夫改善すること
- カ 定期テスト等、ペーパーテストの結果を評価すること
- キ 授業における児童生徒の観察や作品から学習状況を把握すること
- ク 特にしていない
- ケ その他

表9 やる気の出る評価

(%)(《児童生徒》)

選択肢(二つ選択)	小	中	高
ア 授業中に自分について評価をすること	12.0	12.8	16.3
イ 友達と互いに評価をシェアすること	33.7	26.9	18.3
ウ 学習の成果を先生が知らせてくれること	22.8	21.9	24.6
エ 「通知票」によって評価をしてもらえること	44.9	35.9	35.6
オ 評価する項目などを先生が知らせてくれること	19.9	29.8	24.8
カ テストの結果を先生がほめてくれること	19.6	24.8	16.3
キ 作文やノートなどを先生がほめてくれること	30.8	28.5	25.4
ク 特にない	15.2	16.9	36.0
ケ その他	1.1	2.5	2.7

表10 評価のために力を入れていること

(%)(《教師》)

選択肢(二つ選択)	小	中	高
ア 自己評価を工夫したり充実させたりすること	23.0	18.4	13.4
イ 相互評価を工夫したり充実させたりすること	20.0	16.3	11.3
ウ 個人ごとの学習記録を累積して活用すること	28.0	34.7	14.4
エ 計画的な評価など教師の評価を充実させること	44.0	35.7	22.7
オ 評価規準を見直して工夫改善すること	14.0	21.4	11.3
カ ペーパーテストの結果を評価すること	12.0	23.5	60.8
キ 観察や作品から学習状況を把握すること	58.0	50.0	63.0
ク 特にない	1.0	0.0	2.1
ケ その他	0.0	0.0	1.0

児童生徒がやる気の出る評価として「通知票」によって評価をしてもらえることを挙げる割合は小学校44.9%、中学校35.9%、高等学校35.6%を示した。教師も、評価のために力を入れていることとして計画的に評価をして通知票に総括するなど教師による評価を充実させることを挙げる割合は小学校44.0%、中学校35.7%、高等学校22.7%を示し、比較的高い。

児童生徒が作文やノートなど学習の成果を教師からほめられることを挙げる割合は小学校30.8%、中学校28.5%、高等学校25.4%を示し、教師も観察や作品から学習状況を把握することを挙げる割合は小学校58.0%、中学校50.0%、高等学校63.0%と高い。教師は、児童生徒のペーパーテストの結果ばかりでなく、学習の成果などにより多面的に評価を行おうとしていることがうかがわれる。

相互評価については、小学校33.7%、中学校26.9%、高等学校18.3%を示し、児童生徒は友達からの評価も期待していることが分かる。

また、児童生徒がやる気の出る評価として「特にない」を挙げる割合が小学校15.2%、中学校16.9%、高等学校36.0%を示した。教師は、児童生徒が評価した・された結果を学習に生かすことについて、その方法を検討する必要があると考える。

小学校・中学校の教師が評価のために力を入れていることとして、個人ごとの学習記録を累積して活用することを挙げる割合は小学校28.0%、中学校34.7%、高等学校14.4%を示した。これは、教師が児童生徒一人一人に対して適切に評価しようとする実態を示していると考えられる。しかし、評価規準を見直して工夫改善することについては、割合は小学校14.0%、中学校21.4%、高等学校11.3%を示しており、より客観的な評価のために評価方法を工夫したり評価規準を改善したりすることが引き続いて今後の課題であると考えられる。

カ 今後身に付けさせたい国語の力について (表11)

《教師》質問文

児童生徒に、今後身に付けさせたい国語の力は特にどの力だと思いますか。あてはまるものを一つ選び、記号を回答欄に記入してください。

- ア 論理的な思考が展開できる「考える力」
- イ 情緒的に「感じる力」
- ウ 事柄を思い描いたり相手の思いを察したりする「想像する力」
- エ 考えや感じたことを「表す力」
- オ その他

教師が今後身に付けさせたい国語の力として、考えたことや感じたことを「表す力」を挙げる割合は小学校57.0%、中学校43.9%、高等学校29.9%を示した。これは、音声言語においても文字言語においても、表現する力が児童生徒に十分に身に付いていないと教師がとらえているものと考えられる。

表11 今後身に付けさせたい国語の力

(%)《教師》

選 択 肢	小	中	高
ア 論理的な思考が展開できる「考える力」	31.0	37.8	32.0
イ 情緒的に「感じる力」	5.0	7.1	11.3
ウ 事柄を思い描いたり相手の思いを察したりする「想像する力」	7.0	10.2	24.7
エ 考えや感じたことを「表す力」	57.0	43.9	29.9
オ その他	0.0	1.0	2.1

また、論理的な思考が展開できる「考える力」を挙げる割合は小学校31.0%、中学校37.8%、高等学校32.0%を示した。これは、論理的に話したり文章に表現することが不十分である、と言われる児童生徒の実態に対する教師の問題意識が反映しているものと考えられる。事柄を思い描いたり相手の思いを察したりする「想像する力」を挙げる割合は小学校7.0%、中学校10.2%、高等学校24.7%を示し、校種が進むにつれて挙げる割合が高くなる特徴がある。

情緒的に「感じる力」について今後身に付けさせたい国語の力として挙げる教師の割合は、小学校5.0%、中学校7.1%、高等学校11.3%を示し比較的低い。

キ 調査結果のまとめ

本調査の結果、次のことが明らかになった。

- (ア) 一番得意な学習として、児童生徒は「物語や説明文などを読むことの学習」を「漢字や言葉についての学習」の次に挙げている。教師は、「読むこと」の学習指導を重点的に考えてはいるが、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習指導に比べその割合は低い。
- (イ) 児童生徒は、漢字のドリルなど何度も繰り返す学習によって国語の力が身に付いたと感じている。教師は知識や技能の定着に重点を置いた学習指導を言語能力を身に付けさせる方法ととらえている。
- (ウ) 児童生徒は、「読むこと」の学習で「登場人物の気持ちなどを考える学習」を理解できた学習としているが、「文章をまとめ、発表する学習」と「文章の内容について感想や意見をもつ学習」を理解できた学習とはしていない。一方教師は、「教材文に表われているものの見方や考え方について自分の考えをもつこと」など、自分を主体として思考する学習指導にはあまり力を入れていない。
- (エ) 「読むこと」の学習で、児童生徒は「文章の内容が分かること」や「作者や筆者のいいことを考えること」をできるようになりたいこととしている。教師は、さらに「教材文に表われているものの見方や考え方について自分の考えをもつこと」を期待しているが、児童生徒は、文章に書かれていることについて自分なりの考えや意見をもつような主体的な「読むこと」の学習に対してあまり意欲的ではない。
- (オ) 児童生徒は、「通知票」により教師から評価されること、先生がほめてくれることや、「相互評価により友達から評価されること」で学習に対するやる気が出るとしている。教師は、「観察や作品から学習状況を把握すること」に力を入れているが、評価規準を見直して工夫改善することは十分行われていない。
- (カ) 教師が児童生徒に今後身に付けさせたい力として「表す力」を考えている。また、「考え

る力」を挙げる教師も小学校・中学校・高等学校とも多い。しかし、「想像する力」「感じる力」を挙げる教師は小学校・中学校・高等学校ともあまり多くない。

4 研究主題に迫るための手だて

研究主題に迫るための手だてとして、以下の二つが必要であると考えた。

(1) 授業の対象となる題材(教材)において、児童生徒が「何について」「どのようにする」学習活動が思考力や想像力を高めるために適切なものか、視点を明確にして学習活動を設定する。

(2) 児童生徒一人一人の言語能力に関する個人ファイルや個人表(カルテ)を作成して計画的に学習の実現状況を評価する。

(1)については、児童生徒一人一人が思考力や想像力を働かせ、言語活動として「何について」「どのようにする」ことで思考力や想像力の高まりが期待できるのかを、教師は明確にすることが大切であると考え。その際、「読むこと」の学習と「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域の学習とを有効に関連付けることが大切であると考え、以下のような学習活動を検討する。

- ・ 文章を読んで理解した内容について考え、それを自分の言葉で表現する。
- ・ 具体的な叙述を踏まえ、根拠を明確にししながら自分の考えや意見を述べる。

(2)については、評価は教師自らの学習指導の改善のために手がかりとなるものであるから、児童生徒一人一人の学習の実現状況をできる限り把握することで、児童生徒の思考力や想像力を高めるための指導を、個に即して行うことが可能となる。また、児童生徒の思考力や想像力が高まった姿は一様ではないから、個人内評価を重視することが重要であると考え。

5 授業研究

研究主題「『読むこと』の学習において思考力や想像力を高める指導と評価の在り方に関する一考察」についての基本的な考え方と実態調査の結果を踏まえ、具体的な手だてを講じ、小学校、中学校、高等学校で授業研究を行った。

- 【授業研究1】 小学校第6学年 「『海のいのち～12歳のメッセージ～』を書こう」
小学校第5学年 「読書の楽しさを伝えよう
- 宇宙をみたよ - (毛利 衛)」

1年目の授業研究

小学校第6学年 「『海のいのち～12歳のメッセージ～』を書こう」

本単元は、立松和平の「海のいのち」を共通学習材として、そこでの問題意識をもとに一人一人が他の作品を選んで比べ読みをし、物語作品から受け止めた主題や印象について、読みを深めていく学習である。本作りという学習のゴールを明確にしながら、読みを深めるための「方法知」としての「比べ読み」を学び、目的的な読書ができるようにした。指導の手立ては、以下の4点である。

一人一人が課題（比べ読みで考えたいテーマ）をもつことができる工夫

「比べ読み」の方法を学ぶための学習材の工夫

読み比べる本を主体的に選択できるようにする工夫

指導と評価の一体化を図るための工夫

これらの手立てにより授業を行った。特に、本学級の児童にとっては初めての比べ読みであったため、二つの詩「大漁」(金子みすゞ)・「いのち」(三越左千夫)をモデルに比べ読みの方法やよさを学習した。比べる視点としては「共通点」と「ちがい」を見つけ、そこから自分が選択したテーマ(「いのちについて」など)について考えるようにした。また、比べる本を選択する際には、市立図書館の司書の方にT2として入っていただいた。比べ読みの結果、作品と作品(描写と描写、二つのストーリー展開、登場人物の生き方等)を対比しながら読むことになり、詳細な読解をしなくても自然に、しかも自ら、作品世界を深く考えることになった。また、「海のいのち」と伝記、ドキュメンタリー、説明的文章などとの比べ読みをした児童も、選択したテーマについて考えを深め、新たな発見をすることができた。

2年目の授業研究

小学校第5学年 「読書の楽しさを伝えよう - 宇宙をみたよ - (毛利 衛)」

(1) 授業の構想

小学校要領、小学校5、6年の「読むこと」の目標に、読書にかかわることとして「読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる」とあるように、読むことの学習において、児童が学習過程の中で自らの思考の深まりや想像の広がりを実感することが学びの楽しさにつながると考える。そのためには児童が読書を自らの学習課題を達成するための目的的な行為としてとらえ、新しい発見や感動をとめない着実に自らの思考力や想像力の高まりを確認しながら学習を進めていくことが重要である。

しかし、児童の読書活動は個人差が大きく多くの児童が受け身であり、その読書傾向は場当たり的なもので自らの必要感に応じて目的的な読書を行ったり、これまでの読書生活を客観的に見つめたりするまでには至っていないのが実情である。また、学びは自らのなかで思考を深めたり想像を広げたりすることに支えられているが、残念ながらそれらの高まりを十分に実感できているとは言い難い。児童が直感的に分かったと感じていることに光を当て思考力や想像力の高まりに気付かせることが、学びの楽しさにつながると考えた。

そこで、1年目の研究では、物語文を読み、児童が自らとらえたテーマ性をより確かなも

のにするために「比べ読み」の学習指導を行い、テーマについての考えを深めていった。

前年度の実践を受けて2年目は、科学的な読み物から伝わるメッセージを検証するために、より具体的な事例を示してある読み物を探し、本文の内容理解の補助としながら読み進めていく「重ね読み」の学習過程を経ることによって児童が自らの思考力や想像力の高まりを実感することができると考え、本授業を構想した。

(2) 指導の手だて

児童の思考力や想像力を高める活動を生む授業実践の視点として次の五つを設定した。

ア 解決したくなる課題との出会い

(ア) 教材の選択

児童が思考を深めたり想像を広げたりして興味・関心をもって読むことのできる教材を選択することが重要である。そのため、日常の生活体験とも結びつくが、児童がこれまでの知識や体験に頼るばかりではなく、新たな探求心のもと調べてみたくなる科学的な読み物を教材として選択する。

(イ) 思考や想像のよさに気付かせる支援

読後の児童の感想をもとに宇宙人が存在するか否か、地球は宇宙に含まれるか等の話し合いを重ね、調べた事実や友達の意見を取り入れながら思考を深めていく。

イ 思考力や想像力を高めることに役立つ方法の体験

イメージマップ、図式化する、例えてみる、数値化する、証明する、等の方法で抽象的で分かりにくいことが具体的になっていく過程を体験する場面を保障する。

ウ 本文から受けたメッセージの検証

本文から受けた自分なりの筆者のメッセージを分かりやすく書いてある図書資料を探し、内容理解の補助とすると同時に友達に紹介する。直感やなんとなくの背景にある児童自らの論理的な思考に気付かせることが大切である。

エ 「話す」「聞く」「書く」言語活動と関連付けて

毎時間、読み取ったことを、話し合ったり書いたりすることで児童が自らの思考を客観的に受け止めることができるようにする。

オ 学習に生きる評価活動

本時の目標に照らし合わせて、伸びた点を自己評価し、付箋紙を用いて相互評価を行い、前時と変容した自分や友達の姿に着目させ次時に生かす。

(3) 学習指導案

ア 単元名 読書の楽しさを伝えよう

イ 目 標

本文から受けるメッセージと関連した図書資料を選んで読み深め、自分の考えを広げたり深めたりしようとする。 (国語への関心・意欲・態度)

自分の選んだ図書資料のよさとメッセージとのかかわりについて分かりやすく伝え合うことができる。 (話す・聞く能力)

自分の選んだ図書資料について読み手を意識した紹介文を書くことができる。

(書く能力)

メッセージと関連した図書資料を選んで読み深め、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。 (読む能力)

図書資料を読み深める際に出てくるさまざまな語句について、辞書や図鑑を利用して

調べることができる。

(言語についての知識・理解・技能)

ウ 指導計画 (13時間取り扱い)

次	時	学習活動・内容	観点別評価規準〔評価方法〕
1		単元全体の見通しをもち、学習計画を立てる。	(関) 自分の読書生活をふり返りながら、単元の読書資料のテーマ性を考えて進んで読書をしようとする。〔発表、観察、ノート〕
2		「宇宙をみたよ」を読み、筆者の伝えたいメッセージと自分の身近な体験とを結びつけながら、考えを深める。	(読) 筆者の訴えたいことについて具体的事例をもとにして考えることができる。〔ノート、新聞記事〕 (言) 本文に出てくる宇宙に関する語彙や数値などについて辞書や参考資料で調べることができる。〔ノート〕 (話・聞) とらえたテーマと結びつけた自分の考えについて友達とよさを認めながら話し合うことができる。〔話し合い、観察〕
3		「宇宙をみたよ」からとらえた自分なりのテーマを深めるために、関連する図書資料を探し、紹介し合う。 (本時)	(読) 自分なりの課題をもって読書を行うことができる。〔ノート、観察〕 (話・聞) 友達の読書紹介を聞きながら自分の考えや選んだ資料との共通点や相違点をとらえ考えを深めることができる。〔話し合い、観察〕
4		読書紹介パンフレットを作り、編集する。	(書) 読み手の必要感を考えながら、内容の紹介文を書くことができる。〔パンフレット〕

エ 本時の指導

(ア) 目標

読み取った筆者のメッセージをもとに具体的な事例を示す本や資料を紹介することができる。

(イ) 準備・資料

学習計画表・1秒の世界・インターネット資料・提示用写真・国語辞典・振り返りカード

(ウ) 展開

学習活動・内容	支援の手だてと評価(評価)
1 本時の学習課題をとらえる。 毛利さんのメッセージを実感できる本や資料を紹介しよう。	・前時までの学習内容を想起し、読み取った筆者のメッセージをもとに実感できる本や資料を紹介する学習であることを確認する。 ・筆者はどんなことを伝えたいのか確認する。 ・メッセージについては本質をとらえていればそれぞれの児童の読みを大切にする。
2 読み取ったメッセージを伝える。 <児童がとらえた毛利さんのメッセージ> ----- ・地球も一つの大きな生きもの。 ・地球のすばらしさを知ってほしい。 ・地球はいろいろなものがつながりあってできている。 ・地球と宇宙はつながっている。 ・すなおに自分らしく生きていこう。	自然のつながり 食物連鎖、海、大陸、森と海、環境、資源 人間のつながり 家族、祖先、命、国際理解、戦争、社会保障 地球や星と生きものの共通点 生まれて終わりがある 地球のすばらしさ 自然、仲良く協力できる人間
3 読み取ったメッセージと関連する本や資料を紹介する。 (グループ)	・毛利さんの追体験はできないが、伝えてくれたメッセージの意図(なぜ、小学生のわたしたちに)を考え想像す

<p>(1) 選んだテーマとその理由</p> <p>(2) 毛利さんのメッセージをより分かりやすくとらえることのできる本の特長</p>	<p>ることによってその願いに気付かせたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマの共通している友達とグループで本や資料を紹介し合う。 ・紹介する際には、テーマを選んだ理由、テーマと図書資料の関連性など事例をもとに伝えることができるよう支援する。 ・図や表など具体的に分かりやすい手段等を伴いながら本のよさが伝わるよう伝え方の工夫をさせたい。 ・自分の考えを伝える際には、体験や具体的事例に基づいた分かりやすい説明をすることができるよう支援する。 ・友達の話を書く際には、自分の考えと比較させ、自分の考えを広げたり深めたりすることができるよう支援する。 ・アイコンタクトやうなずき等、相手の話を温かく共感的に受け止めながら話を聞くことができるよう支援する。 ・参考になる点について話し手の考えのよさを取り入れながらメモを取るよう助言する。 ・発表の仕方・質問の仕方における声の大きさなど全体に対してどのように配慮すればよいか考えながら話し合わせる。 <p>テーマと関連させながら事例をもとに本のよさを伝えることができたか。 [話し合い、ノート]</p> <p>友達の紹介を聞きながら、メッセージに対する考えを深めることができたか。 [発表、ノート]</p>		
<table border="1"> <tr> <td data-bbox="207 324 422 515"> <p><メッセージ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地球はいろいろなものがつながりあってきている。 </td> <td data-bbox="430 324 766 515"> <p><考えたテーマ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・食物連鎖でつながっている。 ・自然がつながっている。 ・家族や祖先がつながっている。 ・世界の人々がつながっている。 </td> </tr> </table>	<p><メッセージ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地球はいろいろなものがつながりあってきている。 	<p><考えたテーマ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・食物連鎖でつながっている。 ・自然がつながっている。 ・家族や祖先がつながっている。 ・世界の人々がつながっている。 	
<p><メッセージ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地球はいろいろなものがつながりあってきている。 	<p><考えたテーマ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・食物連鎖でつながっている。 ・自然がつながっている。 ・家族や祖先がつながっている。 ・世界の人々がつながっている。 		
<p>4 感想を話し合う。(全体)</p> <p>読み深めたい本(テーマ・書名等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターネット検索 ・やってみたい検証実験 ・周囲の人々へのインタビュー 			
<p>5 学習のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の自分の学びを振り返る。 ・前時の自分と比べてメッセージ内容がよく分かる。具体例とつなげることができる。 			

(4) 授業の考察

児童は自らの読みを大切に、それぞれ筆者のメッセージを受け止めていったが、当初からそのメッセージを実感できたわけではなかった。児童は、調べ学習や話し合いをはじめとしたさまざまな学習過程を経ることで筆者のメッセージを身近なものとしてとらえていった。筆者がこんなことを伝えたいのだろうと推し量ることと身近な体験と結びつけて実感することとは大きな差がある。しかし、「分からない」ならむしろ「分からない」と認識するところから始めることが大切である。児童とともに試行錯誤することによってほんやりとしていたものははっきりと見えてくる、そんな喜びを味わうことが学ぶ楽しさなのだと思った。

そこで本時の学習においては、児童の思考力を拡散的思考力としてとらえた。ここでいう拡散的思考力とは、創造的に思考することで、読んだ内容をもとにして発展させたり、具体化させたりするなどして新たに自分なりの考えをもつことである。

そのために、毛利さんのメッセージを自分の選択した図書資料を媒介として検証し、自分が最も実感できる身近な体験や出来事と結びつけていく。そして、具体化したメッセージを周囲の友達に分かりやすく伝えていくのである。メッセージを分かりやすく説明をすることができるのは自分の中で理解が深まったからできることである。

また、これまで自分が考えていたメッセージとは違ったとらえ方をした友達の考えを聞くことにより、新たな考えを得ることができ、メッセージを実感する度合いが高まっていくとき、児童の思考力は高まっていくと考える。

【思考力の高まり】

メッセージ

物理的につながり

目には見えないつながり

地球は一つにつながっている

読書

海は一つにつながっている

話し合い

日本人が外国人を助ける

ア 解決したくなる課題との出会い

(ア) 教材の選択

宇宙という未知の世界の体験を描いた科学的な読み物であるので、多くの写真等も使われている。想像はふくらむが光や音の速さなど膨大な数値や宇宙の専門用語を伴って表されているため、図鑑や『一秒の世界』、『世界がもしも百人の村だったら』等の資料を参考として読み進めていった。

(イ) 思考や想像のよさに気付かせる支援

読後の感想をもとに「発見したこと」「疑問に感じたこと」「体験したいこと」等について話し合ったが、「宇宙人はいるのか」「地球は宇宙に含まれるのか」ということが話題となり話し合った。

宇宙人はいると思う（4名）	宇宙人はいないと思う（36名）
地球は宇宙の一部（1名）	地球と宇宙は別のものである（39名）

については当初いないという意見が多数を占めたが、調べていくうちに太陽系と似ている星の集まりが存在することを知り、宇宙人の存在が多数派を占めるようになった。

については、論拠を求めるために本文を隅々まで読込んでいった。これについても児童は次第に地球も宇宙の一部であるということに気付いていった。このように話し合いや調べ学習を通して児童の思考は揺さぶられ、想像は広がっていき、地球を含めた宇宙への興味・関心は高まっていった。

イ 思考力や想像力を高めることに役立つ方法の体験

自分でとらえた毛利さんのメッセージが分かる（4名）
大切なメッセージは分かったが意味がよく分からない（36名）

ほとんどの児童は、筆者のメッセージをとらえることはできても、そのことを分かりやすく説明する段になるとほとんどの児童が困難さを感じていた。そこで、メッセージの意味がよく分かると答えた児童が他の児童に説明をした。

【地球はつながっている】 木の蜜を虫が吸い、虫は鳥に食べられる（食物連鎖）
わたしはお父さんとお母さんから生まれ、お父さんとお母さんはそれぞれおじいさんおばあさんから生まれた。
（家系図）

これは具体的な例を用いて説明した例である。誰もが体験する日常の身近な出来事に置き換えた説明に、これまで分からないと首をひねっていた児童が「うん、それ分かる、分かる」と表情を明るくしていった。そこで、友達の思考を自分の中に取り入れるため、イ

メージマップや図を用いて食物連鎖や家系図について自分の考えを深めていった。

ウ 本文から受けた筆者メッセージの検証

児童がとらえたメッセージの主なものを挙げると、地球も一つの大きな生きもの地球のすばらしさを知ってほしい 地球はいろいろなものがつながりあってできている 地球と宇宙はつながり合っていてできている すなおに自分らしく生きていこう等であり、児童は受け止めたメッセージを具体的に表している図書資料を探した。

【支援1】 メッセージを「すばらしい地球人でいよう」と受け止めた児童

受け止めたきっかけは、「いよう」という「呼びかけ」の表現から

C・・・(「すばらしい」の意味を十分理解できず困りきっている)

T 意味を辞書で調べてみたら・・・(調べた後)どんな人になりたいこのクラスで言ったら誰みたいかな。

C (しばらく考えて)先生みたいな人、やさしくて運動のできる人 『二十一世紀に生きる 君たちへ』選択

【支援2】 メッセージを「地球も一つの大きな生きもの」と受け止めた児童

受け止めたきっかけは本文に掲載された「写真」から

C 地球の風景が動物や虫の細胞に似ていてすごい、確かめてみたい

T 顕微鏡で確かめてみようか(塩の結晶、花粉)

C (観察の後)メロンと人の血管も似ている 『いのちって何だ』選択

【支援3】 メッセージを「地球は一つにつながっている」と受け止めた児童

C 人と人もボランティアでつながっているのかな。

T 図で描くとどんなふうになる。

C (図で示して)こんなふうかな。

T どんなことがボランティアだと思う。

C 自分だけで考えていてはつながらないから困っている人を助けて役立ったとき国境なき医師団とか、だれかのために役立つこと。

あっ、矢印は両方から出てくるね。ありがたいの気持ちがあるから。

(の図を示して)つながっている…。『インターネット』資料検索

エ 「話すこと・聞くこと」「書くこと」の言語活動と関連付けて

思考力を高めることは、相手意識や目的意識をもって、「読むこと」に「話す」「聞く」「書く」活動を組み込んでいくことが重要になる。

ブックトークに伴う話し合いを経るうちに、児童は地球のつながりが具体的で身近なつながり(物理的つながり)から、次第に目には見えない抽象的で重要なつながりに気付いていった。というのは、地球が横は海でつながっているのだが(漂流物が証明してくれる)、見えない人の心でもつながっている(杉原千畝が外国の人を助けたこと)ということであるらしい。縦は自分たちが身近な先祖とつながっているが遠くは多くの祖先とつながっていて、数えていったら何百万人になる。ある児童の人類の始まりはたった一人のアフリカの女性からという説を聞くと、世界中が見えない系でつながっていることを実感し始めていった。特に前述の『二十一世紀に生きる君たちへ』を選んだもう一人の児童は「友人が歴史の中にいる」と書いた部分が印象に残ったと伝え、話し合いの中で目に見えないつながりの重要性に気付いていった。

また、世界地図の上を線で結んでいく児童、座標軸のように縦と横を結ぶ児童など、話

し合いを聞きながら自分なりの実感を出せずにはいられない様子であった。

ここで、興味深く感じたことは、「地球のつながり」について、前述ウの指導の手だてでいったん拡散的に広がった思考が、ここでの話し合いにおいてまた収束していったということである。児童なりに何か自分たちのレベルで理解を深め、一つの定義を打ち出していたのではないかと考える。

オ 学習に生きる評価

評価の実際は、児童一人一人の学習状況に応じて助言や称賛ができるよう、座席表型の評価表を使い児童の変容を累積して思考の深まりを追っていった。毎時間どのくらい筆者のメッセージが分かっていたのか自己評価させた。また、なぜ分かったのかその理由やきっかけを大切にしよう働きかけた。そのきっかけは具体的な数値であったり友達の示した例であったりした。次時にはそのきっかけを大切にして思考していくこととなる。また、そのきっかけをヒントに新たな考えが生まれていくのであるから、考えるための道具の取り扱いに気付かせることが大切であると考えた。

表 児童の変容

A男の振り返り	教師の助言	A男の変容
夜になったりするから地球が生きているということはなんとなくわかるけれど、よく説明できなかった。	大切なことに気付いてきたよ、地球が昼や夜になったりするのはなぜかな。あなたは、次のものが生きていると思いますか。 空、雲、雨、風、木	・空は生きている(夜や昼になる)。 ・雲は生きている(動きがある)。 ・雨は生きている(水は動く)。 ・風は生きている(ういている)。 ・木は生きている。(水をもらう) 動いているものは生きているということに気付いてきた。
B子の振り返り	教師の助言	B子の変容
わたしは、地球は宇宙の一部だから太陽は地球のなかまでつながっていると思った。でもよくはわからない。	わたしたちが太陽から助けられていることはあるかな。	地球には人間や動物がいて、人間は野さいを食べるけれど、その野さいをそだてるのは宇宙にある太陽がそだてる。だからつながっている。 抽象的なことが自分の中で具体的に実感されていった。

学ぶということは、思考力が高まり知的な活動が旺盛^{おう}になった自分に出会えることである。昨日とは違った自分に出会うことができるそんな喜びを味わうことが学ぶ楽しさであると考ええる。

【授業研究2】 中学校第3学年「読むことの学習－『故郷』（文章を読んで人間の生き方や社会のあり方について考え、自分の意見をもつ。）」

(1) 授業の構想

中学校の最終学年も中盤を迎えたこの時期は、部活動や生徒会活動等も一段落し、自分自身とじっくりと向き合い始める時期でもある。社会とのかかわりの中での自らの在り方を考えたり、自らの生き方そのものと真剣に向き合ったりと、内面的にも大きく成長することのできる時期でもある。一方、このような内面的な思考をする習慣が付いておらず、他律的な生き方、安直な選択の積み重ねによる生き方に終始している生徒がいることも事実である。このような時期に、思考する、想像するという力に目をむけ、その力を高めていくということを中心としていくことがいかに大切なことであるかということは、先に出された文化審議会国語分科会からの報告「これからの時代に求められる国語力」においても明らかである。^{注1)}

先日、校内テストで、ある状況における主人公の心情について「想像して書きなさい。」という設問を設けたところ、平易な問題であるにもかかわらず、思いのほか正答率が低かった。「想像して」という言葉が、正解は一つというテストのもつイメージとそぐわない点もあるが、無答、誤答が多かった。「主人公の気持ちを想像しなさい」、「情景を想像しなさい」といった発問は、これまでの国語科の授業において当たり前になってきたようにも思う。現行の中学校学習指導要領において、詳細な読みに偏らないように示されているが、「想像すること」は大切なことと考える。

思考する内容、想像する内容はもちろん大切であるが、多少的はずれではあったとしても、思考する、想像するという行為そのものに意欲的に取り組ませたい。たとえつじつまが合わなくとも、思い切り背伸びをして思考させたり想像させたりしたりしながら、自信をもって、自分の考えを発表したり、まとめたりしていけるような授業を構想したい。

注1) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm

(2) 指導の手だて

ア 思考力、想像力の現状から（生徒の初発の感想を基にしたの考察）

— 読後にA子がまとめた感想 —

小さいころに目を輝かせて「私」にたくさんのお話をしてくれたルントーが、久しぶりの再会で一言目に、「だんなさま！ ……」と言ったので、「私」までハッとしてしまった。お互い、小さいころは友達だったのに、身分によってこんな壁ができるなんて悲しい。「故郷」には、「私」の心情だけしか書かれていないが、自分をおさえなければならぬルントーの方がもっと悲しく、つらいのではないかと考えた。

A子のように、大部分の生徒が、「悲しむべき厚い壁」ができた原因はルントーと「私」の間にある身分制度や境遇の違いであるととらえ、その解決に向けて努力することが「私」の希望であるという感想をまとめている。これは、社会の体制の問題点には気付けても、その中で生きる人々の思いを推し量ろうという読みの視点に欠けているためである。社会制度といった体制の問題ではなく、その社会の中で虐げられながらも生きていかなければならない一人一人の生き方、考え方に迫らせていくような指導計画が必要である。

イ 思考・想像する意欲の喚起・継続を図る

思考する、想像するという活動のためには、意欲をもって取り組めるような学習の場を創造することが大切である。思考する力、想像する力は、漢字の書き取りのような機械的

な反復練習などで身に付けられる力ではなく、主体的に取り組むことによって初めて伸ばすことのできる力である。面白そうだ、力が付きそうだ、考えてみたいといった思いや願いを喚起・継続することができるような場面を単元の様々な場面で提示できるような指導計画を立て、学習に取り組ませることが必要である。

ウ 思考力、想像力を高める

思考力と想像力については、次のように考える。

思考力とは答えが一つに収束していくような、いわゆる収束的なものを指す。

想像力とは答えが一つに収束するとは限らず広がり拡散していくものであり、またそこに至る過程も様々であるものを指す。例えば、作品の主題に迫る学習は、テーマはある程度一つのものに収束していく場合もあるが、そこに迫る道筋は多様なものであるため、想像力を高めるための学習ととらえる。想像するとは、勝手な思いつきをすることではなく、テキストを必ず根拠とし、それを基に発想することが必要である。

エ 思考すること・想像することの内容の多様化・深化を図る

例えば、「私」とルントーとの再会の場面での二人の心情を想像する上で、A子がまとめたような類型的なものに終始せず、さらに深く二人の心情に迫らせていくことが必要である。また、これまで自分では気が付けなかった新たな観点を持たせ、その観点で作品に迫らせることも、生徒に思考力、想像力を発揮させる有効な手段となる。

これまでと異なった観点や新しい観点で作品に迫らせるためには、別の作品における同じ様な状況におかれた登場人物の心情と比較することも有効である。例えば、貧しさの中で心を麻痺させたり、野放図に走ったりする人々を愚かな人々と決めつける一面的な見方から解放するために、芥川龍之介の「羅生門」で、生きるか死ぬかの選択の結果、盗人になるうとも生きることを選択した下人の姿を重ね合わせて考えさせたりすることである。

さらに、教室において、生徒同士が互いに自分の読み取った事柄を交換し合うことも、その場で思考力、想像力を発揮させる学習環境を作り出すことにつながり、思考力、想像力を高めていく上で欠かすことのできない学習といえる。

オ 評価を工夫し一人一人の学習活動に生かす

思考力、想像力は、思考している内容、想像している内容が直接目に見えるものではない。そのために、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」といった関連した言語活動によって評価していかなければならない。

言語活動として「書くこと」を関連づけたのは、読むこと、読んで考えるということは、自分で考えたことの内容を、書くことを通して初めて確認することができるからである。また、書くことを通して、自分の考えを確認しながらさらに深めていくことが可能だからである。必要な情報であると思われる場所に付箋紙を貼らせたり、読み取った内容や課題を追究した事柄をワークシートにまとめさせたりすることで、思考、想像した内容をとらえ、具体的な支援に生かしていく。

「話すこと・聞くこと」を関連づけたのは、「読むこと」と同じく、相互に意見を交換し合うことで、自分の考えを確認したり、深めたりすることができるからである。中学校第3学年という時期であることから、知的好奇心を十分に高めることで、発表しやすい雰囲気作りにも努めたい。

また、生徒一人一人がそれぞれの「故郷論」をまとめるということは、それぞれに学習

のゴールを設定できるということでもある。相互に比較すれば一人一人の深淺の違いはあるが、それぞれに力を発揮し、充実感をもって単元の終末を迎えるように支援をすることが大切なことである。

(3) 学習指導案

ア 身に付けさせたい言語の力（目標）

- 一つの作品を読む過程において、登場人物や社会状況について考え、自分の意見をもつことの面白さを知る。（国語への関心・意欲・態度）
- 文章を読んで人間の生き方や社会のあり方について考え、自分の意見をもつことができる。（読む能力）
- 作品を支える一つ一つの言葉に着目し、イメージを広げることで、作品の魅力により深く迫ることができる。（言語についての知識・理解・技能）

イ 単元 自分の感想を深めよう（教材「故郷」（魯迅） 東京書籍）

ウ 指導計画（13時間扱い）

次	時	学 習 活 動	支 援 の 手 だ て	評 価 の 観 点
第一 次	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	○既習事項をもとに作品を概観する。 ・情景描写 ・人物設定 ・心情 ○読み進める中で、気になる表現にはすべて付箋紙を貼ったり傍線を引いたりしておく。 ↓ 追究課題をつくる活動につなげる。	・読解が目標ではないので、詳細な読解にならないように留意する。 ・必要な場面を取り立てて、歯切れよく進めていきたい。 ・長文なので、時間は余裕をもって確保する。 ・ワークシート、ワークブック等で確認する。 ・どこを気にしたらよいか難しい。滞っている生徒には、印象に残った場所を確認させたりして自分の思いを確認させ付箋紙を貼らせる。 ・さらに読み深められる生徒には、作品を通読し、主題は何かを想起させ、その上で主題追究に必要と思われる部分に付箋紙を貼らせる。 ・一つ一つ吟味させずに、手際よく、気になること自体に主眼をおく。	○作品の情景や人間関係、心情について概観しているか。（ワークシート・ワークブック） ※捉え方の深淺は問わない。それは第三次で行う。 ○作品を読み進めていく上で、気になる表現を指摘することができたか。（再会の場面、旅立ちの場面、変わり果てた旧友、近所の人々といった所に付箋紙が貼られていればよい。）
第二 次	5 （ 本 時 ） 6 ・ 7	○第一次で付箋紙を貼った事柄をもとに、登場人物や社会状況について考え、自分の意見をもつ。 例「悲しむべき厚い壁」 「希望」	・考える材料は、本文全般にわたって用意されている。それらの情報を動的に扱いながら思考を進めることが求められる。前時までに付箋を貼りながら収集した情報を、指導者が適宜つないで見せ、どのように考えを進めていったらよいかを具体的に提示したりしながら、学習の進め方を確認する。	○文章を読んで、登場人物や社会状況について考え、自分の意見をもつことができたか。
第三 次	8 ・ 9 ・ 10	○第二次で考えた事柄をもとに、別資料を読み進める。 ○資料にも付箋紙を貼ったり傍線を引いたりしながら読み進める。 資料HP「おがまんと魯迅(ル・シュン)」	・量が多いので、細部にこだわらずに、できるだけたくさんの付箋紙を貼ること、傍線を引かせることを目標に取り組みせたい。 ・滞っている生徒には、教科書に貼った付箋紙の箇所が資料中のどこに記されているかを指摘し、その場所を中心に読ませていく。	○たくさんの情報から自分にとって必要な情報を見つけ出すことができたか。

第四次	11 ・ 12 ・ 13	○付箋紙を貼ったり、傍線を引いたりしながら、自分がまとめたテーマについて絞り込んでいく。 ○テーマと資料が調べてきたら、“私の「故郷論」”を書く。	・書くことによって理解が不十分な点、情報がさらに必要な点に気付かせる。その都度教科書に立ち戻らせたり資料を読ませたりして、足りない点を補完させていく。 ・具体的に必要な場所を指摘してやることも必要であろう。 ・書くことの苦手な生徒には、書き方のフォーマットを示す。	○見つけ出した情報を基に、自分の意見をまとめることができたか。
-----	--------------------------	--	--	---------------------------------

エ 本時の指導

(7) 本時でつけたい言語の力

文章を読んで、登場人物や社会状況について考え、自分の意見をもつ。(中学校要領内容C(1)エ参照)

(4) 思考力や想像力について

出会う前までは互いに心を引かれあっていた二人が、隔たった境遇という現実の前に互いに隔絶せざるを得なかった。それぞれの心情を想像し、「悲しむべき厚い壁」について考える。

想像力にかかわる叙述	<p>○彼は突っ立ったままだった。喜びと寂しさの色が顔に現れた。唇が動いたが、声にはならなかった。最後に、うやうやしい態度に変わって、はっきりこう言った。「だんなさま！ ……」</p> <p>私は身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。私は口がきけなかった。</p> <p>○心情を想像させていく上での根拠となる表現（△：30年前 ▲：現在）</p> <p>△おまえも来いよ。</p> <p>△ああ、ルントーの心は神秘の宝庫で、私の遊び仲間とは大違いだ。こんなことは私の友達は何も知ってはいない。</p> <p>△すいか畑の銀の首輪の小英雄</p> <p>▲苦しみを感じはしても、それを言い表すすべがないように、しばらく沈黙し、それからきせるを取り上げて、黙々とたばこをふかした。(中略) みんな寄ってたかって彼をいじめて、でくのぼうみみたいな人間にしまったのだ。</p> <p>▲ルントーのように、打ちひしがれて心が麻痺する生活</p> <p>※「ヤンおばさん」の作品中での役割も同様</p> <p>▲忘れたのかい？ なにしろ身分のあるおかたは目が上を向いているからね……。</p> <p>▲こんながらくた道具、邪魔だから、あたしにくれてしまいなさいよ。あたしたち貧乏人には、けっこう役に立ちますからね。</p> <p>▲おやおや、まあまあ、知事さまになっても金持ちじゃない？……ふん、だまそうたって、そうはいきませんよ。</p> <p>▲やけを起こして野放図に走る生活</p>
------------	---

(ウ) 展開

学習活動	支援の手だて・評価
<p>1 本時の学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;">二人の間を隔てた「悲しむべき厚い壁」について考えよう</div> <p>【身に付けたい言語の力】</p> <p>文章を読んで、登場人物や社会状況について考え、自分の意見をもつ。</p> <p>2 「悲しむべき厚い壁」について考えるにあたって、押さえるべき表現を確認する。</p> <p>30年前のルントーと現在のルントー</p> <ul style="list-style-type: none">・外見の相違・内面の変化 <p>「銀の首輪の小英雄」,「神秘の宝庫」</p> <p>「でくのぼう」,「心が麻痺」</p> <p>ヤンおばさんの態度</p> <p>ホルンとシュイシヨンの作品上の役割など</p> <p>3 各自がまとめた「悲しむべき厚い壁」について発表し合い、自分の考えを確認したり、修正したり、補足したりする。</p> <p>ルントーに非があるとした意見</p> <p>「私」に非があるとした意見</p> <p>社会の在り方に非があるとした意見</p> <p>4 本時の学習を振り返り、また、次時の学習課題を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none">・学習課題だけでなく、課題を追究することで身に付く言語の力についても、しっかりと自覚させた上で学習に取り組みせなければならない。・前時までに収集した情報をもとに、「悲しむべき厚い壁」について自分の意見を構築していくことを通して、身に付けたい言葉の力に迫らせたい。・「悲しむべき厚い壁」について考える材料は、本文全般にわたって用意されている。それらの情報を動的に扱いながら思考を進めることが大切である。前時までに付箋紙を貼りながら収集した情報を、指導者が適宜つないで見せ、どのように考えを進めていったらよいかを具体的に提示する。・正誤よりも、生徒が課題に対して考えを進めていくこと、それに伴って言語活動が行われていくことに主眼を置くよう、指導者も心がける。 <p>【評価】思考力、想像力は、言語活動に現れて初めて評価し得るものである。よって、評価は、作業プリントへ引かれた傍線や付箋紙の状況、書かれた考えをとらえることにより行う。</p> <ul style="list-style-type: none">・はじめは、隔絶の原因が、ルントーに個人の責任にあるととらえる生徒も多いだろう。「いくら相手が金持ちでも昔の友達を“だんな様”なんてひどい」などというものである。ここから、境遇の差、貧富の差から生ずる疎隔に目が向けられるよう、付箋紙を貼った場所について、一緒に考えていきたい。・学習活動が言語活動として顕在化していない生徒についても、同様に付箋紙を貼った場所をいくつか取り上げながら一緒に考えることで、学習意欲の継続に努めたい。・意見の交換に際しては、根拠を明らかにしながら話し合ったり、納得の声が出たりするなどの、言葉がたくさん行き来するような場としたい。・ただし、本文の内容からはそれほど多くの材料は集まらないので、話し合いの深浅については問わないものとする。自分の考えを確認したり、修正したり、補足したりすることを目的とする。・意見交換が十分に行われないうであれば、それは読解が不十分であることが原因の一つに考えられるので、再度考えるための材料を指し示し、考えを進めさせる。場合によっては教師による解説を多く用いる。(これは、次時における課題)・振り返りは、自己評価による。次時の学習も、本時と同じ言語活動が主となるので、本時の学習の達成感を次時の学習活動への意欲の喚起につなげたい。

(4) 授業の考察

ア 単元の導入時

「故郷」は、一人一人の登場人物の役割や行動、一つ一つのせりふに重要な意味が込められていたり、途中で回想場面が挿入されていたりと、内容を理解することが難しい作品である。詳細に読ませる必要のある場面もあるが、作品全体を概観させ、理解させることが、本単元のねらいに迫るために重要である。

まず、ワークシートによって、自分の追究課題を見つけることを目的として読ませながら、疑問点や興味をもった点を指摘させた。生徒から出された疑問点、興味をもった点を学級全体で扱うことで、作品を読み込んでいく上で必要な事柄を理解させた。扱った事柄は、現在の場面から回想の場面に移る時間の流れ、30年前のルントーと今のルントーの違い、ヤンお婆さんの態度、ホンルとシュイシヨンの作品上での役割、ルントーの希望と私の希望との比較などである。これらの事柄を確認させながら、当時の社会の中で虐げられながらも生きていかなければならない一人一人の生き方、考え方に迫るための材料を生徒に提示していった。

また、それらの事柄を理解するための情報は、本文中の諸所にあるので、その場所ごとに付箋紙を貼らせたり、傍線を引かせたりした。そうすることで、ページの流れにとらわれず、また必要な情報を埋没させないようにして、それぞれの学習課題に迫るための必要な情報を動的に扱えるようにした。付箋紙をどこに貼ったか、何枚貼ったか、傍線をどこに引いたかを見ることは、生徒の理解の状況をとらえる上で役に立ち、一人一人の学習状況に即した指導をする上で有効であった。

イ 思考すること・想像することの内容の多様化・深化を図る

生徒のまとめるワークシートを見ている限り、(2)-アに記したとおり、そこに生きる人々の思いに迫る視点をもって作品に迫ることは難しかった。「私」やルントー、ヤンお婆さんの心情に迫らせるために、思考すること、想像することの手だてとして、「故郷」に関するいくつかの作品を提示した。

「羅生門」を取り上げ、主人公である下人の選択について考えた。「故郷」の登場人物であるルントーやヤンお婆さんが、それぞれに打ちひしがれて心が麻痺したり、やけを起こして野放図に走ったりすることも、道徳的な価値観だけでは推し量ることのできないことなのではないかということを確認した。1年生で学習した「カメレオン」を振り返り、体制の中で盲目的に生きることしかできない民衆とルントーの姿とを重ね合わせた。また、A子のワークシートには次のようなコメントを入れた。「　　さん、この作品の結末は明るいものだと思いますか。それとも実現するにはとってもたいへんな暗い（結末の）ものだと思いますか。」

他の作品を取り上げ、「故郷」と関連づけて考えさせたり、思考・想像を深めさせるようなコメントを入れたりすることによって、生徒の学習意欲は大変高まったことが確認できた。

ウ 意見交換による思考力、想像力の高まり

自分の考えがある程度深まった上で、それらの考えを基に意見交換を行った。これまで思考力、想像力を発揮し、深めてきた自分の考えではあるが、級友と相互に意見交換をすることによって、さらに自分の考えに検討を加えていくことがねらいである。これまでは、

自分一人で、書くことを通して思考したり、想像したりしてきた。しかし、話し合いの場においては、新しい情報が行き交い、思考力、想像力がさらに高められる場であると言える。

課題は、「私」と「ルントー」の二人の間を隔てた「悲しむべき厚い壁」についてその原因を考えることであった。A子はその原因を「私」の中にあるととらえ、以下のような発言をしている。

— A子の発言（一部書き改め） —

なんか、前の、同じように見えていた（気持ちを通じ合っていた）ルントーじゃなくって、...向こうも（「私」も）別の人として見ているんじゃないかと.....ただ、.....貧しいから同情してるって言うか...
...貧しいから辛いからみたいな.....ルントーは「私」に会った時うれしかったんじゃないかなあ.....
なんか、友達として見てもらいたかったんじゃないかなあっていうのもあるし.....

ルントーやヤンおばさんのようなどん底の生活を送っている人々と「私」との境遇の違いについて述べたものである。「『私』自身の中には無自覚のうちに傲慢さが潜んでいる。それをルントーたち貧しい人々は直感的に感じ取ってしまったのではないのか。」A子の発言は、このような文脈の中で語られている。先の初発の感想で書かれた「身分によってこんな壁ができるなんて悲しい。」と比べて、読みの深まりが見られる。

A子は最後に、「壁の材料」と題し、以下の意見文をまとめた。

— A子の作文（抜粋） —

（前略）二人の間の壁、それは身分や金銭面の違いもあるが、何よりも、その違いに対する二人の考え方が原因なのではないか。ルントーは「私」に対して多少なりとも妬みや羨望の気持ちをもっているだろうし、「私」の方でもルントーを見下しているところがある。この考え方を二人に植え付けたのは、二人が暮らしてきた中国の社会ではないか。（以下略）

エ 評価を学習活動に生かす

先に述べたように、思考力、想像力は、直接目に見えるものではない。そのために、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」といった関連した言語活動を取り入れて評価をしていくことが必要となる。「話すこと・聞くこと」の活動としては、「悲しむべき厚い壁」を課題とした話し合いの場を設けた。「書くこと」の活動としてはワークシート等を積極的に活用した。

例えば、A子が書いた「身分によってこんな壁ができるなんて悲しい。」という叙述に対しては、「社会の体制だけでなく『私』や『ルントー』などその中に生きる一人一人の生き方に問題はなかったか」等のコメントをした。それらのコメントについては、時間の許す限り記録し、次時の机間指導での支援や話し合い活動での意図的指名に生かし、思考力、想像力を高めるための手だてとした。

- 【授業研究3】 高等学校第1学年 国語総合 「様々な文章を読んで自分の考えを深めよう - 私家版「おんなの鬼」の研究 - 」
 高等学校第2学年 古典 「随筆 『枕草子』 - 評価語（批評の言葉）を中心に読もう - 」

1年目の授業研究

高等学校第1学年 国語総合 「様々な文章を読んで自分の考えを深めよう - 私家版「おんなの鬼」の研究 - 」

(1) 授業の構想

教育課程審議会答申（H10.7.29）では、「目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する」と述べ、「読むこと」の領域が重要であるとしている。また、経済協力開発機構（OECD）による読書傾向調査で、日本の高校1年生は漫画や雑誌など短い文章を読む生徒の割合が加盟27か国の中で最も高く、小説など長く複雑な文章を読む生徒の割合は最低であることが分かった（2003.9 OECD）。現在、読書習慣や読書量の減少はもとより、一つの文章をじっくり読むことや、様々な文章を比べて読む習慣が失われつつある。思考力や言語の能力の育成において、重要な力となるのは、「読むこと」の授業である。そこで、「読むこと」の授業構想として、生徒にとって身近なおとぎ話や民間伝承などでなじみのある「鬼」をもとに、様々な文章を読み比較することを考えた。

(2) 授業実践

ア 単元について

「鬼」は古来より様々な形で伝承されてきた。架空の生き物ではあるが、子どものころより様々な形で触れてきた身近な生き物である。そして、それは常に嫌われ者のイメージをもっている。しかし、それとは別に、美しく優しく、時に哀しい存在であるという鬼の姿がある。馬場あき子の「おんなの鬼」を通して生徒にとって新たな鬼の存在（鬼女）を読み取らせたいと考えた。また、同じ馬場あき子の『鬼の研究』やその他の鬼に関する文章を参考に、様々な観点から「鬼女」を中心に考察を重ねる。

イ 目標

ア	様々な文章を目的に即して、読み味わおうとする。（関心・意欲・態度）
イ	文章を表現に即して読み味わい、他の生徒との読みの交流を通して自分の考えを深める。（読む能力）
ウ	様々な文章を読んでものの見方、感じ方、考え方を広げたり、深めたりする。（読む能力）
エ	語彙を豊かにするとともに、表現の工夫について理解する。（知識・理解）

ウ 指導と評価の計画（全7時間）

時間	各時間の目標	主な学習活動	各時間の具体的評価規準及び指導の手立て
事前準備	1 「鬼」に関する個人の学習課題設定をする。 2 それぞれの方法で研究レポートを作成する。	1 夏季休業中の課題として自己テーマのもと「鬼の研究レポート」を作成する。 (1) ヒントプリントをもとに、個々の興味あるテーマでレポート作成をさせる。 <ヒント例> 古文・漢文の中の「鬼」 古典芸能の中の「鬼」など (2) 図書室やインターネットなどの情報手段の効果的な利用法を支援する。	目的に即して、文章を読み味わおうとしている【関】 【指導の手立て】 ・テーマから浮かぶことを整理させ、自分の興味あるものは何か考えさせる。 様々な文章を読み、比較し、自分の読みを深めている。 【読】 【指導の手立て】 ・情報の見つけられない生徒には、興味をもちそうな本やテーマを提示する。また、比べて得た情報などを対話の中で考えさせる。 【評価方法】・レポートの確認 ・自己評価

1	1 「おんなの鬼」を読み初読の感想を書く。	1 夏季休業中の課題の振り返りをする。 2 「おんなの鬼」を通読する。 3 初読の感想や興味をもった点などをワークシートに記入する。 4 「おんなの鬼」研究の手だてを知り、個人研究か、グループ研究をするか選択する。	文章を叙述に即して的確に読み取っている。【読】 【指導の手立て】 ・夏季課題で行ったレポートを振り返らせ、新たな鬼の文章と取り組ませる。 ・初読の素直な感想を引き出すようにさせる。 ・今後の学習の目的や方法を分かりやすく提示し、意識づけを図る。 【評価方法】・観察（机間指導、発表）・ワークシートの確認
2	1 グループごとに、研究テーマを確認する。	1 グループごとの課題設定を確認する。 <テーマ例> 人間の中にひそむ鬼たち 鬼の中の優しさ、美しさとは 女の鬼と男の鬼の違いはどこに など	語句の意味を正確に捉え、文章に描かれたことを読み取っている。【読】 【指導の手立て】 ・筆者の考え、ポイントになる言葉を見つけ出し、アンダーラインを引かせたり、付箋紙を使用させる。 ・テーマに即した、グループ内の意見を十分出し合い、まとめるようにさせる。
5	2 比較する本を選び、内容を整理する。比較読みをし、まとめる。 3 グループごとに発表形態を考える。 4 発表資料を作成する。 (本時は第4時)	2 ワークシートに従って、各グループで読解を進める。 3 発表資料を作成する。 (1)グループ内の読みが、他に伝えられる発表内容になるようにする。 (2)発表の割り振りや時間内の発表ができるようにするなど、グループ内で打ち合わせをする。	様々な文章を読み、比較し、自分の読みを深めている。【読】 【指導の手立て】 ・資料のどの部分が必要かを明確にするようにさせる。 ・情報を整理し、グループでまとめた最初の意見と比較させる。 ・レジュメの下書きやレジュメの表現などについては、個別に机間指導する。また、提出させ指導する。 【評価方法】・観察（机間指導、発表） ・ワークシートの確認 ・発表レジュメの確認
6	1 発表会を行い、相互評価する。	1 各グループによる発表会を行い、交流し、深める。 2 相互評価をする。	他の生徒との意見交流を手がかりに、自分の考えを深めている。【読】 【指導の手立て】 ・自分の意見と比較しながら、優れている点、気の付いた点を自由に書かせる。 効果的な表現の工夫について理解している。【知】 【指導の手立て】 ・教師側の講評の中で、適宜助言をする。 【評価方法】・観察（机間指導、発表）・自己評価・相互評価
7	1 発表会を振り返りながら、もう一度「おんなの鬼」を読む。	1 発表会の感想一覧を配布し、他者の意見や気付きを再確認する。 2 新たな「読み」の確認をする。 3 自己評価をする。	文中の語句の意味を理解し、語彙を豊かにしている。【知】 【指導の手立て】 ・学習過程の再確認ができるようにする。 【評価方法】・観察（机間指導、発表）・後日、定期テスト

(3) 指導の手だて及び授業の考察

ア 様々な文章を読んで比較する学習の場の設定

夏季休業中から10月初旬の実際の授業まで、長い時間をかけて行った単元の学習である。ふだん「読むこと」を面倒に思う生徒も多く、どの程度文章と向き合い学習ができるかという不安はあった。しかし、生徒たちは、実に熱心に文章を読み比較・検討をしていた。まず事前学習として、夏季休業を利用し、「鬼」というテーマで、図書やインターネットを利用した研究レポートを作成させた。その際、「調べるためのヒント」を書いたプリントを配布した。このレポートは、どの生徒がどれだけ興味・関心を抱きながら「鬼」というテーマに臨んでいるかを把握し評価することがねらいだった。生徒は、実に様々な「鬼のレ

ポート」を作成した。(例：鬼に関することわざ・四字熟語、鬼の字義、節分の鬼、鬼退治伝説、羅生門の鬼、など) この事前学習を行ったことにより、生徒の授業への関心も高まったようである。そのことは、「鬼について調べることで、その知識を授業の中に取り入れられたと思う。」「全国に伝わる鬼に関する情報などをあらかじめ調べていたため、鬼の授業を始めることへあまり抵抗や違和感がなかった。」という生徒の感想からもうかがうことができる。



グループ指導の様子

その後、生徒は「おんなの鬼」(馬場あき子)という文章を読み、「鬼」のイメージを覆すもう

一つの鬼の見方を知る。そして、「おんなの鬼」とその他の文章を比較し検討する。その過程で、多元的なものの見方、感じ方をすることができたと考える。また、様々なジャンルの「鬼」に関する書籍を指導者が用意することで、新たな「読み」への興味をもたらすことができた。

学習形態は、個人学習・グループ学習を希望する生徒を把握し、初読の感想をもとにグループを作成した。比較的感想の似ている生徒を集めることで、グループ内の意見統一を図りやすく、比較読みをするにあたって作業が進めやすいためである。

比較読みの対象文章として『鬼の研究』(馬場あき子) 40冊その他『鬼の系譜 わが愛しの鬼たち』(中村光行)『おにたのぼうし』(あまんきみこ) など27冊の書籍を用意した。比較読みをする本は、各グループ1～3冊ぐらいを選んだ。比較をする作業に、当初戸惑いを見せた生徒もいたが、時間の経過とともに率先して文章と向き合う姿が見られた。他の文章と比較をするという作業は、とかく一方向に限定されがちな「ものの見方、感じ方」を、多元的なものへ広げ、深めるという効果があった。

イ 指導と評価の一体化を図る指導の工夫

「おんなの鬼」の初読の感想から、それぞれの関心のもち方を把握し、各クラス12グループを作成した。そのグループが、それぞれ異なるテーマで比較読みを行った。そして、毎時

- ①人間の中にひそむ鬼たち ②鬼の中の優しさ、美しさとは ③女の鬼と男の鬼の違いはどこに
- ④鬼になるまでの女の心の変化 ⑤日常の中の鬼の存在 ⑥女が鬼に変貌する時 ⑦『今昔物語』に登場する鬼女
- ⑧奥州黒塚の鬼女伝説を考察する ⑨紅葉狩の鬼女と奥州黒塚の鬼女比較 ⑩鬼と女の対極性、鬼と女の類似点
- ⑪現代のおんなと古典のおんなの鬼との比較 ⑫女はなぜ鬼になるのか ⑬鬼になるきっかけとは
- ⑭鬼になった女は元に戻るのか

資料1 グループテーマ案

学習の手引き(ワークシート)や、レジュメを回収し、指導者の助言・評価を加えて返却することで、短時間での学習のまとめができるようにし、同時に各グループの進度を把握した。また、自学自習を進めやすいワークシートを工夫することで、学習支援を十分にできるようにした。

グループ活動の途中で、よい考え方や発想・話し合いの内容に出会った時は、指導者側が紹介し他のグループに返した。さらに、グループ内においても、その活動中に興味深い発言

をした人，残念ながら発言できなかった人など活動内容を相互評価させ，活動の活性化を図った。個別評価とグループ評価を同時に行うことで，学習意欲が喚起できた。

指導者は，作業の遅れ気味なグループ・生徒を常に把握するようにし，そのようなグループや生徒には，個別指導を行い，共に検討することで具体的な方法を引き出した。発表会や振り返りの段階で「評価表」を用いた。「自己評価」と「相互評価」をするため，発表会においても注意深く聞くことができ，自分の考えを深めることができた。また，それぞれが評価を学習に生かすことができ，生徒の意欲的な授業参加につながった。

ウ グループの相互交流会の工夫

生徒の学習交流の場として，相互交流の発表を行った。各グループ（平均12グループ及び個人）が，それぞれ違うテーマで比較読みを行ったため，他のグループに意見を知らせるという目的がはっきりした。レジュメの作成の仕方や，発表の方法を説明し，時間内に他のグループに自分たちの読みが伝わるよう工夫させた。例えば，テーマについてのグループの意見，比較読みした文章，比較読みした結果などである。このことは，他のグループの発表を興味深く聞く



発表会の様子

ことにもつながった。発表会をすることで，テーマも異なり，比較した文章も異なるが，結果は同じになる場合や，目新しい意見に出会い，さらに読みの深まりを感じることができた。つまり，自身の読みと比較し，また新たな考えを深めることができたようである。

2年目の授業研究

高等学校第2学年 古典 「随筆 『枕草子』 - 評価語（批評の言葉）を中心に読もう - 」

(1) 授業の構想

1年目の研究において，様々なものを比較する活動，具体的表現活動，グループ学習の導入が，思考力の深化や想像力の広がりにつながることが分かった。2年目の今年は，古典の授業でそれらを取り入れることができないかと考えた。古典の授業は，とかく文法事項の知識の習得に重点をおいた学習や，現代語訳に心血を注いだ詳細な読解指導に陥りがちである。そのような学習を改め，言語活動を重視した学習方法や，生徒が活動する場を多く取り入れ，自ら古文に接する授業工夫をしたいと考えた。生徒も現代語訳をすることができれば，古典の学習は終わったという向きがある。生徒の多くは，現代語訳がある程度できる。そのため，文章の内容を理解しているものと思っていた。ところが，「出家する」と辞書にあり，それを「家出」と考えていた生徒がいた。辞書を引いて意味をつかんだつもりでいても，言葉の意味が分からず，分かったつもりでいることが多いのではないだろうか。生徒が実のところ，どこまで言葉を理解しているのか改めて確認する必要があると感じた。また，文脈を無視した適当な訳を与える生徒もいる。そこで，古語と現代語はつながっているということを実感させ，言語の意識化を図りたいと考え，生徒自身の言葉の力を伸ばす授業を構想した。

(2) 指導の手だて

ア 実の場の設定による言語に対する意識付け

古典の場合、実の場の設定が非常に難しい。今回は、現代語の中で使用する場合を考えさせたり、現代語におきかえたりする作業を通して、言語に対する意識付けを図れるようにする。また、「ものづくし」の創作を取り入れることにより、実際に評価語を使う場の設定をする。これらの活動を通し、言語に対する新たな発見、言語に対する気づきが得られると考える。

イ 想像力・思考力を高めるためのグループ学習の導入

1年目の研究において、グループ学習による想像力・思考力の高まりの効果を実感することができた。そこで、古典の学習においても、グループ学習を導入し、話し合いなどの生徒相互による活動の中で、個人活動では得られない学習効果を期待する。今回は、評価語を中心とした話し合いの活動や、「ものづくし」作文をグループ活動で行うこととする。

ウ 評価の対象を学び手が事前に知る学習の場の設定

授業で何を評価するかを、学び手が事前に知る。また、学びの目的や方法、内容を、学び手が自覚する。このような、学びの手順を知ることにより、受け身の授業からの脱出を図れるだろうと考える。今回は、「学習の手だて」と一体になった「自己評価シート」を用意し、授業の全体像を事前に知らせ、どこでどのように学ぶか、また、どのように自分の到達度を測るかが分かるような工夫をする。

(3) 授業実践

ア 単元について

使用教材 随筆(二) 枕草子 2話 (第一学習社 高等学校古典古文編)

『枕草子』の評価語(批評の言葉)に注目し、清少納言の用いた評価語、平安人の評価語の用い方を理解する授業を展開する。『枕草子』に描かれた清少納言の感覚が、平安時代当時の感覚だった。評価語の理解は、その評価している対象の理解であり、当時の感覚の理解に通じる。それが、作者のものの見方、考え方を理解する手だてになる。初段「春はあけぼの」は中学校で既習の生徒が多い。そこで、新たな読みの構想として評価語を抜き出す作業を中心に学習していく。また、「木の花は」を通して、評価語の考え方を、現代語からの感覚、古語からの感覚の両側から検討していく。さらに評価語を盛り込んだ文章を書く。書く活動を通して、評価語の役割を理解する。できるなら、古語で書かせたいと考えた。

イ 目標

ア 言語のもつ意味や、言語の変遷などについて関心や理解を深め、それらを尊重しようとする。

(関心・意欲・態度)

イ 文章や作品に表れた人間、社会、自然などに対する思想や感情を読み取り、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。

(読む能力)

ウ 辞書などを用いて古典の言葉と現代の言葉を比較対照しながら、優れた表現に親しむ。

(知識・理解)

ウ 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
評価語のもつ意味や、言語の変遷について関心や理解を深めようとしている。	文章に表れた思想や感情を、評価語を通して読み取っている。 様々な観点から評価語を捉えることで、作者のものの見方、感じ方、考え方を読み取っている。	話し合いや辞書を用いる過程で、古語と現代語を比較対照し、語彙を豊かにしている。 理解した評価語を用い、文章の中に的確に使用している。

エ 指導と評価の計画（全6時間）

時間	各時間の目標	主な学習活動	各時間の具体的評価規準及び指導の手だて
1	1 文学史を確認する。 2 評価語について確認する。 3 「春はあけぼの」の評価語を確認する。	1 教師の自作IT教材を用い、清少納言や枕草子について確認する。 2 現代語の評価語を考える。 3 「春はあけぼの」を音読する。 4 「春はあけぼの」から評価語を抜き出し、ワークシートにまとめる。	評価語のもつ意味や、言語の変遷について関心や理解を深めようとしている。（関・意・態） <u>発表内容、ワークシートの確認</u> 【指導の手だて】 1 文学史について理解不足の生徒には、自作IT教材のページを示し、確認するよう指示する。 2 評価語を考えることができない生徒には、具体的に評価できそうな対象を示し考えさせる。 3 音読することが苦手な生徒には、個人指導をする。 4 評価語を抜き出せない場合やどのような点についての評価語か考えられない場合は、例を示し分かりやすく解説する。
2	1 前時に書いたワークシートの内容を確認する。 2 評価語の辞書以外の意味や例文を考える。	1 「春はあけぼの」のワークシートを確認し合う。 2 「をかし」「あはれなり」「わろし」の意味説明や例文を考える。	文章に表れた思想や感情を、評価語を通して読み取っている。（読） <u>発表内容、ワークシートの確認、テスト</u> 【指導の手だて】 1 確認できない生徒には、自分のワークシートの内容と、他者の発言内容を比較するよう指示する。 2 評価語の説明や評価語を使った例文を考えることができない生徒には、例文を示しながら考えさせる。
3	1 自分たちの評価語に対する感覚を話し合う。 2 「木の花は」の評価語を確認する。	1 前回考えた意味や例文の感覚を話し合う。 2 「木の花は」を音読する。 3 「木の花は」から評価語を抜き出し、ワークシートにまとめる。	様々な観点から評価語を捉えることで、作者のものの見方、感じ方、考え方を読み取っている。（読） <u>机間指導、発表内容、ワークシート</u> 【指導の手だて】 1 グループでの意見をまとめることができない場合は、具体的な話し合いの内容を示し、指導する。 2 音読することが苦手な生徒には、個人指導をする。
4	1 現代語の類語を考える。 2 古語の類語を考える。	1 古語の評価語を現代語におきかえるとしたら何が適当か考える。	3 評価語を抜き出せない場合や、どのような点についての評価語か考えられない場合は、例を示し分かりやすく解説する。

4	<本時の学習>	2 他の古語の評価語におきかえられるかどうかを考える。 3 できたものを発表し合う。 <u>グループ活動</u>	様々な観点から評価語を捉えることで、作者のものの見方、感じ方、考え方を読み取っている。(読) 話し合いや辞書を用いる過程で、古語と現代語を比較対照し、語彙を豊かにしている。(知・理) <u>机間指導, 発表内容, ワークシート</u> 【指導の手だて】 1 おきかえる現代語やおきかえる古語を考えることができない場合は、類語辞典や参考資料を使い、具体的に指導する。
5	1 「ものづくし」の文章を創作する。	1 評価語を使って、「 は」の文章を作る。 <u>グループ活動</u>	理解した評価語を用い、文章の中の的確に使おうとしている。(知・理) <u>机間指導, 作品内容</u> 【指導の手だて】 1 文章を作ることができない場合は、テーマを決めさせ、一人一文考えさせるようにしたり、今までの学習を振り返らせたりする。 2 文章を古語に直してみることができない場合は、無理に直させることをさせず、現代語のままにする。 3 古語類語辞典や古語辞典を使うことができない場合は、具体的な使用の仕方を示す。
6	1 作品を鑑賞し合い、面白いと思った作品を選ぶ。 2 全体を振り返る。	1 冊子にし読み合い、お気に入りの文に投票をする。 2 平山人の評価語を理解できたか振り返ってみる。	評価語のもつ意味や、言語の変遷について関心や理解を深めようとしている。(関・意・態) <u>机間指導, 自己評価シート</u> 【指導の手だて】 1 他のグループの作品を読み、評価することができない場合は、自分の第一印象と好みで選んでよいことをアドバイスする。 2 評価語についての理解の振り返りができない場合は、今までの具体的な活動を振り返らせ、自己評価シートと再度照らし合わせる。

オ 本時の指導

本時の目標 全6時間中第4時		様々な観点から評価語を捉えることで、作者のものの見方、感じ方、考え方を読み取っている。(読) 話し合いや辞書を用いる過程で、古語と現代語を比較対照し、語彙を豊かにしている。(知・理)		
段階	時間 (分)	指導内容	生徒の学習活動	評価規準と評価方法
導入	5	本時の目標の確認をさせる。<一斉>	1 本時の目標を確認する。 2 グループの活動の進行段階を確認する。	自己評価シートやワークシートを用いて確認させる。
		1 「木の花は」から抜き出した評価語を再確認させる。	1 「木の花は」から抜き出した評価語を確認し、ワークシートにまとめる。	<u>机間指導, 発表内容, ワークシート</u> 【指導の手だて】 1 おきかえる現代語やおきかえる古語を

展 開	4 5	2 現代語の類語を考えさせる。 3 古語の類語を考えさせる。 4 他グループの意見を確認させる。	2 古語の評価語を現代語におきかえるとしたら何が適当か考える。 3 他の古語の評価語におきかえられるか考える。 4 できたものを発表し合う。 <u>グループ活動</u>	考えることができない場合は、類語辞典や参考資料を使い具体的に指導する。 2 文中に合わない語句を選んでいる場合は、例を用い指摘し、気付かせる。 3 他のグループの発表をよく聞くよう指示し、意見の違いを確認するようにさせる。
	ま と め	1 本時のまとめ 2 次時の学習の予告をする。<一斉>	1 ワークシートを提出する。	

(4) 授業の考察

ア 実の場の設定による言語に対する意識付け

古語と現代語は別のものであるという意識を生徒の多くはもっている。今回の活動で、言語はつながりのあるものであるということが認識できたようである。また、現代語の類語に新鮮な驚きを示していた。さらに古語は奥が深いということを知り、平安人の感性が豊かであることに感動している生徒が多かった。また、実際に言語を用いる場を作ることで、どのような場で使うことが適切なのか、清少納言がどのような意味を込めて使っていたのかを実感できたようだ。これらの活動を通し、言語に対する新たな発見を得られたようである。さらに、現代語の類語辞典や古語類語辞典の活用を通し、言葉は一つではなく、様々な言い換えができることを学べたようである。文章化する作業は、文の構成はもとより、清少納言はこのように評価していたから、自分たちはこうしようとか、評価語の用い方も、例えば、「よし」と「よろし」では、この場合「よろし」の方が適しているなど、場にあった言語の選択につながった。また、古語に直す作業で、文法や既習の学習の振り返りを自然と行っており、ふだんなかなか教科書に向き合おうとしない生徒が、文法書や教科書を何度も読む姿が見られた。古典の学習を楽しいものと思った生徒も多かった。

イ 想像力・思考力を高めるためのグループ学習の導入

話し合いなどの生徒相互による活動の中で、個人活動では得られない学習効果が得られた。例えば、今回行った、評価語の抜き出しや置き換え作業、「ものづくし」作文などは、個別学習では途中で学習を放棄してしまい、最後までやりとげられない生徒が見られるものである。しかし、グループで行えば協力しなければ作業は進まないし、話し合いの中で場面を想像したり、その場で使用することに適した言葉なのかを思考したりすることで学習に深みが生まれた。また、現代語訳の誤訳により読み取り作業が滞る場面も見られた。しかし、それがグループ内で意見を戦わせることになり、何度も繰り返し読むことにつながった。ふだんは一読して終わってしまう文を、何度も読むことで、理解を深めて



辞典を用いての学習の様子

いくことができた。

ウ 評価の対象を学び手が事前に知る学習の場の設定

今回は、「学習の手だて」と一体になった「自己評価シート」を用意し、授業の全体像を事前に知らせ、どこでどのように学ぶか、また、どのように自分の到達度を測るかが分かるような工夫をした。学習の振り返りとして自己評価をすることは、生徒自身の学習改善につながる。生徒の自己評価は、教師の授業の指導改善へとつながる。また、最終目標を目で見えて確認することができるため、現在の作業がどの時点で生かされるかを意識でき、学習意欲へとつながったようである。「自己評価シート」は生徒の授業への反省に終止することのないようにし、むしろ教師の授業改善につながるようにした。また、授業中の生徒の様子からも反省し、次の授業へと生かすようにした。たとえば、生徒の評価語の説明を考えている様子や自己評価から判断し、現代語の置き換え作業では、辞書だけでなく、あらかじめ主要な評価語を抜粋し、それに関連した類語をプリントにして配布した。それは、評価語を取り入れた作文の作業で大いに役立った。また、「春はあけぼの」の評価語の抜き出し作業で、何に対する評価語かを考える際にとまどった生徒が幾分いたため、「木の花は」の同じ作業の際は、「評価語」をまず探だし、後、対象を考えるように指示した。それにより、作業がスムーズになり、自己評価でも高評価をする生徒が増えた。ワークシートが順調に埋まり、グループの話し合いもスムーズに行うことができれば、生徒のやる気も上がっていった。さらに、グループ別活動では、作業が遅れ気味なグループを中心に指導した。授業当初、評価語を文字通りの意味でしかとらえられなかった生徒も、適宜学習支援をすることにより、思考を深め、意味や役割を理解していった。授業後、「自己評価シート」を分析すると、生徒の自己評価は後半になるほど高評価になっており、感想も、充実した授業だったというものがほとんどであった。

(5) 今後の課題

グループ学習をするたび、生徒からは小学生のようだという反応がかえってくる。高校でグループ学習をする場の設定は、あまりないのが現状かもしれない。しかし、効果的な場面で導入することは、生徒の学習意欲の喚起につながると思われる。また、実際に言語を用いる場をつくることは、言語意識の高まりに非常に有効である。しかし古典では、実の場の設定は工夫のいるところである。さらに、指導と評価の一体化につながる評価の工夫を考えていくことが今後重要であろう。また、日常生活の中での想像力・思考力の育成が、必要なのではないだろうか。それが、読解力の育成につながると思われるからである。

6 研究のまとめ

本研究では、国語科の学習及び学習指導にかかわる実態調査を踏まえて、「4 研究主題に迫るための手だて」に示した二つを手だてとして授業研究を行った。以下に授業研究について考察する。

(1) 小学校の実践では、題材文に表われた筆者のメッセージを児童一人一人にとらえさせ、そのメッセージ深く思考したり想像したりする学習を行った。第6年生の児童が文章から抽象的に思考するのは難しく、日常の身近な出来事や具体物を例として説明することで、想像する事柄や範囲が広がり、具象から抽象への思考が徐々に行えるようになった。そして、児童は筆者からのメッセージについて自分を主体として思考することができた。さらに、児童は内容的に関連する本や資料を参考とするという明確な方法に従い、メッセージについての思考を深めたり想像を広げたりすることができた。

中学校の実践では、作品に描かれた登場人物、場面設定、出来事等、作品中の「客観的事象」の中での、登場人物の心情や会話や行動・行為の理由や意味付けについて、生徒の思考や想像を揺さぶる教師の意図的な発問や友達同士の意見交換により、生徒は自分なりのとらえ方や考え方を形作ることができた。この発問は、生徒の思考の方向や想像の範囲を明確に示すこととなった。特に、想像したことが妥当であるかどうかについて、作品中の叙述や登場人物の言動に照らし合わせ検討したことは、生徒の想像に拡散する範囲を設けることになった。

高等学校での実践では、生徒は、古文に用いられる評価語に注目して、評価語を現代語に置き換えたり他の古語の評価語に置き換えるという学習活動により、評価語のもつ意味や表す状況について思考したり想像したりすることができた。また、作者のものの見方や考え方、感じ方を想像し、平安人の感性についても想像することができた。また、グループでの学習活動により、生徒は思ったことや考えたことを交流しながら思考や想像を深めることができた。

これらの実践から、学習活動の計画の際には、「何について・どのようなことについて」「何を手がかりにして・どのような方法で」思考したり想像したりするのかを示すことが、極めて重要であると考え。また、教師の説明や発問、「話すこと」「書くこと」の表現活動と関連させることが、児童生徒の思考力や想像力を高めるために大切であると考え。

(2) 授業研究では、座席表型、一覧表型、個人別型等の評価のための補助簿や個人ファイル等を用いて児童生徒一人一人の学習状況を把握していった。これは、児童生徒一人一人の思考や想像の様子をとらえて、次時の学習指導計画を修正しながら、具体的にどのような助言を与えたらよいのかを検討するために大いに役立った。また、児童生徒が記入した自己評価やワークシートは、教師が気付かなかった児童生徒の思考や想像の状況を知る上で参考となり、評価のための資料とすることができた。

思考することと想像することは明確に区別ができるものではない。しかし、「読むこと」の学習指導において、児童生徒の国語科における思考力や想像力を高めるためには、教師が、思考や想像の姿を類型的に検討して区別したり総括的に扱ったりするなどして、さらに具体的な力としてとらえる必要がある。また、国語科における思考力や想像力を支える力や能力には、どのような力や能力が考えられるのかについても今後検討していきたい。

図画工作・美術

研究主題 一人一人がもてる力を働かせ伸ばす図画工作・美術科学習指導の在り方

研究概要及び索引語

図画工作・美術科では、子どもたち一人一人の資質や、家庭や学校で身に付けた知識や技能が働くことにより、ものの感じ方や関心のもち方、表現の仕方などに、その子らしいよさや可能性が自ずと現われる。本研究では、児童生徒と教師を対象に、図画工作・美術科の学習指導について実施した実態調査を踏まえた上で授業研究を行い、多様で創造的な活動を通して、一人一人がもてる力を働かせ伸ばす学習指導の在り方を究明した。

索引語：図画工作・美術科，資質，知識や技能，もてる力，働かせ伸ばす

目次

1	図画工作・美術科の研究のねらい	42
2	研究主題に関する基本的な考え方	42
3	図画工作・美術科における児童生徒の生きて働く学力に関する実態調査	43
4	研究主題に迫るための手だて	46
5	授業研究	47
(1)	小学校における授業研究	47
	【授業研究1】小学校第5学年 「ハ・イロー！ドキドキ2シーン」において、色を感じ、色とのかかわりを深め、個性的で創造的な表現の能力を高める指導の在り方	48
(2)	中学校における授業研究	53
	【授業研究2】中学校第1学年 鑑賞「形が話しかけてくるよ」において、身近な生活用品に親しむことによって制作者の思いを知り、もてる力を働かせて機能性や美しさに気付く鑑賞指導の在り方	54
6	研究のまとめ	59

研究主題 一人一人がもてる力を働かせ伸ばす図画工作・美術科学習指導の在り方

1 図画工作・美術科の研究のねらい

児童生徒及び教師を対象に、図画工作・美術科学習における生きて働く学力をはぐくむ学習指導に関する実態を調査し、その結果を踏まえ、小学校、中学校における授業研究を通して一人一人がもてる力を働かせ伸ばす図画工作・美術科学習指導の在り方を究明する。

2 研究主題に関する基本的な考え方

(1) 図画工作・美術科における一人一人がもてる力について

文部科学省初等中等教育局視学官／国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官板良敷敏氏によれば、「図画工作科の目標と内容は、これまで以上に、『つくりだす喜びを味わうようにする』ことを重視している。つくりだす喜びは、『造形的な創造活動の基礎的な能力』と分けがたく働き合い、支え合っていることに留意し、その育成を目指して教育活動を進めることが重要である。この教科目標は、図画工作科が固有に育てようとする力であり、他の学習活動とのかかわりにおいても働くとともに、将来にわたって働き続ける重要な力である。」と述べている。また、聖徳大学教授／前文部科学省初等中等教育局視学官遠藤友麗氏は、「美術教育は児童生徒が夢や目標を持ち、自ら課題（主題）を設定し、創意工夫しながらねばり強く課題解決を図り自分の答えを生み出していく生きる力を培う学習を通して、造形的表現・創造力の教育、芸術文化の教育、豊かな心や情緒の教育、たくましく自己実現を図る態度を形成する教育を担っている」と述べている。

上記のことから、図画工作・美術科の授業では、素材から感じ取ったことなどを手がかりに表したいことを思いつき、発想や構想の力などを働かせながら、その具体化のために、材料や方法などを考えるなど、児童生徒が、成長・発達に応じて、それまでに得た様々な知識や技能などを含む資質や能力を働かせ伸ばすことが大切であると考ええる。

図画工作・美術科で育成する資質や能力は、観点別学習状況評価に示す資質や能力であり「造形への関心・意欲・態度」「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」と考える。図画工作・美術科で育成を目指す四つの資質や能力の基盤には、児童生徒一人一人が既に身に付けている力がある。この既に身に付けている力をもてる力ととらえる。

(2) 一人一人がもてる力を働かせ伸ばすことについて

児童生徒一人一人の既存の知識や技能には、思い込みや曖昧な点があると考えられる。既に身に付けたもてる力に、新しい知識や技能などを含む資質や能力などに出会わせるなどして、身に付けたもてる力が再編成され、再認識されて、簡単に剥落（はくらく）しない資質や能力となり、それが生きて働く学力につながると考えられる。

図画工作・美術科においても、児童生徒は、一枚の絵をかいているときにも、様々なもてる力を働かせている。絵の具箱から色を選ぶ際にも、かき始める最初の位置を決めるときにも、形の大きさを決めるときにも、使いやすいうように用具の配置をする際にも、原色を混ぜて新しい色をつくるときにも、様々なもてる力を働かせていると考える。このようなもてる力の多くは、それまでの生活や学習で経験したことを新しい知識や技能などを含む資質や能力と関連させながら、その時・その場の状況に応じて働かせ、納得のいかないときは、ほかの方法を考えたり、組み合わせたり、行きつ戻りつしながら、よりよい解決をしようとして

いると考える。それぞれの資質や能力が一体的に、関連的に働き、一人一人がもてる力を働かせ伸ばすことによって、一人一人の力が確かな力となり、その後の造形表現活動に生きて働くようになると考える。

3 図画工作・美術科における児童生徒の生きて働く学力に関する実態調査

県内の公立小・中学校の児童生徒及び教師を対象として、図画工作・美術科における生きて働く学力について実態調査を実施した。

(1) 調査の対象

ア 児童生徒 県内の小学校4校の第5学年から2学級ずつ、中学校4校の第2学年から2学級ずつを抽出した。回答者数は、小学校第5学年275人、中学校第2学年241人、合計516人に配布し、516人から回答を得た。

イ 教師 無作為に抽出した県内の小学校100校の図画工作担当者、並びに中学校100校の美術担当者、計200人を対象とした。回答者数は、小学校98人、中学校98人の計196人である。なお回収率は98.0%である。

(2) 実施時期 平成15年10月1日(水)から10月9日(木)まで

(3) 調査結果及び分析

児童生徒、教師を対象にした調査では、児童生徒、教師の実態を調べ、その現状を明らかにするとともに、授業研究の参考にすることにした。その概要については、次のとおりである。

児童生徒と教師を対象とした調査内容と結果については、児童生徒は、表1～5、教師は、表6～11で示す。なお、表中の数値は、各問毎の回答者数に対する回答者数の割合(%)である。

ア 児童生徒の調査結果について

表1から、授業で自分が納得できるように工夫しながら作品をつくらうとしている」、「どちらかといえばつくらうとしている」と答えた児童が92.7%、生徒が90.0%と多い。児童生徒は、図画工作・美術の授業で、自分が納得

表1 図画工作・美術の授業で、自分が納得できるように工夫しながら作品をつくらうとしていますか(%)

選 択 肢	小学校	中学校	全体
つくらうとしている	58.9	49.4	54.1
どちらかといえばつくらうとしている	33.8	40.6	37.2
あまりつくらうとしていない	5.5	7.1	6.3
つくらうとしていない	1.8	2.9	2.4

ができるように工夫しながら作品をつくらうとしていることがうかがえる。

表2から、今まで図画工作・美術で学習したことを、その後の図画工作・美術の授業で「役立てている」と答えた児童は32.3%、「どちらかといえば役立てている」が44.6%と

表2 今まで図画工作・美術で学習したことを、その後の図画工作・美術の授業で役立てていますか(%)

選 択 肢	小学校	中学校	全体
役立てている	32.3	17.1	24.7
どちらかといえば役立てている	44.6	48.3	46.4
どちらかといえば役立てていない	18.8	27.5	23.2
役立てていない	4.3	7.1	5.7

なっている。中学校では、「役立てている」が17.1%、「どちらかといえば役立てている」が48.3%と多かった。授業で学習したことを児童で76.9%、生徒65.4%と多くの児童生徒が役立てている。しかし、中学校では、「どちらかといえば役立てていない」「役立てていない」の計が34.6%と約3人に1人が役立てていないことが分かった。

表3から、図画工作の授業の中で、「今まで苦手だったことができるようになった」と感じる児童生徒は、小学校では

「よく感じることもある」が26.4%、「どちらかといえばある」が48.6%と「ある」と答えた児童は多いが、中学校になると「よく感じることもある」が10.4%、「どちらかといえばある」が40.4%であった。「ない」が49.2%という結果が見られた。今まで苦手だったことができるようになったと感じない生徒が児童に比べ、約半数にまで増えている。

表4から、小学校では、図画工作の授業で今までに学習したことを、図画工作以外の授業や普段の生活に「生かしている」が17.4%

「どちらかといえば生かしている」と答えた児童は53.3%と半数以上が生かしていることがうかがえる。中学校では、「生かしていない」が17.9%、「どちらかといえば生かしていない」が44.6%であった。図画工作・美術科の授業で今までに学習したことを図画工作・美術以外の授業や普段の生活にどちらかといえば生かしていない、生かしていない生徒が児童に比べて増え、62.5%と約2倍になっている。

表5では、小学校では、授業のめあてや目標を「いつも意識して取り組んでいる」が38.1%、「どちらかといえば意識して取り組んでいる」が46.9%と多かったが、中学校では、「どちらかといえば意識して取り組んでいる」が51.9%、「どちらかといえば意識して取り組んでいない」が23.2%と次に多かった。授業のめあてや目標をどちらかといえば意識して図画工作・美術の授業に取り組んでいない生徒が児童に比べ多いことが分かる。

イ 教師

表6から、児童生徒が、こだわりをもって作品がつかれるように学習指導を「している」、「どちらかといえばしている」と答えた教師は、小学校、中学校ともに多く、特に中学校では「している」が42.9%と高い結果が見られた。小学校、中学校ともに、児童生徒がこだわりをもって作品がつかれるように学習指導をしていることがうかがえる。

表7では、小学校では、今まで図画工作で学習したことを、図画工作の授業に生かせるように学習指導を「どちらかといえばしている」59.2%と一番多く、次が「している」36.7%であった。中学校では、「している」51.0%、「どちらかといえばしている」39.8%と多かった。中学校では、「している」51.0%、「どちらかといえばしている」39.8%と多かった。中学校では、「している」51.0%、「どちらかといえばしている」39.8%と多かった。中学校では、「している」51.0%、「どちらかといえばしている」39.8%と多かった。

表3 図画工作・美術の授業の中で「今まで苦手だったことができるようになった」と感じる児童生徒がいますか(%)

選 択 肢	小学校	中学校	全体
よく感じることもある	26.4	10.4	18.4
どちらかといえばある	48.6	40.4	44.5
どちらかといえばない	21.4	40.8	31.1
いつも感じない	3.6	8.4	6.0

表4 図画工作・美術の授業で今までに学習したことを、図画工作・美術以外の授業や普段の生活に生かしていますか(%)

選 択 肢	小学校	中学校	全体
生かしている	17.4	10.4	13.9
どちらかといえば生かしている	53.3	27.1	40.2
どちらかといえば生かしていない	23.5	44.6	34.0
生かしていない	5.8	17.9	11.9

表5 授業のめあてや目標を意識して図画工作・美術の授業に取り組んで生かしていますか(%)

選 択 肢	小学校	中学校	全体
いつも意識して取り組んでいる	38.1	17.8	27.9
どちらかといえば意識して取り組んでいる	46.9	51.9	49.4
どちらかといえば意識して取り組んでいない	11.7	23.2	17.5
意識して取り組んでいない	3.3	7.1	5.2

表6 児童生徒が、こだわりをもって作品がつかれるように学習指導をしていますか(%)

選 択 肢	小学校	中学校	全体
している	27.6	42.9	35.2
どちらかといえばしている	66.3	55.1	60.7
どちらかといえばしていない	5.1	2.0	3.6
していない	1.0	0.0	0.5

表7 今まで図画工作・美術で学習したことを、児童生徒が図画工作・美術の授業に生かせるように学習指導をしていますか(%)

選 択 肢	小学校	中学校	全体
している	36.7	51.0	43.8
どちらかといえばしている	59.2	39.8	49.5
どちらかといえばしていない	4.1	8.2	6.2
していない	0.0	1.0	0.5

る」39.8%と次に多かった。小学校の教師に比べ、中学校の教師の方が、今まで図画工作・美術で学習したことを、生徒が美術の授業に生かせるように学習指導をしていることがうかがえる。

表8から、一つの題材が終了したときに、児童生徒が「苦手なことができるようになった」と感じるように学習指導を「どちらかといえばしている」と答えた教師が

小学校72.4%、中学校63.3%とともに一番多く、次が小学校、中学校ともに「している」であった。一つの題材が終了したときに、児童生徒が「苦手なことができるようになった」と感じられるように小学校、中学校ともに学習指導をしていることがうかがえる。

表9から、今まで図画工作・美術の授業で学習したことを図画工作・美術以外の授業や普段の生活に生かせるような指導を「どちらかといえばしている」が小学校61.2%、中学校58.2%とともに一番多

かった。小学校、中学校ともに今まで図画工作・美術で学習したことを図画工作・美術以外の授業や普段の生活に生かせるように学習指導をしていることがうかがえる。

表10では、図画工作・美術の授業のねらいを毎時間意識して「展開している」、「どちらかといえば展開している」をあわせた全体の結果は、95.9%と高かった。小学校、中学校ともに図画工作・美術科の授業のねらいを毎時間意識して授業を展開していることがうかがえる。

表11から、今までに児童生徒が身に付けてきた造形感覚や想像力・技能などを生かし、伸ばせるような題材を「考えている」と答えた小学校教師は29.6%だったが、

中学校では「どちらかといえば考えている」と同じく48.0%と高い数値が見られた。また、「どちらかといえば考えている」と答えた小学校教師は58.2%、中学校教師は48.0%と高い数値が見られた。中学校では、小学校に比べ今まで身に付けてきた造形感覚や想像力・技能などを生かし、伸ばせるような題材を考えていることがうかがえる。

(4) 実態調査のまとめ

実態調査の結果、次のことが分かった。

- ア 児童生徒がこだわりをもって作品がつかれるように学習指導をしている教師が小学校、中学校ともに多く、自分が納得ができるように作品をつくっている児童生徒も多かった。教師の指導が児童生徒に生かされていることがうかがえる。

表8 一つの題材が終了したときに、児童生徒が「苦手なことができるようになった」と感じるように学習指導をしていますか(%)

選 択 肢	小学校	中学校	全体
している	18.4	23.4	20.9
どちらかといえばしている	72.4	63.3	67.8
どちらかといえばしていない	9.2	10.2	9.7
していない	0.0	3.1	1.6

表9 児童生徒が、今まで図画工作・美術で学習したことを図画工作・美術以外の授業や普段の生活に生かせるような指導をしていますか(%)

選 択 肢	小学校	中学校	全体
している	20.4	21.4	20.9
どちらかといえばしている	61.2	58.2	59.7
どちらかといえばしていない	18.4	17.3	17.8
していない	0.0	3.1	1.6

表10 図画工作・美術の授業のねらいを毎時間意識して展開していますか(%)

選 択 肢	小学校	中学校	全体
展開している	41.8	52.0	46.9
どちらかといえば展開している	55.1	42.9	49.0
どちらかといえば展開していない	3.1	4.1	3.6
展開していない	0.0	1.0	0.5

表11 今までに児童生徒が身に付けてきた造形感覚や想像力・技能などを生かし、伸ばせるような題材を考えていますか(%)

選 択 肢	小学校	中学校	全体
考えている	29.6	48.0	38.8
どちらかといえば考えている	58.2	48.0	53.1
どちらかといえば考えていない	12.2	4.0	8.1
考えていない	0.0	0.0	0.0

- イ 今まで図画工作・美術で学習したことを児童生徒が図画工作・美術の授業で生かせるように学習指導をしていると答えた小学校，中学校の教師は多かった。しかし，中学校では，今まで学習したことを，その後の授業に「役立てていない」，「どちらかといえば役立てていない」と答えている生徒が6割を超していることから教師の指導が生徒の学習に生かされていないことがうかがえる。
- ウ 小学校，中学校の教師の多くは，苦手なことができるようになったと感じるように学習指導を「している」「どちらかといえばしている」と答えている。しかし，図画工作・美術の授業の中で今まで苦手だったことができるようになったと「どちらかといえば感じない」と答えた生徒が多かった。中学校教師は，苦手なことができるようになったと感じるように指導しているにもかかわらず，生徒は苦手なことが克服できていないことがうかがえる。
- エ 授業のめあてや目標を意識して図画工作の授業に取り組んでいる児童は多かった。しかし，中学校では，「どちらかといえば意識して取り組んでいない」と答えた生徒が「意識して取り組んでいる」と答えた生徒より多かった。教師は小学校，中学校ともにねらいを意識して毎時間展開している教師が多いにもかかわらず，児童生徒は小学校，中学校へ進むにつれて意識して取り組んでいないことがうかがえる。
- オ 今までに児童生徒が身に付けてきた造形感覚や想像力・技能などを生かし，伸ばせるような題材を考えている割合は小学校，中学校どちらも高いが，特に中学校の教師の方が小学校教師より高い割合が見られた。

4 研究主題に迫るための手だて

児童生徒の生きて働く学力をはぐくむ学習指導に関する実態調査の結果を踏まえ，次の(1)から(3)の手だてを講じて研究を進めた。

(1) 基礎・基本の指導の徹底

基礎的知識・技術・経験，教養，感性，創造的思考力，表現力などの育成。

(2) 個性を生かす工夫

確実に身に付けた基礎・基本を基として，一人一人の児童生徒が自分のよさを生かして学びを選択し，自らの学力・能力や経験を一層豊かに伸長させていくための工夫。

(3) もてる力を関連的に働かせる場の設定

生活や様々な体験，これまでに学習した知識・技術・経験等の資質や能力などのもてる力を関連的に働かせることで，資質や能力を伸ばしていく。

(1)から(3)を工夫することによって，主題に迫ることができるのではないかと考えた。

5 授業研究

研究主題「一人一人がもてる力を働かせ伸ばす図画工作・美術科学習指導の在り方」に関する基本的な考え方と実態調査の結果を踏まえ、研究主題に迫るための手立てを講じ、2年間にわたり小学校、中学校で授業研究を行った。

(1) 小学校における授業研究

1年目の授業研究では、体全体を使い、想像力が広がり、多様な表現が考えられ、試行錯誤できるような材料・活動の場・指導方法に視点を置いて、小学校第1学年、題材名「あなあきしかくが いーっぱい『A表現(1)ア 材料などをもとにして楽しい造形活動をする。(造形遊び)』」の授業を展開した。

材料は、大きさ的にも体全体でかかわれる扱いやすい材料で、床に並べる向きや重ね方、つり下げ方や場所によって多様な表現ができ、立体に組み立てることもできる多量の厚紙フレーム(廃棄物となったOHPの枠700枚程)とした。活動の場は、のびのびと動ける広い空間であり、しかも活動の様子や作品を高い場所から鑑賞できることを考慮して体育館とした。そして、第1次の活動の様子をビデオ視聴し、第1次の体験の上に第2次の同じ活動を繰り返すことができる学習過程とした。このようなことから、児童は手にした材料から感覚的に特性をとらえ、楽しい活動を思い付き、もてる力を働かせ自己の思いを膨らませていくことができると考えた。さらに、活動の場と児童相互の刺激により、材料をどう扱いどう処理したらよいかを想像し、試行錯誤を繰り返しながら試すことによって、児童一人一人がもてる力を働かせ伸ばすことができるのではないかと考えた。

活動の様子は、「S字フックでひっかける」「穴に棒を通してぶら下げる」「クリップでつなげる」「床に敷き詰める」「点々と置く」「組み合わせて立体にする」などが多く、「体に掛けて布団」「立てかけて犬小屋の屋根」など、見立てによる表現を行い楽しんでいる児童もいた。また、場に対する興味も高く、防球ネット、高跳びのバー、跳び箱、マット、演台、階段などあらゆる場を活用し、厚紙フレームは様々な形を呈していった。児童の活動の様子も、同じ場で少しずつ変化を加えながら同じような活動を繰り返し行う姿、一つの活動に満足すると次々と新たな活動に移っていく姿、一人で黙々と取り組む姿、友達と楽しく活動する姿など様々であった。更に、第1次の体験の上に第2次の同じ活動を繰り返したことによって、坂になったマット上のすべり台の表現から、ギャラリーに登る長い階段でのジェットコースターの表現に発展したり、ケンケンパーの場づくりから、重ね方の工夫で花や雪の結晶を表現するに至ったり、友達の発想を取り入れて自分の発想をふくらませ、新たな発想を浮かべたりすることができた。このように、繰り返すことによって工夫、発展へと想像が広がり、繰り返すことによって技能が磨かれていく。そして、その体験によって、過去の体験の生かし方をも学んでいったのではないだろうか。児童は、厚紙フレームとの出会いによって、材料の特性を感覚的に捉え、もてる力を働かせ、何をしようか、どんなものをつくろうか、想像しては試し、試してはまた想像しながら取り組んでいった。そして、これらの活動の過程において、児童は、一人一人のもてる力を更に伸ばしていったと考えられる。

なお、2年目となる本年度の小学校における授業研究については、次のとおりである。

【授業研究1】 小学校第5学年「ハ・イロー！ドキドキ2シーン」において，色を感じ，色とのかかわりを深め，個性的で創造的な表現の能力を高める指導の在り方

ア 授業研究のねらい

だれでもが，自分の造形的な秩序の感覚をもっていて，色の好みや配色，好きな材料とその質感，形とその配置などには一人一人の児童のこだわりや表現の魅力を読みとることができる。これらのこだわりや表現の魅力は児童がこれまで体験し，獲得してきたもてる力ととらえることができるだろう。

本題材は，A表現（2）「表したいものを絵や立体に表したり，つくりたいものをつくったりする」の内容の活動で，特に造形要素としての色に目を向けることによってもてる力を働かせ伸ばし，表現活動に楽しく取り組めることをねらいとしている。ここでは，個性とは，自分がこうありたいという願いが，その願った方向に進む姿であるにとらえている。この願いの方向を意識しながら授業づくりはいかにあるべきか，児童が色を感じ，色とのかかわりを深めるためにはどのような表現活動の場がふさわしいかを考え，児童の色にかかわる資質や能力が高まることを期待して本題材を立案した。指導にあたっては，特に，手軽に色と親しめること，色を重ねたり隣り合わせた時の深まりの効果，体全体の感覚を働かせて色の世界に入って行くような視点を大切に扱っていききたい。題材名の「ハ・イロー」は「入ろう」と「ハ！（驚き）色」を重ねた意味合いをもつ。「2シーン」は連作という形で色の対比を感じ取れる作品づくりを目指し，「色で語る」学習の充実を図りたいと考えた。

イ ねらいに迫るための手立て

(ア) 色を感じ，色とのかかわりを深める授業構成

表現活動への関心・意欲が高まることをねらいとして，導入の「ハ・イロー」では，色コンテを使用し，指先や手の平を使って色を混ぜたり，重ねたりする体感的な描画活動を行う。自然の情景やものと自分のイメージをつなげる色を見付けるために，ここでは教師がガイド役となって色が感じられる幾つかの場面や情景を言葉や音楽や音で提示する。児童は，10分程の時間で黄，緑，虹色，青，赤の色を中心に，次々と自分のイメージに合った色を選び，クロッキー帳に情景を想像して即興的に表現していく。色紙を切り取って貼ったり，コンテでかき加えたりする過程は，情景が次第にはっきりし，その子の表したいものに一歩進む手助けとなると考えた。自然のもつ色合いの美しさや色の対比を追体験したり，つくりだしたりすることは，児童の造形感覚を形成する上で有効であると思われる。

3・4時間目は色への関心を喚起するために，自分の気に入った思い出の色や見付けた色を話し合い，それらの色からオリジナルキャラクターを構想することにした。5・6時間目は「オリジナルキャラの冒険」と題して前回つくりだしたキャラクターが登場するドキドキシーンを表現する。これらのまとまりのある3部構成を経て色に親しむことによって，意欲や関心を持続し，一人一人のもてる力を働かせ更に伸ばすことができると考えた。

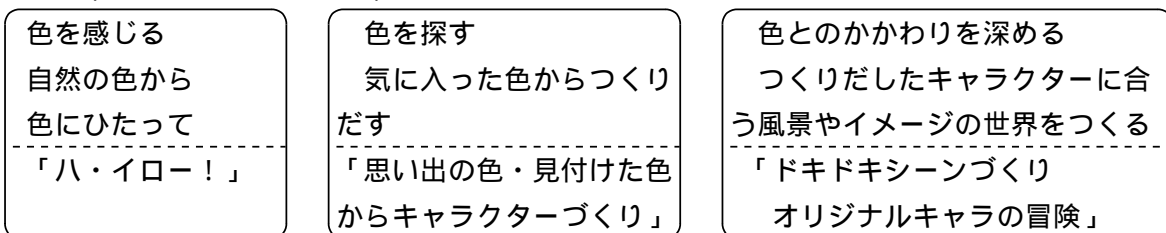


図1 一人一人のもてる力を働かせ伸ばすための3部構成

(イ) 個性的で創造的な表現の能力を高めるための工夫

児童が色とのかかわりを深め、色にかかわる資質や能力を高めるために、以下のような工夫を行った。

① 手軽に色と親しめるために色コンテ・色紙の使用

コンテは茶や黒等、描画材としてよく使われるが、主な着色材としての経験は少ない。今回、手軽に色面をつくりだせることや、ぬりの強弱やぼかし、ぬり重ね、消しゴムによる白抜きなど、使い方によって多様な表現の欲求に対応できると考え、24色の色コンテを使用した。色コンテの様々な使い方については、テーマ毎に紹介しながら授業を進めることによって、無理なく使い方の効果を試すことができるように配慮した。又、調和の配色のみでなく、対比の配色の効果をねらう発想にも対応できるように、1学期のマークづくりで使用した93色の色紙と色見本を準備した。

用紙については、クロッキー帳（1，2時間目），葉書大の画用紙（3，4時間目），8つ切り画用紙（5，6時間目）と変化をもたせ、各時間の終末で表現が完結できる流れにすることで、その時間毎の達成感をもてるようにした。



雨のテーマから 会社帰りのサラリーマン

② 場の工夫

1，2校時は児童に情景を思い浮かばせることができる様、森の鳥のさえずりや雨音などの効果音（NHK効果音集より）を用い、教師の語りかけを行った。また、グループ構成は児童相互に働きかけ合う関係を大切にするため、自由班とした。



③ 既成の色彩からの脱却

「思い出の色・見つけた色」から関連して主題の **ワークシートとオリジナルキャラ** ドキドキシーンづくりに移行できるように、それらの色からオリジナルキャラクターを発想し、次の創作に入る流れを設定した。既成の色にとらわれることなく、自分の心に止まった色が姿を変えて小さな作品になることで、満足感が得られると考えた。色を入り口としながら、導入時のように言葉や色から構想する方向と、中心となる具体物から全体を構想する方向と、二つの流れを経験することで色の体験が更に深まると考えた。

ウ 授業の実践

(ア) 題材 ハ・イロー！ ドキドキ2シーン

(イ) 目標

- ・様々な表し方や見方に触れ、色彩に関心をもち表現しようとする。（関心・意欲・態度）
- ・表したいことを見付け、使いたい色合いやつくりだしたい場面について考え、描画材や色紙を試しながら構想を練ることができる。（発想や構想の能力）
- ・構想に適した表現方法を選び、色の重なりや対比の効果を生かして工夫して表現することができる。（創造的な技能）
- ・イメージと色や形が結びついた造形表現のよさを感じ取り、共感したり違いを感じたりしながら互いに認め合う。（鑑賞の能力）

(ウ) 指導計画（7時間取り扱い）

時	学習活動・内容	評価規準（主な評価方法）	観点別評価			
			関	発	技	鑑
1・2 (本時)	ハ・イロー ・自然の様々な表情を色コンテを使ってクロッキー帳にかく。	色コンテを使って自然の色を表したり、色合いをつくりだしたりするなかで、進んで表現活動に取り組み色に親しむ。（観察・発表）	◎	○		
3・4	思い出の色・見つけた色から ・気に入った色をもとに、オリジナルキャラクターをつくる。	選んだ色とそれに合わせたい色から、オリジナルキャラクターを構想する。 (学習カード・作品)		◎		○
5・6	ドキドキシーンづくり ・キャラクターの登場するドキドキシーンをつくる。	想像力を働かせ、キャラクターに合う場面の色合いや構図を工夫して、表現する。 (学習カード・観察・作品)		○	◎	
7	みんなのドキドキ ・作品を相互鑑賞する。	色の重なりや色の対比に注目して、友達の作品の表し方のよさを感じ取る。 (発表・学習カード)				◎

(エ) 本時の学習

① 目標

○体感的に自然の色の変化を表したり、対比したりしながら色に親しみ、意欲的に表現活動に取り組むことができる。（関心・意欲・態度）

○気に入った画面にさらに色紙をのせて合う色を探したり、具体物を切って加えたりかき込んだりすることによって、色の重なり効果を生かすことができる。（発想・構想）

② 準備・資料

色コンテ（ニューベルカラーパステル24色セットNCT-24B）黒コンテ、白チョーク 色紙 学習カード 効果音CD CDプレイヤー 掲示用資料

※クロッキー帳 はさみ のり（児童）

(オ) 展開

学習のひろば ◇学習課題□教師の問いかけ・児童の反応	教師の支援と評価
<p>◇ 「ハイロー」（入ろう：は！色） 自然のいろいろな表情を、色コンテを使ってクロッキー帳にぬりこんでみよう。場面に合わせてタッチも工夫しよう。</p> <p>□どんな色をのせてみたい？</p>	<p>・課題を知らせ、朝の森・草原を想像しどんな色が使えるか話し合うことで、意欲的に様々な色をぬりこんだり、思いついたものをかき込んだりできるようにする。</p> <p>・活動予定の時間を確認し、次のテーマへの移行は効果音の変化で知らせる。</p> <p>・教師がガイド役になって自然の色や表情など、五つのテーマをかくことによって、様々な色とかかわれるように支援する。</p> <p>・色コンテの様々な使い方について（a～d）は、各テーマで提案し、様々な表現を試みることによって、楽しく表現できるようにする。</p>

色コンテの使い方の紹介

- a: ぬり重ね（コンテをねかせて）
- b: ぼかし（指やティッシュで）
- c: 点や線のタッチ
- d: 消しゴムで白ぬき（星など）

色は目に見えるものだけではなくて、目に見えないイメージも表せるんだね。

- ・黄色と緑が混ざったら黄緑に変化してきれいだな。
- ・ティッシュでぼかすと、柔らかい色が出せるんだね。
- ・昼は明るいイメージでいろんな色をちりばめてみたよ。
- ・雨は水色や青をぼかして、最後に白でしずくをかいてみた。
- ・色合いを決めるのがちょっと難しい。
- ・手がよごれちゃったけど迫力が出て面白いな。

休憩時間は気に入ったページを机の上に開き友達と見合う。

気に入った画面に、さらに色紙をのせて合う色を探したり、具体物を切って加えたりかき込んだりすることによって、色を重ねて深めよう。

- ・嵐に黄色いかさを飛ばしてみたよ。
 - ・朝の空に木を立ててみた。
 - ・夕焼け空には、つりをしている人を貼ってみたよ。
- 学習カードに書き、色の工夫について話し合う。
- 振り返り・感想 きれいだなあと考えた色
色をはったり、かき加えて効果があったところ
次時は、色集めをする。気になった色をメモしよう。
(見付けた色・思い出の色)

・コンテの使用に臆病になっている児童には、わら半紙等の色試しの紙に、手の平などでぼかしや混色を共に行い、色をぬり広げることで感じが出てくること等を個別に指導する。

・タッチに重きをおいている児童には、ぬり込んでいくことも色コンテを使った今日の大切な活動であることを知らせる。

関テーマの表情を感じ取り、指や手の平で色をぬり重ねたり、複数のページの色合いを対比したりしながら様々な色に親しみ、意欲的に表現活動に取り組むことができたか。 (観察・作品)

・児童が試行錯誤しながら、イメージをもった時、色や形にすぐに働きかけられるように、色紙や試し紙を準備しておく。

・画面に付け加えたいものをかいたり、色紙を貼ったりする活動を通して、色の上に色がのった時の深まりの感覚を大切に指導する。

・コンテの粉が周囲に散るので、机には新聞紙を敷き、濡れ雑巾を用意しておく。
※背景に合う色紙を画面に置いて試したり、かき加えたりしながら合う色を見付け、色の重なり効果を生かすことができたか。 (観察・作品・学習カード)

・色集めでは、鳥や花等の自然の色、布や紙等の色、町で見かけた色、日本の伝統的な色などに分類することによって色への関心が高まるよう支援する。

エ 授業の分析と考察

(ア) 手軽に色と親しめるために色コンテ・色紙の使用について

児童はテーマごとに色を選び、熱心にぬりこんでいた。クロッキー帳の使用は、何枚もかけるという安心感があり気負わずに取り組め適していた。薄手ながら表面がなめらかな用紙はコンテがのりやすく、様々な色合いの作品が出来上がる中で満足感が伝わってきた。学習カードから、赤は気持ちを揺り動かす感じがすることとか、光が黄色でとても光って見えたことや本当に雨が降っている感じがしたことなど、様々な色に対する印象をもち、色に敏感になっていくのが感じられた。色コンテについては、試し紙として用意したわら半紙をよく活用し、重ねぬりやぼかしなど様々な効果を試しながら色面を広げていた。手をよく働かせて4枚の絵が出来上がり、よい色が出せて、色との心地よい出会いとなった

ようである。色はたくさん混ぜるとどんどん暗くなっていくことなども微妙に感じ取っていた。また、「色にはぴったりの色とそうじゃない色がある。」「黄緑と緑の重ね色がきれいだった。」「色にはイメージがある。」という感想からも児童が色とよくかかわっていたと思われる。色紙を貼ったりコンテでかき加える活動によって、言葉から発想し色を選んでつくられた場面の様子が分かりやすくなり、全体の構成が作品として引き締まった。

(イ) 場の工夫について

情景を思い浮かべられるように、森の鳥のさえずりの音や雨音などの効果音を用い、教師が語り掛けたが、効果音により普段の生活から感じている色をイメージしてコンテでかき加えていた。また、各グループが、個性的な雰囲気をもっていた。自由グループならではの相乗効果で児童相互の学び合いがなされていた。人的構成が造形活動に与える影響という



青に合う黄色を重ねてはってみよう。ものを普段はあまり意識したことがなかったので興味深い。また、回を重ねる毎に、「前回よりきれいな色が出せた。」「自分の本当に好きな色がわかった。」「水色に合う色をたくさん見つけた。」「色を一色一色組み合わせると楽しかった。」「色をつくれるようになった。」等もてる力を働かせて伸長が見られた。後半「色合わせ」という言葉がだいが登場するようになり、児童の関心が単色だけでなく、色と色の組み合わせに移っていったことが分かる。

(ウ) 既成の色彩からの脱却について

既成の色にとらわれることなく、気に入った色でキャラクターをつくることを提案したが、葉書の大きさから八つ切りの大きさに移行して、大きな画用紙にコンテでかけたことは自信につながり、スモールステップの学習の過程の大切さを感じた。オレンジ色を使うと懐かしい感じがすると「なつかしい田舎」をかいた児童にとって、オレンジ色は特別愛着のある色として残ることだろう。コスモスのキャラクターに黄緑色のぼかしの山をかいた児童は、「コスモスに合う風景を見つけた。」と話していた。この第6時の終末で、作品としての一体感まで到達する表現力は、この題材を通して働かせ伸ばすことができたもてる力といえるだろう。



おいしかったりんご

オ 授業研究の成果と課題

(ア) 成果

様々な色に対する印象をもち、敏感になっていく過程や様々な効果を試しながら色面を広げていく過程の中で、一人一人がもてる力を働かせ伸ばしていたと思われる。

場をグループ構成にしたことにより、児童相互の学び合いがなされていたと思われる。

既成の色にとらわれることなく、気に入った色でつくる場合などスモールステップの学習の過程の大切さを感じた。

(イ) 今後の課題

様々な色とかかわり選択するというねらいが不十分だった児童には、試行錯誤できる場をさらに設けておくべきだったと反省が残る。大判の色紙を準備して、そこにキャラクターの葉書を実際にのせて色を合わせることができたら有効な体験となったろう。

(2) 中学校における授業研究

1年目の授業研究では、「生活の中で使うもの」を題材とし、誰が、どのような場面で、どんな気持ちで使うかを想像させることを通して、生徒が自らの思いや夢を、デザインの基本的な動機にすることができれば、表現意図がより明確になり、創造力等の能力を伸ばすことができると考え、中学校第1学年「タマゴに思いをこめて」を展開した。また、生徒の興味、関心、知的好奇心等を十分引き出し、生徒の主体的な学びが実現されれば、材料や用具の生かし方などの基礎的スキルを身に付けられるのではないかと考えた。

表現意図を明確にするために、作品をプレゼントすることとし、そのときのことばや、メッセージ等を考えさせたり、ワークシートを活用したりすることにした。

本題材の卵の殻は、「願いを込めて人に贈る」というイースターエッグからヒントを得ている。表面が画用紙のような質感で、描画やものを貼ったりするなどの加工がしやすい。簡単に水洗いでき、彩色などのやり直しができる。卵は生徒にとって身近な存在だが、表現の素材としては新鮮に映ると考えた。制作前に、中身を慎重に抜き取る段階で、生徒は初めて「材料」としての殻とふれ合うことになる。その際、割れやすいため、慎重に扱う中で、表面の肌合いや冷たさなどを、指先や手のひらを通して感じられると考えた。

石膏は、白い粉末が水に混ざることによって硬質な物質に変化する。固まる際、牛乳のような状態からヨーグルト状、生クリーム状、粘土状というように、刻々と感触を変え、急速に固まっていく。最後にはまるで生き物であるかのように発熱し、硬化を遂げるドラマチックな素材である。石膏を卵の中に入れ、硬化させるため、卵は発熱することになり、生徒はあたかも卵が熱を出しているかのように感じ、生命的なものをイメージできたり、制作への意欲を喚起する効果も期待した。そのためにも、石膏を流し込んだ後は、時々手にとって変化を観察させるようにした。また、石膏を卵パックに流し込み、生徒が今後の制作活動を展開する場合の素材の一選択肢となれるよう、型取り体験などもさせた。

制作時には、第1時の石膏の流し込みでは、「これから熱くなって、熱が冷めたら硬化が完了するよ」と言うだけで驚き、期待感をもって観察していた。手のひらを通して発熱が伝わり始めると、皆声をあげて喜んでいった。T子はマスキングテープを曲面に合わせてうまく貼れず、何度も試しているうちに切り込みを入れる方法を試し、最後にきれいに貼ることができた。また、S子は卵の表面を青くぬり、布の穴の模様を利用して見せる方法を考えたが、布を曲面に合わせて、うまく貼れずにいた。様々な大きさの三角形をたくさん作り、一つ一つ試しながら、きれいな状態で仕上げることもできた。素材としての卵は、転がりやすく、また、曲面でできているために、着色などに苦労している生徒が多かった。しかし、失敗しても何度もやり直し、失敗から新しい技法を見つけるなど、たくましい制作態度が見られた。今まで身に付けてきた資質や能力を働かせ、工夫しながら制作している姿が見られた。



卵の表面に制作している様子

なお、2年目となる本年度の中学校における授業研究については、次のとおりである。

【授業研究2】 中学校第1学年 鑑賞「形が話しかけてくるよ」において、身近な生活用品に親しむことによって制作者の思いを知り、もてる力を働かせて機能性や美しさに気付く鑑賞指導の在り方

ア 授業研究のねらい

中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—美術編—平成11年9月文部省 第1学年において、B鑑賞イには、「生活の中のデザインや伝統的な工芸を鑑賞し、豊かな発想と工夫、美と機能性の調和、作品に託された願いと造形的なよさなどに気付き、生活におけるデザインや工芸の働きについて理解すること。」とある。普段、生徒は表現活動をする際に、作品に対して自分の思いを込めて表現しようとしている。例えば、授業での題材が生活用品である際には、使用目的を考えて制作しており、完成した作品にはその思いが十分感じられる。この思いというのは、活動をする上で大切にしたいものの一つである。では、鑑賞活動をする際に、作者の込めた思いを感じとれるようにするにはどのようにしたらよいのか。このことについて、身近にある生活用品の鑑賞を通して、生徒のもてる力を働かせ制作者の思いを感じ取るための授業を考えてみた。

作者の込めた思いを感じとる鑑賞として、ユニバーサルデザインによる生活用品を取り上げた。ユニバーサルデザインとは、「年齢や能力に係わりなく、すべての生活者に対して適合するデザイン」で、心優しいデザインのことである。このデザインの考えの基で利便性や安全性を考慮しながら生活用品が生産されている。日常的に何気なく使用しているものが多数あるが、それらには単に機能性を追求しただけのデザインではなく、その形から使用する側の心を潤してくれるものもある。そうした面を合わせもっているのがユニバーサルデザインである。そのような身近な生活用品のデザインの意図に気付き、機能性と美の関係について考え、話し合うことは大変意義深いことである。また、生徒たちの年代は感性が鋭く豊かな時期であり、思いを大切にしていける時期でもある。生活用品の製作者や利用者の思いについて考えることは、ものを見る目を養い情報のみに惑わされないしっかりした態度を育てることができると思う。

本学級は男子15人、女子15人、計30人である。落ち着いた雰囲気のあるクラスで、じっくり取り組むことができる生徒が多い。しかし、友達の作品を鑑賞する際、友達の思いを感じてどこのどんな点が工夫されていて、自分はどう感じたのかを詳しく述べられない生徒も多く、「よくできている。」とか「じょうず。」という言葉で済ませてしまうような場面にたびたび出会う。また、本校の生徒は、授業で友だちの制作した作品等を鑑賞することがほとんどで、自主的に足を運んで、直接芸術作品や文化遺産に親しもうとすることがあまりなく、受け身的である。

そこで、生徒がもてる力を発揮し、心の中で日常的に循環し変容し、成長していけるような鑑賞の態度を身に付けさせたいと考えた。そのため、鑑賞力を高めていく工夫として、鑑賞の対象を身近な生活の中で考えたり感じたりできる生活用品とし、そのことによって、主体的に鑑賞していくことの楽しさを味わわせたいと考えた。さらに、主体的に感じ取る楽しさを味わうことでじっくり鑑賞し、対象を見つめ、その対象の自分への語りかけに気付き、自分の作品制作における表現意欲も高まるのではないかと考えて、本題材を設定した。

イ ねらいに迫るための手立て

(ア) 基礎・基本の指導の徹底

生徒の実態を考えると、生徒一人一人が作者の思いを感じ取り自分の考えをもてるようにするには、対象をじっくり観察できるようにする必要がある。本研究の研究授業（本時）では、目標を「生活用品の機能性や美しさに気付き、主体的によさや美しさを味わおうとすることができる。」こととする。そのために、生活用品を鑑賞の対象にし、好奇心を掻き立て、対象をじっくりと観察できるように配慮する。

鑑賞する生活用品を分ける2つの基準を設定し、生徒が継続して興味や関心を示しながら観察できるようにする。

A 用途がはっきりしたもの（消しゴム・湯飲み・すだれ）

B 用途がはっきりせず、見た目が不可解なもの。（剣山・いす）

さらに鑑賞する生活用品の上記2つの基準を以下の3つに細分し、生徒が感じ取り考える際に取り組みやすいようにする。

a 用途がはっきりしていて、この形になった理由を考えやすい生活用品（消しゴム・湯飲み）

b 伝統的な生活用品（すだれ）

c 斬新なデザインの生活用品（剣山・いす）

また、生徒が自分の気付きのチャンスを逃さないよう、ワークシートを活用しワークシートの項目を具体的に示して、まとめやすいようにする。

さらに、指導者は活動中に机間指導をし、生徒が考えやすいような発問を工夫をする。

(イ) 個性を生かす工夫

基本的に、研究授業（本時）はグループ活動とし男女混合6人のメンバーで、気付いたことや考えたことが気軽に発表できるようにする。また、話し合いによって一つの用途に絞り、全体の前で発表するという形式にして意見交換がより盛んになるようにする。そして、ワークシートに記入しながらグループでの話し合いを進めることにする。このことで一人一人の考えをお互いが確認しやすいようになり、お互いを尊重できるようにする。

(ウ) もてる力を関連的に働かせる場の設定

研究授業（本時）後、各自にレポートを課し、自分なりに気に入った生活用品に目を向けさせ、鑑賞することでもてる力を関連的に働かせることができるようにする。

また、まとめたレポートを一人一人が授業で発表することで互いに感じたことを共有し、生徒相互や生活用品の制作者への他者理解につなげる。

ウ 授業の実践

(ア) 題材 形が話しかけてくるよ

(イ) 目標

身の回りの道具や生活用品を観察することによって、機能性や美しさに気付き、よさや美しさを味わおうとすることができる。 (関心・意欲・態度)

生活と美術とのかかわりに気付き、美しさと機能性について互いが感じたことを話し合いながら、美しさと機能性について理解することができる。 (鑑賞)

(エ) 指導計画（2時間取り扱い）

学 習 活 動		観点別評価規準	関心・意欲 態度	発想 構想	技能	鑑賞
評価規準	(関心・意欲・態度) 生活用品の機能性や美しさに気付き、よさや美しさを味わおうとする。 (鑑賞) 自分の感じたことをまとめ、話し合いながら、美しさと機能性を理解することができる。					
第1時（本時）	グループごとに生活用品を鑑賞する。	○				◎
第2時	鑑賞レポートを作成し、発表する。	◎				○

(オ) 本時の学習

- 目標 生活用品の機能性や美しさに気付き、主体的によさや美しさを味わおうとすることができる。
- 準備・資料 生活用品（カップ、剣山、いす、消しゴム、すだれ），鑑賞カード，画用紙，マジックペン，筆記用具

(カ) 展開

学習内容と生徒の活動	指導と評価の視点
<p>1 本時の学習課題をつかむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>生活用品を鑑賞し、よさや美しさを味わおう。</p> </div> <p>2 ある生活用品をグループごとに鑑賞する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループのメンバーで司会者や記録者、発表者を決める。（1グループ男女混合6人：5グループに各1種類の生活用品） <p>(1) 各グループに配られた箱を開け、中身を取り出し、品物から感じたことを鑑賞カードにまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな感じのする形か。 ・どういう目的で使う物なのか。 ・なぜこの大きさなのだろうか。 ・材質や色は関係があるのだろうか。 <p>(2) グループで感想や意見を述べ合い、形や機能性を考えて何に使う品物なのかグループで結論を出す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生活用品にかかわることを話題にすることで、普段使っている品物を想起させ、関心や意欲を引き出したい。 ・生徒には、興味や関心を引き出すために、対象が何であるかを知らせないで秘密にしておく。 ・品物をじっくり見て、対象から受ける感じを自分なりに鑑賞カードにまとめるよう助言する。 ・机間指導で、自分独自の感じ方やみんなの共通した感じ方を大切にし、見る人、使う人を惹きつけるのはどんな点なのか、じっくり考えながら観察することが大切であることを伝える。 ・表現された形には、作品を生かすために工夫されていることがあるのを意識させておきたい。 ・品物が何なのか想像できない生徒には、自分ならどんな風に使うか考えるよう助言する。 ・よさや美しさの新たな気付きが生まれるようにするために、生徒同士が自由に意見交換をできるような雰囲気づくりに努める。生活用品のよさや

- ・一人一人が意見を発表する。
- ・友達の考えを尊重しながら、自分の考えを発表し、考え方を変更しても良いことを考慮する。
- ・グループとして一つの考えを決定し、画用紙に書く。
- ・グループごとに発表する。

美しさを味わえない生徒も、他の生徒の意見や発表を聞くことで感化される機会を与える。例えば、工夫した表現はどこのどんなところに感じられるか、逆にそう感じられないのはなぜか等の視点を明示することで、見方を広げられるようにする。

評 生活用品の機能性と美しさに気付き、そのよさや美しさを味わおうとしているか。

(観察・ワークシート)

機能性や美しさに気付けない生徒には、形には意味があること、自分が使うつもりで考えると良いことを助言する。

(3) 品物の正体を知り、鑑賞カードに授業の感想をまとめる。

- ・再度、機能性と美しさについて鑑賞する。

3 本時のまとめと次時の学習内容を知る。

身近な生活用品について、自分のレポートを発表しよう。

- ・鑑賞カードに、自分の気に入っている品物名を記入する。

- ・発表する際、なぜそのように話し合っただけなのか、対象のどこに機能性と美しさを見出したのかを中心に発表するよう助言する。
- ・生活用品の機能性や美しさに気付かない生徒には、友達の発表を聞いて参考にし、自分なりに機能性や美しさに気付くことができるように助言する。
- ・次時は、本時の取り組みをもとに、自分なりのレポートを作成し、発表することを知らせる。
- ・次時までの課題として、身近な生活用品で気に入った物を1点選び、レポートにまとめておくように連絡する。

エ 授業の分析と考察

(ア) 基礎・基本の指導の徹底と個性を生かす工夫について

生徒が「機能性や美しさに気付き、よさや美しさを味わおうとする」ために、用途がはっきりしたものと用途がはっきりせず、見た目が不可解なもの2種類にした。例えば、剣山といすを鑑賞したグループは、今まで生徒が身に付けてきたもてる力を働かせながら、何度も触ったり見たりして意見交換が行われ、また、その結果、剣山を「鉛筆立てかもしれないよ」「マッサージに使うものかもしれないよ」、いすを「横にして、新聞をたてて使うのかな」等のつぶやきも多かった。生徒にとって用途がはっきりしないものについては、生徒が今ま



グループで話し合っている様子

でに身に付けてきたもてる力を働かせながら考えていたことがうかがえる。「用途がはっきりしたもの」については、「用途がわかった。」と思ってしまうと「なぜなのか」という疑問が起こらなくなり、もてる力を発揮しなくなってしまう場面が見られた。そのため、指導者が、机間指導の際、形や大きさ等に目が向くように助言をした。指導者の助言や発問が大切になってくるといえる。また、男女混合のグループで気付いたこと、ワークシートに記入しながらグループでの話し合いをしたことにより、お互いの考えを確認し合いながら、話し、考えを広め深めていくことができた。



いすを観察している様子

(イ) もてる力を関連的に働かせる場の設定について

今回の授業で育てた資質や能力を生徒の日常にも視野を広げようとした。普段何気なく使用している生活用品の中から、形の美しさ、使いやすさ等に気づき、それぞれの普段の生活の中でもよさや美しさを味わおうとする態度が、まとめてきた内容からうかがえる。課題レポートについては、生徒は以下の生活用品を選んでまとめてきた。

携帯電話（7人）・シャープペンシル（6人）・筆入れ（2人）・消しゴム（2人）・時計（1人）・時計と鏡つき写真立て（1人）・テレビ（1人）・CDプレイヤー（1人）・パソコン（1人）・CD（1人）・サッカースパイク（1人）・キーホルダー（1人）・ナイフ（1人）・ハンガー（1人）・ベッド（1人）

オ 授業研究の成果と課題

(ア) 成果

- ・ 日常の生活用品を鑑賞の対象とすることで、基礎・基本の指導の徹底を図ったが、身の回りにあるものにも、機能性や美しさに気づき、よさや美しさを味わおうとする態度を育てることができたと考えられる。
- ・ グループでの話し合いでは、互いにもてる力を関連し合いながら働かせていた。また、お互いの意見を尊重し合いながら課題解決に向かっている姿も見られた。
- ・ 自分なりに気に入った生活用品に目を向けさせ、鑑賞する機会を設けたことは、授業で終わりにするのではなく、普段の生活にも資質や能力を働かせるきっかけになったと考えられる。



湯飲みを見比べている様子

(イ) 今後の課題

- ・ 授業形態の工夫。TTによる授業も考えられる。TTによる授業では、生徒がもてる力を発揮して、試行錯誤する場面を十分に教師が観察し、適切なアドバイスをすることができると考えられる。TTによる指導についても研究していく必要性を感じる。
- ・ ワークシートの項目の吟味。直感で捉えられた生徒の思考を妨げることがないように工夫することも必要である。

6 研究のまとめ

本研究では図画工作・美術科学習に関する実態を踏まえ、一人一人がもてる力を働かせ伸ばす学習指導について、基礎・基本の徹底、個性を生かす工夫、もてる力を関連的に働かせる場の設定等の手だてを講じ、授業研究を行った。研究主題に迫るための有効な手だては、以下のとおりである。

(1) 基礎・基本の指導の徹底について

小学校では、友達の表現に刺激を受け、模倣したり、発展させたりしながら、児童の想像は更に広がり様々な造形活動が生まれた。これらの活動の過程において、児童は体全体の感覚や想像力、創造的な技能などの創造活動の基礎的な能力が働き伸ばされたと考えられる。また、色コンテの使用については、試し紙としてわら半紙を活用し、重ねぬりやぼかしなどの様々な効果を試しながら、表現することにより、色の選択に敏感になっていくことが分かった。

中学校では、今後も表現方法の一つとして活用するであろう石膏について、制作を通して学習したことにより、今後の制作に生かされると考えられる。今回の授業を通して、石膏を使った制作に意欲が見られるようになってきている。また、生活の中にあるデザインや工芸に目を向けさせたことで、豊かな発想や表現意図に応じた工夫、美と機能が調和して造形に反映しているなど幅広い観点で鑑賞をすることができた。

(2) 個性を生かす工夫について

小学校では、材料と場を工夫することによって、同じ場で少しずつ変化を加えながら同じような活動を繰り返し行う姿、一つの活動に満足すると次々と新たな活動に移っていく姿、一人で黙々と取り組む姿、友達と楽しく活動する姿など様々な姿が見られた。また、描画材の工夫によって、多様な表現ができるようにしたり、使い方をテーマごとに紹介したりすることによって、無理なく使い方の効果を試すことができたと思われる。

中学校では、装飾の材料・方法を生徒に選択させたことにより、今まで学習したことをもとに、新しい知識や技能と関連させながら、自分なりの表現方法で表現している姿が見られた。また、鑑賞の場面では、一人一人の生活の場面から、生活の中にあるデザインや工芸に目を向け、豊かな発想や表現意図に応じた工夫等を感じている生徒が見られた。

(3) もてる力を関連的に働かせる場の設定について

小学校では、厚紙フレームの並べ方等を繰り返すことによって工夫、発展へと想像が広がり、繰り返すことによって技能が磨かれていったと考えられる。そして、その体験によって、過去の体験の生かし方をも学んでいったのではないだろうか。また、2時間毎に小作品を完成させていく3部構成の学習過程を経ることによって、色に親しみ愛着のある作品を仕上げている児童の姿が見られた。

中学校では、今までに学習した表現方法をもとに、工夫して新たな表現方法や、適切な表現方法を見付け制作している姿が見られた。今まで学習したことを自分がつくった課題解決のために工夫している姿が見られた。また、鑑賞の場面では、生活におけるデザインや工芸の美と機能が調和した表現のよさを一人一人のいろいろな生活の場面から感じとっている生徒が見られた。

農業・工業・商業

研究主題 生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方

研究概要及び索引語

農業・工業・商業科の学習において、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむためには、生徒が自分の意志にもとづいて判断し、答えを見つけ出すような行動ができるよう働きかけることが大切であると考え。本研究では、生徒と教師を対象に研究主題に関する実態調査を実施し、その結果を踏まえて授業研究を行い、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方を究明した。

索引語：高等学校，農業，工業，商業，生徒，問題解決，自主的に行動する力

目次

1	農業・工業・商業科の研究のねらい	61
2	研究主題に関する基本的な考え方	61
3	農業・工業・商業科における生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導に関する実態調査	63
4	研究主題に迫るための手だて	69
5	授業研究	69
	【授業研究1】 高等学校農業	
	「課題研究」において、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方	71
	【授業研究2】 高等学校工業	
	「電子機械実習」において、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方	76
	【授業研究3】 高等学校商業	
	「商品と流通」において、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方	81
6	研究のまとめ	86

研究主題 生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方

1 農業・工業・商業科の研究のねらい

農業・工業・商業科の各教科において、研究主題に関する実態調査を実施し、その結果を踏まえ、授業研究を行い、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方を究明する。

2 研究主題に関する基本的な考え方

(1) 本研究における生きて働く学力をはぐくむ学習指導

ア 教育課程審議会答申（平成12年12月）では、学力について、単に知識を覚え込むのではなく、児童生徒が実感を伴って基礎的・基本的な内容を自らのものとして確実に習得し理解を深め、その後の学習や将来の生活に生きて働くようにすることを重視している。そこで、学力を知識や技能の量的な学力だけに限定せず、児童生徒が自ら考え、主体的に判断し、行動する資質や能力、生きていく際に自分自身の糧となる学力を含めたものを「生きて働く学力」としてとらえた。

イ 理科教育及び産業教育審議会答申（平成10年7月）「今後の専門高校における教育の在り方等について」では、「1 専門高校の現状と課題」の中で、「今後の社会においては、自ら考え、判断し行動できる資質や能力を持つとともに、高度の専門的な知識や技術・技能を有する人材（スペシャリスト）がこれまで以上に必要とされると思われる。」と、さらに、「2 専門高校における教育の改善・充実のための視点」の中で、「生徒が自ら学び、考え、創意工夫することや、生徒が望ましい勤労観・職業観を身に付け、適切かつ主体的に進路を選択できるよう支援することに、より重点を置く必要がある。」と述べられている。

このことから、「基礎・基本」をとらえ直し、生徒が基礎的・基本的な内容を確実に習得できるようにするための体験的な学習や問題解決的な学習の工夫・改善に努めなければならないと考える。つまり、生徒一人一人が自分のものの見方や考え方をもって判断し行動できることが大切である。また、生徒が自ら学ぶ目標を定め、何をどのように学ぶかという主体的、自律的な学習の仕方を身に付けさせるとともに、体験的、問題解決的な学習などを通じて、学ぶことの楽しさや成就感を体得させ、自ら学ぶ意欲を育てるよう配慮する必要があると考える。

ウ 上記のことを踏まえ、本研究においては、生きて働く学力をはぐくむ学習指導について、以下のことを教師の役割ととらえることとした。

(ア) 生徒一人一人が、意味のある切実な学習課題や問題を見つけ出し、その解決に向けて人・事物・事象と関わり合いながら、自分自身が納得できるまで追い求め、自分にとって新しい世界を創り出していくような学習活動を援助・指導していくこと。

(イ) 生徒の个性的で自主的な学習を促すために、教材の特性や生徒の発達段階を十分に考慮し、指導体制や指導方法を工夫していくこと。

(2) 自主的に行動する力をはぐくむことについて

ア 中央教育審議会答申（平成15年10月）の「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」では、確かな学力を「知識・技能に加え、自分で課題

を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」ととらえている。

また、「第1章 新学習指導要領や子どもたちに求められる学力についての基本的な考え方等」では、以下のことが述べられている。

(ア) 「各学校においては、学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容の確実な定着、個性を生かす教育の充実を目指して、教えるべき内容・考えさせるべき内容に応じて教員が必要な指導を行い、個に応じた指導などの工夫をしたわかる授業を一層推進するとともに、体験的・問題解決的な学習活動を展開することが求められる。」

(イ) 「子どもたちに求められる学力としての確かな学力とは、知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたものであり、これを個性を生かす教育の中ではぐくむことが肝要である。」

(ウ) 「確かな学力をはぐくむ上で重要な視点として、未知のものに積極的かつ主体的に興味・関心を抱き、理解を深めたいと思うなどの好奇心をもたせることや、子どもたちと実社会とのかかわりという観点から、社会の仕組みと個人のかかわりに関する理解を深めさせ、勤労観・職業観を育成し、生き方・在り方を考えさせることが重要である。」

これらのことを受けて、確かな学力をはぐくむためには、それぞれの生徒の多様な個性に対応できる豊かな教材をどう用意するか、手がかりやアドバイスを与え、生徒自身が自ら考え、活動するよう仕向ける指導技術をどう工夫するか、などの「きめ細かな指導」が必要となってくると考えた。

イ 高等学校学習指導要領（平成11年3月文部省）における農業・工業・商業科の教科の目標には、いずれも「主体的、合理的」という共通した表現があり、「なぜ」という知的好奇心から始まり、問題を発見し、これを解決しようとする態度の育成が重要であるとされている。また、企業が求める人材は単に知識をもっている人間、与えられた仕事をこなすだけの人間ではない。流れの激しい社会の中で、仕事を通して、いろいろな問題を見だし、問題解決できる主体的な人間が求められている。

これらのことを受けて、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむためには、生徒が自分の意志にもとづいて判断し、答えを見つけ出すように仕向け、行動できるよう働きかけることが大切であると考えた。そのためには、生徒を理解し、それぞれの生徒に対応した手だてを考え、適切な指導体制や学習形態を考え、豊かな教材を用意し、指導技術の工夫をすることが必要である。さらに、自己評価は問題解決能力や学習意欲を支える観点からも重視されている。学習評価の在り方についても指導と評価の一体化をめざすものとして考えることが大切であると考え、学習評価の工夫改善を図り、これからの専門教育に関する教科の学習指導に生かすことは重要であると考えた。

ウ 以上のことを踏まえ、教科に関する研究主題「生きて働く学力をはぐくむ学習指導」を受けて、農業・工業・商業科では「生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方」を研究主題として設定した。そして、専門教育としての基礎的・基本的な知識や技術の習得を図り、生徒が自主的に取り組めるよう、授業研究を通して研究主題の究明に取り組んだ。

3 農業・工業・商業科における生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導に関する実態調査

研究協力員の所属する県立高等学校の生徒及び本県の県立高等学校の農業・工業・商業科担当教師を対象に、学習指導の工夫改善に関する教師の意識、授業の実態及び学習指導上の問題点を探るために、研究主題に関する基本的な考えについて質問紙法により実態調査を実施した。

(1) 調査の対象

- ア 生徒…研究協力員の所属する県立高等学校6校の第3学年各2学級〔農業（園芸科・緑地土木科・環境緑地科・生活科学科）・工業（機械科・電子機械科・電気科）・商業（商業科）〕378人を対象とした。回答者は372人、回答率は98.4%。
- イ 教師…県立高等学校（農業・工業・商業）17校の農業・工業・商業担当教員102人を対象とした。回答者は101人、回答率99.0%。

(2) 実施時期 平成15年9月22日（月）から平成15年10月3日（金）まで

(3) 調査結果及び分析 【表中の数値は、全回答者数に対する各問の回答者数の割合（%）である。】

ア 生徒の実態調査

(ア) 意欲的に取り組める授業について（表1）

「どのような授業が意欲的に取り組めるか」という問いについては、「常に好奇心のもてる授業」が全学科で60%を超え、特に工業科においては約70%に迫る割合を示している。

表1 意欲的に取り組める授業について（%）

どのような授業が意欲的に取り組めますか。	農業	工業	商業	全体
大切な内容をその都度確認できる授業	14.1	12.4	11.9	12.6
個人の活動時間が多い授業	4.4	2.9	9.1	5.6
常に好奇心のもてる授業	64.1	69.4	60.8	64.8
要点を端的にまとめた授業	7.6	5.8	8.4	7.3
教材・教具を使った授業	8.7	8.8	8.4	8.6
その他	1.1	0.7	1.4	1.1

また、「大切な内容をその都度確認できる授業」も全学科で10%を超えている。

こうした結果から、生徒は常に好奇心のもてる授業に意欲的に参加することに期待を寄せているといえる。また、生徒は授業の大切な内容をその都度確認して、難しい内容でも一步一步確実なものにしていきたいと考えていることが見受けられる。これらことから、生徒は教師に対して興味・関心のもてるような創意工夫を生かした授業を期待し、専門的な内容を理解するために、一時間一時間の授業を大切に考えていると考える。

(イ) 専門教育の社会的役割について（表2）

「高校での学習内容が将来どのようなかたちで役に立つと思うか」という問いについては「仕事で役立つ」が全学科で30%を超え、特に商業科では40

表2 専門教育の社会的役割について（%）

高校での学習内容が将来どのようなかたちで役に立つと思いますか。	農業	工業	商業	全体
仕事で役立つ	30.4	39.4	44.0	38.9
上級の学校で役立つ	6.5	4.4	5.6	5.4
生涯学習（資格取得）に役立つ	16.3	24.8	37.1	27.4
生活の中で役立つ	45.7	22.6	10.5	23.7
その他	1.1	8.8	2.8	4.6

%を超える高い割合を示している。また、「生涯学習（資格取得）に役立つ」は全体で約30%に迫り、特に商業科では40%に迫る高い割合を示している。さらに、「生活の中で役立つ」は全体では約20%という割合であるが、農業科では半数に迫る高い割合を示す結果であった。

これらの結果は各学科の特徴をそれぞれ示している。生徒は学習内容を「将来の仕事」や「生涯学習（資格取得）」で役立てたいと考え、特に農業科においては「生活の中で役立てたい」という回答が多く、実社会とのつながりを強く意識していることが見受けられる。このことから、学習内容と実社会とのつながりを生徒自らがスペシャリストになるために必要とされる学習に取り組む意欲につなげていきたいと考える。

(ウ) 問題解決をするための学習形態について（表3）

ここでは、「問題解決をするために最も適した学習形態」について調査した。「グループ学習」が全学科で50%に迫る高い割合を示し、「個別学習」も全体で20%を超える割合を示す結果となっている。

表3 問題解決をするための学習形態について（%）

問題解決をするために最も適した学習形態はどれだと思いますか。	農業	工業	商業	全体
一斉学習	18.5	16.1	14.7	16.1
グループ学習	48.9	46.7	48.9	48.1
個別学習	21.7	23.4	18.9	21.3
習熟度別学習	10.9	10.9	16.8	13.2
その他	0.0	2.9	0.7	1.3

これらの結果から、生徒は「グループ学習」を取り入れることが問題解決的な学習には最も適した学習形態であると考えている。また、生徒一人一人の実態に応じたよりきめの細かい対応が期待できることから個別学習についても期待を寄せていることが見受けられる。

(エ) 問題解決の方法について（表4）

「問題に出会った時、解決する方法」についての問いでは、「友人・知人に質問・相談する」という回答が全ての学科で50%に迫る高い割合を示している。ついで、「先生に質問・相談する」が全ての学科で15%以上、

表4 問題解決の方法について（%）

問題に出会った時、解決する方法は次のどれですか。	農業	工業	商業	全体
先生に質問・相談する	22.8	21.2	29.4	24.7
友人・知人に質問・相談する	47.9	48.9	49.6	49.0
家族に質問・相談する	6.5	3.6	1.4	3.5
教科書・ノートなどで授業内容を再度確認し、自力で解決する	15.2	16.1	16.8	16.1
インターネットや図書館等の情報手段を使うなど、自力で解決する	6.5	7.3	2.8	5.4
その他	1.1	2.9	0.0	1.3

、「教科書・ノートなどで授業内容を再度確認し、自力で解決する」も全ての学科で10%を超える割合を示している。

これらの結果から、生徒が学習上、問題に出会った時、友人・知人・先生に質問・相談することで問題解決を図りたいと考え、学ぶことに対して前向きにとらえている。友人に相談することは、学び合いにより、互いに向上することへの期待のあらわれであると考えられる。また、教科書・ノートなどで授業内容を再度確認し、自力で解決するといった考えも大切であると考えられる。

(ウ) 評価の受け止め方について (表5)

ここでは、「自分の学習評価をどう受け止めているか」について回答を求めた。「単に、自分の評価として受け止めている」が全学科で35%以上の割合を示している。ついで「特に何とも感じていない」が全体で25%と

表5 評価の受け止め方について (%)

自分の学習評価をどう受け止めていますか。	農業	工業	商業	全体
単に、自分の評価として受け止めている	35.9	40.1	34.9	37.1
他生徒との比較材料としている	9.8	8.8	7.0	8.4
これまでの学習活動全般の反省としている	14.1	12.4	21.0	16.1
評価について自己分析し、その後の学習に生かしている	14.1	8.0	16.8	12.9
特に何とも感じていない	25.0	30.7	19.6	25.0
その他	1.1	0.0	0.7	0.5

いった割合で、特に農業科・工業科で高い割合を示している。また、「これまでの学習活動全般の反省としている」が全体では高い割合ではないが、商業科では20%を超えている。

これらの結果から、生徒は自分の評価を比較的冷静に受け止めている。学習評価については、学習活動全般の反省や自己分析など積極的に利用している生徒と、そうでない生徒にはっきり分かれている状況である。このことから、生徒は自分自身だけの評価として受け止めており、他の生徒の評価には関心が少ないように思われる。「これまでの学習活動全般の反省としている」や「評価について自己分析し、その後の学習に生かしている」といった評価による自己改革をめざすような回答を期待していたが、予想より低い割合であった。

イ 教師の実態調査

(ア) 問題解決に効果的な学習指導について (表6)

「問題解決に効果的な学習指導を行うために必要だと考えていること」について教師に質問したところ、各学科における特徴がみられた。

表6 問題解決に効果的な学習指導について (%)

問題解決に効果的な学習指導を行うために、必要だと考えていることは何ですか。	農業	工業	商業	全体
生徒に対して多くの質問をする	0.0	16.7	6.2	8.9
生徒自身の活動時間を多くとる	35.3	19.4	41.7	32.7
常に問題提起しながら進める	29.4	27.8	29.2	28.7
要点を絞って重要ポイントを教授する	5.9	22.2	14.6	15.8
教材・教具を使って進める	23.5	13.9	6.2	11.9
その他	5.9	0.0	2.1	2.0

「生徒自身の活動時間を多くとる」が全体で30%を超え、特に農

業科では35%を、商業科では40%をそれぞれ超え、高い割合を示している。ついで、「常に問題提起しながら進める」が全ての学科で30%に迫っている。また、農業科では「教材・教具を使って進める」が、工業科では「要点を絞って重要ポイントを教授する」が20%を超え、高い割合を示している。

これらの結果から、教師は授業において「生徒自身の活動時間を多くとる」ことや「問題提起」をすることが生徒の問題解決が効果的であると考えている。また、農業科では「教材・教具を使って進める」ことや工業科では「要点を絞って重要ポイント

を教授する」ことも大切であると考えている。こうしたことから、問題提起をしたり、教授したのに対して質疑応答をしながら授業を進めていくことが効果的であると教師が考えていることが分かる。また、問題提起や質疑応答の際に、生徒の思考を呼び起こすような発問をすることも効果的であると考えているが、実態は「生徒に対して多くの質問をする」といった回答の割合が低かった。

(イ) 期待する将来像について (表7)

ここでは、「高校での学習内容を、生徒に将来どう生かしてもらいたいのか」について質問した。「仕事で生かしてもらいたい」が全体で35%を超え、工業科では40%を超え、特に高い割合を示している。

表7 期待する将来像について (%)

高校での学習内容を、生徒に将来どう生かしてもらいたいですか。	農業	工業	商業	全体
仕事で生かしてもらいたい	17.6	44.4	35.4	35.6
上級の学校で生かしてもらいたい	0.0	5.6	0.0	2.0
生涯学習(資格取得)として生かしてもらいたい	17.6	13.9	33.3	23.8
生活の糧として生かしてもらいたい	58.9	33.3	29.2	35.6
その他	5.9	2.8	2.1	3.0

また、「生活の糧として生かしてもらいたい」も全体で35%を超え、農業科では60%に迫り、特に高い割合を示している。さらに、「生涯学習(資格取得)として生かしてもらいたい」は、全体では20%を超え、商業科では30%を超え、特に高い割合を示している。

これらの結果から、教師は、学習内容を「生活の糧」や「将来の仕事」とともに、「生涯学習(資格取得)」としても生かして欲しいと考えている。このことから、教師が生徒に対して、生涯にわたって学習する意欲と態度を育成、将来のスペシャリストをめざし、専門性の基礎的・基本的な知識、技術の習得を図ることが大切であると考えていることが推察できる。

(ウ) 問題解決に有効な学習形態について (表8)

ここでは、「生徒が、自主的に問題解決をするために有効な学習形態」について質問した。「グループ学習」が全体で約40%の割合を示し、特に農業科においては半数にせまる高い割合である。

表8 問題解決に有効な学習形態について (%)

生徒が、自主的に問題解決をするためにどのような学習形態が有効だと思いますか。	農業	工業	商業	全体
一斉学習	0.0	2.8	0.0	1.0
グループ学習	47.1	33.3	41.7	39.6
個別学習	23.5	36.1	22.9	27.7
習熟度別学習	23.5	25.0	33.3	28.7
その他	5.9	2.8	2.1	3.0

また、「習熟度別学習」は全体で30%に迫り、特に商業科では30%を超える高い割合を示している。さらに「個別学習」も全体で約30%の割合であるが、工業科では30%を超える高い結果を示している。

これらの結果から、教師は問題解決をするために「グループ学習」の形態が有効であるととらえており、生徒の自主的な活動が重要と考えている。また、「習熟度別学習」や「個別学習」も学科や学校の実態に応じて問題解決をするための効果が高いととらえていると考えられる。このことから、教師は、生徒が自主的に問題解決をするために有効な学習形態には、小人数のグループ学習や個別学習を取り入れることが効

果的であると考えている。特にグループ学習を通して、学び合ったり、協力し合ったりして、仲間と協調する力や仲間を思いやる心をはぐくむことを期待していると考えられる。

(エ) 問題解決の方法について (表9)

ここでは、「問題解決の方法として、どれが有効か」について質問した。全体を通して「先生に質問・相談する」が全体で30%を超えている。工業科では40%に迫る高い割合を示している。「インターネットや図書館等の

表9 問題解決の方法について (%)

問題解決の方法として、どれが有効だと思いますか。	農業	工業	商業	全体
先生に質問・相談する	29.4	38.9	31.3	33.6
友人・知人に質問・相談する	11.8	13.9	22.9	17.8
家族に質問・相談する	0.0	2.8	0.0	1.0
教科書・ノートなどで授業内容を再度確認し、自力で解決する	17.6	22.2	22.9	21.8
インターネットや図書館等の情報手段を使うなど、自力で解決する	35.3	19.4	20.8	22.8
その他	5.9	2.8	2.1	3.0

情報手段を使うなど、自力で解決する」が全体で20%を超え、特に農業科では35%を超え、高い割合を示している。また、「教科書・ノートなどで授業内容を再度確認し、自力で解決する」も全体で20%を超えている。さらに「友人・知人に質問・相談する」は全体では高い割合ではないが、商業科においては20%を超える割合を示している。

これらの結果から、教師は生徒が「先生に質問・相談する」ことにより、問題解決をしていくことが効果的であると考えている。また、インターネットや図書館等の資料から問題解決をさせ、興味がわいたらさらに他の資料を調べることにより、資料から情報を読み取り、想像力を付けさせることを期待していると思われる。さらには、教科書・ノートなどで授業内容を再度確認し、自分なりに考え、自分なりに工夫し、自力で解決することにも期待をかけていると考えられる。

(オ) 学習評価の在り方について (表10)

ここでは、「問題解決的な学習を評価する上で、今後何を重視しなければならないか」について質問した。「学習の過程」を重点項目にあげている割合が高く、全体で40%

表10 学習評価の在り方について (%)

問題解決的な学習を評価する上で今後何を重視しなければならないと思いますか。	農業	工業	商業	全体
定期考査等のテスト	5.9	11.1	4.2	6.9
学習態度の積極性	29.4	44.5	33.3	36.6
学習の過程	41.1	36.1	47.9	42.6
提出物	11.8	0.0	8.3	6.0
自己評価・相互評価	11.8	8.3	6.3	7.9
その他	0.0	0.0	0.0	0.0

を、ついで「学習態度の積極性」が全体で30%を超える割合を示している。

これらの結果から、教師は「学習の過程」、「学習に取り組む態度,積極性」を重視しながら学習の評価をしていることが見受けられる。このことは、物事に真面目に取り組む姿勢を高く評価してやりたいという気持ちをあらわしていると思われる。生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価して、問題解決の学習に生かすことは大切なことであると考えられる。

一方、「自己評価・相互評価」については、もう少し多い回答を期待していたが、あまり取り入れられていない様子である。しかしながら、内面的な評価として生徒一人一人の学習状況を適切に評価するためには、今後の課題として、これらの評価方法も大切な評価項目の一つとして、積極的に取り入れていかなければならないと考えられる。

(4) 実態調査結果のまとめ

研究をすすめる上で、実態調査の結果、次のようなことが明らかになった。

- ア 生徒は、「常に好奇心のもてる授業」に意欲的に参加し、興味・関心をもてるような創意工夫を生かした授業内容を教師側に期待している。また、授業内容を「将来の仕事」、「生涯学習（資格取得）」、「生活の中」で役立てたいと考えており、実社会とのつながりを意識し、その後の学習や将来の生活に生きて働くようにすることをめざしている。生徒自らがスペシャリストをめざし、取り組む意欲をもっている。
- イ 生徒は、問題解決に適した学習形態は、「グループ学習」の形態が有効であるにとらえ、教師側に取り入れて欲しいことを考えている。また、学習上、問題が生じたときは「友人・知人・先生に相談する」ことで人とかかわりながら、問題解決を図りたいと考え、学ぶことに対して前向きにとらえている。
- ウ 生徒は、学習評価を比較的冷静に受け止め、他の生徒の評価には関心が少ない。「特に何とも感じていない」生徒も多く、「これまでの学習活動全般の反省」や「自己分析する」など、積極的に利用している生徒と、そうでない生徒にはっきり分かれている。「これまでの学習活動全般の反省としている」や「評価について自己分析し、その後の学習に生かしている」といった評価による自己改革をめざす回答は低い割合であった。
- エ 教師は、指導上の工夫について、「生徒自身の活動時間を多くとる」ことや「問題提起しながら進める」といったこと、また、教材・教具を効果的に使い、要点を絞り込んで教えることで、生徒の学習意欲を高めることが大切であると考えている。また、高校での学習内容を、生徒に将来どう生かしてもらいたいかについては、「生活の糧」や「生涯学習（資格取得）」として生かせる授業を考え、就職したら「仕事で生かして」もらいたいと期待をもっている。
- オ 教師は、問題解決に適した学習形態は小人数の「グループ学習」を取り入れていくのが効果的であるにとらえ、生徒の自主的な活動が重要であると考えている。また、学習上、問題にあたった時には、まず大切なことは「先生に質問・相談する」さらにグループ学習の形態を取り入れることを考えると、「友人・知人に質問・相談する」ことによって解決することが有効であると考えている。さらに「インターネットや図書館等の情報手段を使う」ことや「教科書・ノートなどで授業内容を再度確認する」ことを通し、自力で解決することも問題解決には大切な方法であると考えている。
- カ 教師は、学習評価の在り方について、問題解決的な学習を評価する上で、重視しなければならないこととして、「学習の過程」や「学習態度の積極性」をあげている。常に問題意識をもち、教師に質問をするなどの積極性や物事に真面目に取り組む姿勢を高く評価している。また、今後の課題として生徒による「自己評価・相互評価」についても、生徒に評価による自己改革をうながすためには、学習評価の在り方のひとつとして考えていく必要があるものと考えられる。

4 研究主題に迫るための手だて

生徒及び教師を対象とした実態調査の結果を踏まえ、次のような手だてを講じ、授業研究を通して研究主題を究明することとした。

- (1) 生徒の求める好奇心や意欲のわくような授業をめざすために、効果的な教材や資料を用意する。また、生徒が「大切な内容をその都度確認できる」ように「常に問題提起しながら進める」ことや生徒の思考を呼び起こすような発問により、学習意欲を高める。さらに、生徒の自主性を高めるために「生徒自身の活動時間を多くとる」ように学習指導の工夫・改善を図る。
- (2) 授業を行う上では、生徒が自主的に行動する力を付けるために、実践的な内容を講義や実習に多く取り入れたり、生徒が自主的な学習活動を行うための場面を多く取り入れる。また、自主的に学習に取り組むことができるように、「グループ学習」の形態を、さらに、「個別学習」を取り入れることにより、個に応じた学習指導にも対応できるように努力をする。これらの活動により、問題解決に向けた活動を通し、生徒が自主的に行動する力をはぐくむ授業を実践する。
- (3) 評価については、「学習の過程」や「学習態度の積極性」を評価の重点とし、自主的・主体的に授業に取り組む姿勢をはぐくむ。また、「自己評価・相互評価」を取り入れ、生徒が他生徒への評価にも関心をもつ工夫をし、生徒が評価に対する意識を高めるための評価方法について、工夫・改善を図る。

5 授業研究

研究の基本的な考えと実態調査の結果を踏まえ、手だてを講じ、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方を究明するため、2年間にわたり農業・工業・商業科の各教科において授業研究を行った。

(1) 農業科における授業研究

1年目の授業研究は、座学中心の「農業土木施工」において、生徒が自主的に授業へ参加することに重点を置いて取り組んだ。そのための手だてとして、生徒の興味・関心を喚起するための効果的な資料や教材を用意し、一斉授業の中にグループ学習の要素を取り入れた時間を設定した。授業においては、自動車に関する資料から興味をひくことにより授業展開をした。

その結果、次のことが明らかになった。

授業において、内容に対する積極的な発言や発問がなされたグループとそうでないグループに差が生じてしまった。これは自主的な学習をはぐくむための方策を教師側で用意しておかなければならなかったのが原因である。しかし、生徒への関心付けには成功し、その後の授業展開に意欲的な生徒を生み出す結果となった。生徒との信頼関係を築きながら、豊かで潤いのある授業が行えたことにより、生きて働く学力の向上に結びつけることができた。

(2) 工業科における授業研究

1年目の授業研究は、科目「情報技術実習」において、教師が学習範囲の要点を絞り込んで教えることにより、生徒に重要ポイントを理解してもらうこと、身に付けた知識や技能を卒業後に生かしてもらうことに重点を置いて取り組んだ。そのための手だてとして、

グループ学習の形態の中で個に応じた学習指導にも対応する内容を取り入れ、さらに生徒が行動する力を付けるために実践的な実習内容を取り入れ、授業を展開した。

その結果、次のことが明らかになった。

一人一つの作品製作を通して生徒一人一人が責任をもって取り組み、それぞれ個性的な作品が完成した。一連の授業を通して自主的に行動し問題解決する力が見られた。今後における問題解決能力や自発的、創造的な学習態度を期待することができた。また、二人一組のグループ学習であったので協調性も見られ、相手を評価することで相手に対して関心をもって実習に取り組むことができた（資料1）。

(3) 商業科における授業研究

1年目の授業研究は、科目「プログラミング」において、学習内容を資格取得、さらには将来の仕事や生活の糧として生かすために、生徒が自主的な学習活動を行うための場面を多く取り入れることに重点を置いて取り組んだ。そのための手だてとして、授業に対する目的意識を「資格の取得」に重点を置いて、生徒が主体的に取り組むための目標としてとらえ、その目標を達成するために、「内容がよく理解できる授業」に努めた。また、生徒が自主的に学習に取り組むためにグループ学習を取り入れ、生きて働く学力をはぐくむ授業を実践した。さらに、生徒が自主的に学習活動を行うために学習の過程で作業的要素を多く取り入れた。

その結果、次のことが明らかになった。

学習課題の設定については、生徒の実態の応じた適切な課題を用意することが、生徒の自主的な取り組みに大切であることが分かった。グループ学習については、学び合いの場面が多くみられ予想以上の効果があることが分かった（資料2）。

なお、2年目の研究となる農業・工業・商業科における授業研究については次の通りである。

資料1 実習日誌（情報技術実習）

実習日誌	
情報技術科2年 番 名 前	
平成15年 月 日 () 1 時限 ~ 3 時限	
本時の目標 LEDを点滅させる。	
活動内容 作図をして、回路を作る。	
感想・反省・結果 前回はLEDが点滅しなかったから、今日の点滅は成功した。	
自己評価	8
気がついた事	
同じ班の生徒の評価	10
その理由 作図をするのがとても早く、よく理解したからと、全体的に作業が早かったから。	

資料2 評価票の記入例

「プログラミング」評価票		
1年6組3? 番 氏名		
I 自分自身について		
評価基準	5:よくできた 4:できた 3:まあまあできた 2:あまりできなかった 1:できなかった	
評価項目		
課題の内容について理解できたか	1・2・3・4・5	
プログラムの流れについて理解できたか	1・2・3・4・5	
コーディング作業について	1・2・3・4・5	
プログラムの入力について	1・2・3・4・5	
グループでの学習について	1・2・3・4・5	
プログラミングの流れについて理解できたか	1・2・3・4・5	
今日の反省・記録 70-シートを書くとき、プログラムの流れがよくわからなくて、感じだせるときに時間があがりました。75の授業がまだよくわかっていないので、これを理解してあげようとした。Formatの書き方の使用法も詳しく理解していきたい。		
II グループのメンバーについて		
今日の授業と一緒に取り組んだグループのメンバーについてあなたは、5点満点で何点つけて上げますか?その理由と一言コメントも記入してあげてください。		
グループのメンバー	点数	コメント
さん	5	最後の見直し時、群しく教えてくれてよく理解ができました。
さん	5	間違っている点を見て見つけて教えてくれたので助かりました。
さん	5	コーディングや70-シートを書くときによく相談のてくれてとても助かりました。

【授業研究1】 高等学校農業「課題研究」において、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方

(1) 授業研究のねらい

科目「課題研究」は自発的・主体的な学習を展開し、実習や体験をとおして考える力や判断する力及び表現する力などを身に付け、問題解決に向けての姿勢や能力を養う科目である。本研究ではこの問題解決型学習の中の制作活動をとおして問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導について研究することとした。

(2) 生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむための手だて

ア 生徒に興味・関心をもたせ、持続させるための工夫

生徒の制作意欲を高めるためにできるだけ生徒のイメージしたものを認め、粘土を使用して具体的・立体的に表現させる。その模型を常時見比べながら見通しをもって、石造彫刻の実習を行う。また、その日の作業目標をもたせ取り組ませる。

イ 指導体制及び方法の工夫

指導体制は教諭・実習教諭・社会人講師（ゲストティーチャー）の3人の指導体制である。石材加工の指導は専門性が高く高度な技能を必要とするため、社会人講師を採用している。石材加工コースの生徒は10人で、5人ずつ二班に分かれている。一班は立体彫刻班で、もう一班が石画班である。今回の授業研究は立体彫刻班だけであったが、通常は石画班も同時進行しており、指導者の役割も分かれている。社会人講師が立体彫刻班を、実習教諭が石画班を主に指導している。教諭は両方を掌握するようにしている。指導者は生徒が自ら考え、活動できるような声かけやアドバイスをすることに心がけている。

ウ 評価の工夫

実習への「取り組み姿勢」及び「作業進度・技術」の評価について、自己評価と相互評価を行い、自分と他人との考え方・感じ方を比較することにより反省と課題を見付けさせる。また、観点別評価を取り入れ、客観的な評価ができるようにする。

(3) 授業の実践

ア 年間指導計画

1年次に石材加工の導入として、木工彫刻を取り入れ、2年次からの石材実習では、平石彫刻・字彫り彫刻（表札・石画）を行い、芸術的な基礎を学ぶ。3年次に石材コースを選択した専攻生が立体彫刻と石画（彩色）を行い、芸術性の高い作品を制作することを目標としている。このことから「ものづくり」に対する興味・関心を高め、生涯学習の糧となるように位置付けている。

科目「課題研究」は2単位（火曜日の午後）で実施している。しかし、この時間内では作品を制作するのに時間不足なことから、「総合実習」2単位（木曜日の午後）も活用して制作実習に当てている。指導の充実を期するため、課題研究の時間に社会人講師（ゲストティーチャー）を招聘し、石造彫刻の基本から実践、加工技術の指導を受け、11月初めの「いばらきストーンフェスティバル」に特別出展、さらに中旬に行われる本校の文化祭に展示するため、平成16年10月末までに作品を完成させた。

イ 本時指導計画

「いばらきストーンフェスティバル」出展のため、平成16年10月末の完成を目指し、成型・仕上げの段階に入る。

完成度の高い作品を目指し、丁寧に仕上げ作業をさせる。

ウ 本時の学習指導案

日時 クラス	平成16年10月5日(火) 3・4時限 環境緑地科3年 石材加工コース選択5名	科目 場所	課題研究(石材加工) 石材加工実習棟	
単元名	石造彫刻作品を制作しよう			
単元目標	作品制作を通して「ものづくり」に対する興味・関心をもたせ、実習への取り組み姿勢や態度を身に付ける。また、加工技術の向上を図る。			
指導計画	1 石造彫刻物の見学・観察(4) 2 制作物の創造(図や粘土模型)(4) 3 原石の選択及び墨付け(2) 4 外観の型どり加工(20) 5 成形及び仕上げ加工(34)【本時は21・22時間目】 6 出展・展示(4) 7 反省・評価(2)			
本時の目標	自分のイメージした型に近づくよう成形加工する。			
準備	加工工具一式、マスク、メガネ、軍手			
	指導及び学習内容	時間	指導上の留意点	評価の観点
導 入	使用工具の準備 健康安全防具の準備 本時の目標を考え、発表する。	15 分	・今日の作業の見通しを立てさせ 具体的にどのような作業をする のか考えさせ、発表させる。 ・健康と安全に留意させる。	思考・判断 関心・意欲 ・態度
展 開	成形加工をする。 ・ノミ・ピシャン・タタキ 等の加工工具の使用 ・コンプレッサー工具の使 用 (休憩)	60 分 10 分	・工具の選択、使い方の様子を観 察し、適切な方法を考えさせる。 ・生徒が主体的に判断し行動でき るよう、ヒントなどアドバイス 的な声かけをする。 ・他の生徒の様子を観察させ、相 互評価を意識させる。	思考・判断 関心・意欲 ・態度
ま と め	道具や木っ端を片づける。 実習日誌へ感想や反省を記入 する。	20 分	・作業場所の整理整頓をさせる。 ・自分の実習態度や姿勢を見つめ させ、自己・相互評価させる。	思考・判断
評 価	作業目標にどのくらい達成したか。 主体的に考え、作品制作に取り組めたか。 自己評価・相互評価は適切であったか。			

資料1 石材加工実習日誌

石材加工実習日誌 2年2組 氏名

10月5日(火曜)

1. 今日の実習日誌について
 ①姿勢・動作面 無理な姿勢にしない。
 ②作業進度面 様子を見守る。

2. 自己評価について
 ①最後まで集中して作業できたか。(10点満点) 8点
 ②自分で考えて作業できた点をあげてみよう。
 ○ 毎に作業について細かく聞いてきた。
 ○ 今日はいかに作業する事ができた。

3. 相互評価について
 ①自分より良く実習を行っていた人は誰ですか。
 君
 ②どういう場面をそう思いましたか。
 先生に頼らず自分で開いたって頑張っていた。



実習風景(石材加工)

資料2 アンケート結果(平成16年10月5日実施, 石材加工コース選択5人)

石材実習について、当てはまる番号に を付けなさい。

- 実習時間(実質作業時間)中、集中して作業ができましたか。

集中し継続して最後まで作業できた。	途中休んだが最後まで作業できた。(5人)
集中できず休みの方が多かった。	その他
- 作業が維持できた要因はなんだと思いますか。

見通しがもてたから。(2人)	模型をみながらできたから。(3人)	見学者がいたから。
指導者の指導があったから。(5人)	その他	
- 指導者について、社会人講師は必要だと思いますか。

大変勉強になり必要である。(4人)	あまり必要でない。	どちらとも言えない。(1人)
-------------------	-----------	----------------
- 指導方法についてどう思いますか。

具体的な指示でわかりやすい。(3人)	いつも近くにいるので聞きやすい。(2人)	勝手に作業している。
細かく指示しすぎである。	その他	
- 評価について、自己評価をどう思いますか。

自分の取り組みを常に意識するようになった。(1人)	適当に書いている。
自分なりに反省するようになった。(4人)	その他
- 相互評価について、どう思いますか。

友達の作業をよく見るようになった。(3人)	自分と比較して判断している。(2人)
適当に書いている。	その他
- 社会にでてから生きて働く力とはどんな力だと思いますか。

会社で働く力	自立する力(2人)	臨機応変に対応する力(3人)
自分の力を出せる力(2人)	生活を継続する力	その他

8	生きて働く力を身に付けるには何が必要ですか。			
	集中力(1人)	自主性	忍耐力(1人)	体力(1人)
	意欲(3人)	思考力(3人)	経験・体験(1人)	その他
9	石材実習の中で生きて働く力が身に付く場面はどんなときですか。			
	実習を最後まで行う。(3人)	集中力を持続させる。(2人)	考えながら行う。(3人)	
	互いに評価し合う。	自己評価で反省する。	見通しをもつ。(2人)	その他
10	生きて働く力が身に付いたと思いますか。			
	思う(4人)	思わない	どちらとも言えない(1人)	

(4) 授業の結果と考察

ア 生徒に興味・関心をもたせ、集中力を持続させるための工夫

彫刻物の模型を作り、型のイメージをもたせ、その模型を見ながら自分で考えるようにして型どり作業を行った。また、時間の初めに作業の目標(目安)を確認し、今日はここまでという見通しをもたせた。アンケート1の回答「途中休んだが最後まで作業できた」は作業する手を休めて他の人の作業を見たり、一息入れる程度の休みであった(資料2)。また、アンケート2では、「見通しがもてた」「模型を見ながらできた」の回答があり、イメージをもつことで思考力、集中力、持続力を出すことができた。しかし、模型そのものが小さく抽象的で、細かいところが作れていなかったため、いざその部分を削ろうとしたときイメージがもてず悩んでいた。できるだけ大きく、細かい部分まで丁寧に表現させておけば良かったと感じた。

イ 指導体制及び方法の工夫

社会人講師を含めて3人体制で実施した。専門的な作業は社会人講師が行い、教諭と実習教諭は、生徒の作業を見ながらアドバイスを行った。生徒の意見を聞き一緒に考えながら作業を確認した。しかし、社会人講師は専門的・高度な作業を自分で行ってしまう場面が多々見られた。これは作業進度が遅れていることも影響していた。アンケート2では全員が「指導者の指導があったから」とし、アンケート3では4人が「大変勉強になり必要である」、アンケート4では「具体的な指示でわかりやすい」「いつも近くにいるので聞きやすい」との回答であった。

ウ 評価の工夫

自己評価の中に「取り組み姿勢」と「考えた作業」についての評価を入れた。自分の作業について見つめることで、作業に対する意識を強くもつようになった。アンケート5では「自分なりに反省するようになった」「自分の取り組みを常に意識するようになった」という回答であった。相互評価については、アンケート6の回答から「友達の作業をよく見るようになった」「自分と比較して判断している」があり、他人への意識と自分との差を感じ、反省や課題発見に役立つものになっている。また、観点別評価では常に思考力と判断力を評価し、自分なりの考えや意見が出ていたか、自分なりの判断で行動していたかなどを観察した。多少の違いはあるが生徒全員に自ら行動している場面が見られた。

(5) 授業研究の成果と課題

ア 研究の成果

(ア) 興味・関心のある彫刻物の模型を作り、作品の具体的なイメージをもつことで、自ら積極的に作業する態度が見られるようになった。また、作業の見通しをもつこともでき、制作意欲を維持し、集中して作業も持続できた。

アンケート8, 9の「生きて働く力」の問いに対し、8の回答「意欲」、9の回答「実習を最後まで行う」「集中力を持続させる」「見通しをもつ」という回答が多かったことから成果があったと考える。

(イ) 通常は彫刻班と石画班の2班に分かれて実習を行っているが、今回は彫刻班に絞って3人体制で行った。技術指導や声かけに余裕ができ、適切なアドバイスができた。生徒達がアドバイスをもとに作業工程や加工技術を考えて行動している姿を何度か見ることができた。

同じくアンケート8, 9の問いに対し、8の回答「思考力」、9の回答「考えながら行う」という回答が多かったことから成果があったと考える。

(ウ) 自己評価や相互評価を取り入れることで、友達の取り組み姿勢と比較しながら、自分の作業態度を反省したり、課題を見付けたりするなど、今後の取り組みに前向きに考えるようになった。

アンケート10の「生きて働く力が身に付いたか」の問いに、「思う」と4人が回答したことは、自分なりに意識をもったことで、今までにない思考が働いたからだと考えられる。このような気持ちが重なっていくことで自主的な行動力がはぐくまれていくと考えられる。

イ 今後の課題

(ア) 模型の工夫

彫刻物をイメージする、またはイメージした物を形に表すことが難しい生徒への対応として、写真やミニチュア物をたくさん揃えておくことや、粘土の他に石膏を利用するなど、模型を工夫することで、さらにイメージをもたせ想像力と表現力の向上を図りたい。

(イ) 芸術性を養うための創意・工夫

現実問題として芸術性の弱い生徒は、「ものづくり」への興味・関心が弱く、イメージしたものを彫刻で立体化することが苦手のようなのである。そのため集中力も長く続かない。日頃から芸術鑑賞の機会を多くしたり、芸術にふれる環境を整えるなど、芸術性を養う必要性もあると考える。

(ウ) 指導者の石材加工技術の向上

社会人講師に助けられている専門的な加工技術を学校指導者も身に付け、生徒に指導できるように技術の習得に努めたい。

(エ) 評価の工夫

1日ごとの評価だけでなく、生徒の意識の変化をみるため、1週・1ヶ月・1学期など時間的経過の中で変化がみられるような評価内容や知識・理解の程度を評価する方法などを考えていきたい。

【授業研究 2】 高等学校工業「電子機械実習」において、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方

(1) 授業研究のねらい

科目「電子機械実習」は、電子機械分野に関する基礎的な技術を実際の作業を通して総合的に習得させ、技術革新に主体的に対応できる能力と態度を育てることを目標とするものである。

本研究では、生徒が問題解決のために、自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方を探るために、生徒が自ら学んで問題を解決したり、自発的に学習する力をはぐくむことについて研究を行う。

(2) 生徒が問題解決のために、自主的に行動する力をはぐくむための手だて

ア 生徒の求める好奇心や意欲のわくような授業の工夫

普段何気なく使用しているパソコンの内部を知ることにより、「中身を見てみたい」という好奇心を引き出し、パソコンを分解させることによって見ることができる部品の名称や役割を、意欲的に調べようとする態度を導く。

イ 実践的な実習内容の工夫

実習の中で、インターネットを利用した資料の検索と、デジタルカメラを使用した画像の取得を行い、文字だけではなく、画像を使った報告書の作成能力を身に付ける。

ウ 他の生徒にも関心をもつ工夫

実習のパートナーの評価をすることにより、自己評価を考えさせ、実習の評価を単に自分の評価として受け止めるのではなく、評価への関心を高めさせる。

(3) 授業の実践

ア 年間指導計画

学習計画表 (電子機械科第2学年)

月	実習項目	内 容
4月 ～9月	○電子回路実習 ○NC旋盤実習 ○CAD実習 ○プログラミング実習 (1項目週3時間×4週×4項目 =48時間)	○電子回路の基礎～応用 ○プログラミング～切削 ○CADの基礎 ○Visual Basic ・デジタル時計を作ろう。 ・計算機を作ろう。 ・ゲームを作ろう。(もぐらたたき)
10月 ～3月	○電子回路実習 ○NC旋盤実習 ○CAD実習 ○プログラミング実習〔本研究〕 (1項目週3時間×3週×4項目 =48時間)	○電子回路の基礎～応用 ○プログラミング～切削 ○CADの基礎 ○パソコンの構造調べと校内LAN, 電子メールの活用 ・パソコンの内部を知ろうⅠ・Ⅱ ・LANⅠ・Ⅱ

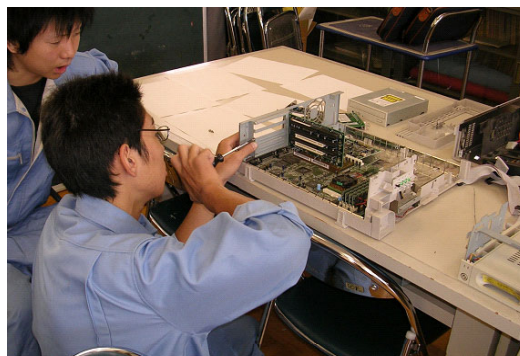
イ 電子機械科実習指導案

クラス (生徒数)	2年電子機械科 (10)		教科・科目	工業・電子機械実習
単元	プログラミング		教室	C棟・電気電子基礎実習室
単元目標	基本的な電子部品の理解とパソコンの構成部品を知る。 それぞれの部品の役割とパソコンの仕組みを関連付ける。 他人にわかりやすい報告書がまとめられる。			
指導計画	パソコンの内部を知ろうⅠ [ハードウェアの基礎知識]		(第1週目)	
	パソコンの内部を知ろうⅡ [パソコンの分解及び部品の観察]		(第2週目) …本時	
	LANⅠ [Linuxの基礎知識]		(第3週目)	
	LANⅡ [LANの構築及びメールサーバの基礎知識]		(第4週目)	
本時の目標	パソコンの内部 (ハードウェア) に興味をもち、関連知識について調べることができること。			
資料・準備	材料	各種パソコン		
	工具	分解・組立用ドライバー		
	機器	デジタルカメラ		
	資料	インターネット閲覧用パソコン ファイルサーバ		
	学習活動 (学習形態: グループ学習)	評価の観点	指導上の留意点	
導入	<ul style="list-style-type: none"> パソコンのケースを外し、部品を観察する。 興味をもった部品の写真を撮る。 	<ul style="list-style-type: none"> 関心・意欲 態度 	<ul style="list-style-type: none"> 分解に際しての注意事項を守り、興味深く観察できたか。 必要な画像が撮れたか。 	
展開	<ul style="list-style-type: none"> デジタルカメラの画像をパソコンに取り込む。 報告者の書式に合わせて、画像及び説明のレイアウトを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 技能・表現 	<ul style="list-style-type: none"> パソコンのツールやソフトを使いこなすことができているか。 ワープロソフトの基本操作ができているか。 	
結び	<ul style="list-style-type: none"> 部品に必要な説明を調べる。 共同実習者の画像やテキストデータを組み合わせて、それぞれの報告書をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 思考・判断 	<ul style="list-style-type: none"> 必要な情報を入手する方法を的確につかんでいるか。 画像やテキストデータを組み合わせることができるか。 	
評価	<ul style="list-style-type: none"> まとめの項目を話し合う。 共同実習者を評価する。 メールによる報告書の提出 	<ul style="list-style-type: none"> 知識・理解 	<ul style="list-style-type: none"> 他人の意見を聞く姿勢ができているか。 他人の意見を自分の意見に反映させることができるか。 相手の評価が的確にできるか。 	

(4) 授業の結果と考察

ア 生徒の求める好奇心や意欲のわくような授業の工夫

電子機械科の生徒のほとんどがパソコンに興味をもっているが、分解した経験をもつ生徒は少ない。パソコンのケースを外して、内部が見えたときの驚きと目の輝きは、他では見られない実習風景である。知っている部品を早く探そうとする生徒、何が何だかわからないが面白そうな部品を見つけて、さらに内部を見ようとする生徒等さまざまである。



実習風景 (パソコンの分解)

課題の設定についての工夫は、2人で同じ部品を取り上げて、同じ学習をするのではなく、個々の興味・関心によって別々の部品を選択することにより、自発的意思によって探求する。これによって、どの部品にするか迷いながらも部品の名前から始まり、役割等を楽しそうに調べる姿を見ることができた。

パソコンの分解を通して、内部を調べることにより、未知の世界に入っていこうとする好奇心と、自発的意思による探求心をもたせることができたことは、この教材と課題の設定が目的を達成できた証拠となるものである。



実習報告書作成

イ 実践的な実習内容の工夫

分解・組立に時間を確保するために、インターネットを利用した検索にあまり時間を取れないため、教師側からWebサイトを指定し、事前の基礎知識として利用した。また、分解・組立をするパソコンの選択は自由とし、実習に必要な知識を的確に把握できる関連知識に関する資料を準備した。

生徒は、インターネットを利用して資料を検索する方法は学習しているが、「的を得たサイトがヒットすることはそれほど多くない。」ということのを他の実習で把握している。そのために必要な情報の探し方と資料の見方を示し、自主的な行動を促すことにした。これにより、資料を見ながら実習を進め、パソコンのスクリーンセーバーの時間を長くしたり又は外したりする等、自分たちには今何が必要なのかを考えるさせることができた。

携帯電話のメールに画像を添付し送信することはほとんどの生徒ができるため、デジタルカメラで取った画像をどう処理するかを考えさせることにより、マルチメディアへの対応能力を身に付けさせる。特に、この実習に限り、携帯電話のカメラの使用を許可された者は、慣れた手つきで画像取得を進めている様子が見られた。

実習テキストをパソコン上のファイルとしたことに合わせて、電子メールによる報告書の作成・保存の方法を採用することにより、実習室内のペーパーレス化の実現を目指し、環境問題を学習させることができたが、パソコンの画面を見ながら作業することに慣れない生徒、テキストが手元にないと不安な生徒がいることも確認できたので、冊子にしたテキストを提供することも必要であると考えられる。

電気部品及び電子部品が集約された製品の分解・組立ての経験により、工業に関する基本的な能力が身に付けることができた。

ウ 他の生徒にも関心をもつ工夫

実習内容を理解し、役割等を実習のパートナーと相談することにより、効率よく、積極的に行動できるようになった。実習の過程の中で、パートナーの意見、態度、報告書の出来具合等を評価することにより、自己評価の規準を探り、実習の評価を単に自分の評価として受け止めるのではなく、評価への関心を高めさせることができた。

また、二人一組にしたことにより、協調性をもち、お互いに作業への取り組みが協力的になり、他の生徒にも関心をもって接するようになった。

グループのまとめとして、「日常生活でも使用できるようになったか。」「グループ内での話し合いはできたか。話し合った内容を生かされたか。」等について話し合い、評価し合うことで、社会に出て行く出発点となる力を身に付けることができた。

資料1 実習報告書様式

電子機械科 2年1組**番号 氏名 ** **	
実習日：平成16年**月**日 第4校時 ~ 第6校時	
共同作業者：** **	
今回の実習にあたっての班の目標： パソコンを分解してパソコンの仕組みを学ぶ	
興味の湧いた部品 (1人1点)	
1 部品名：ハードディスク ・興味をもった人の氏名：**君 ・興味をもった理由 CDやFDと違って中のディスクの持ち運びができないものなので興味をもった。 ・パソコンの中での役割： データを記録する倉庫のような役割。 ・その他で気が付いたこと、調べたこと。	
2 部品名：CPU ・興味をもった人の氏名：自分 ・興味をもった理由： すごく面白い形をしていて、重要そうだから。 ・パソコンの中での役割： 中央演算装置 パソコンの頭脳のような役割。 ・その他で気が付いたこと、調べたこと。 CPUの上にはファンがのっていたけど、ノートパソコンには、どうやっていれているのかと思った。	
使用したデジタルカメラの記録	
1 メーカー：SONY	2 型番：48154
3 記録媒体：フロッピーディスク	
感想・反省・結果 10段階評価ではいくつ?	
1 デジタルカメラなどの外部機器から画像は取り込めましたか。・・・【10】	
2 今回の実習は、世の中に出てから役に立つと思えましたか。・・・【7】	
3 どんな職業に役に立ちますか。具体的に知っていたら記入してください。	
職種等：パソコンに携わる仕事。	
4 共同実習者と話し合いが出来ましたか。・・・【10】	
5 共同実習者の意見を聞くことが出来ましたか。・・・【10】	
6 共同実習者の今回の実習の評価をしてください。・・・【10】	
その理由も記入してください。	
理由：かなり一生懸命やっていて、パソコンを分解するのとても早く、ちょっとついていけなかった。しかもかなり熱心だったので10点。	
7 自分の今回の実習の評価をしてください。・・・【10】	
その理由も記入してください。	
理由：自分が精一杯がんばったと思うので10点。	

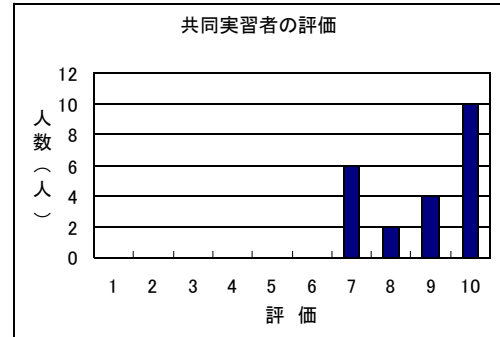


図1 共同実習者の評価

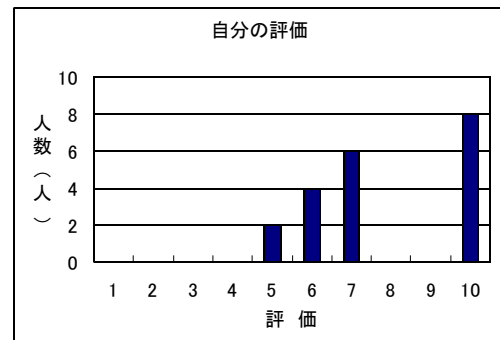


図2 自分の評価

(5) 授業研究の成果と課題

ア 研究の成果

電子機械科に入学してくる生徒は、多少はパソコンに興味をもっており、生徒の求める好奇心に応じられたかどうかは分からないが、パソコンのケースを外して、内部が見えたときの驚きと目の輝きから、パソコン分解という項目を取り入れることにより、パソコン内部について学習していこうとする好奇心と意欲のわくような授業の工夫としての目的は達成できたのではないかと考える。

教師側があらかじめ用意した課題を提示するのではなく、生徒自身が実習を進めていく過程の中で、疑問をもった部分や個々の興味・関心によって選んだ部品を自らの課題として設定していくことにより、課題に対する解決方法を自発的意思によって探求させる方向に向けられたことは大きな成果である。

生徒が作成した実習報告書から、予想した主要部品への集中はなく予想外の部品にまで興味をもつことが現れており、生徒の興味・関心が多種多様化していることが明らか

になった。

二人一組のグループ学習を取り入れることにより、パートナーとの話し合いがよく行われ、自分の得意な分野ではリーダーシップをとり、相手の意見をよく聞きながら実習を進める等、40人の一斉授業では見ることができない他人に対する思いやりと協調性が生まれるとともに、周りのグループの状況を意識することにより、自分たちの課題に対して自主的に学習することができた。

日常生活では、製品の小型化、デジタル化が進み、実習内容においても時代のニーズに対応したものが要求されており、インターネットや携帯電話の利用は、生徒の間ではもはや常識であり、これらをどう日常に取り入れて、活用していくかに課題がある。

「案ずるより生むが易し」のごとく、デジタルカメラや携帯電話を使い、意外と画像を実習報告書に取り込む作業は抵抗がないことが確認できた。

相互評価において、本人と相手を同じ評価または本人以下の評価にした生徒はほとんどおらず、図1及び図2から相手を高く評価する思いやりとも考えられる結果が報告されている。また、自分に対しての評価において、一生懸命できた自分を高く評価し、少しでも理解が足りなかったり、作業がスムーズに実施できなかったりした場合には厳しく評価をする等、中途半端な評価はしていないことが明らかになった。

グループのまとめとして、「日常生活でも使用できるようになったか。」「グループ内での話し合いはできたか。話し合った内容を生かしたか。」等について話し合い、評価し合うことで、社会に出て行く出発点となる力を身に付けることができた。

イ 今後の課題

より生徒の好奇心に応じ、意欲的な実習の取り組みを実現するためには、年間計画の実習内容に連携をもたせることが必要である。プログラミング実習において、パソコンの分解・組立からパソコンの製作に発展させ、オペレーティングシステム(Linux等)をインストールし、ネットワークに接続するまでを一つの流れとした実践的実習内容が求められる。そのためには、事前に必要な知識、電子部品の特徴や取扱の注意事項も合わせて身に付けさせる必要がある。

生徒に自己評価や相互評価を、評価情報のひとつとして積極的に取り入れることも必要であるが、「よくわかった。」「わからなかった。」等の段階自体ではなく、「どこがわからなかった。」や「なぜ面白くなかったか。」を明らかにしなければ、自己評価の結果を次の指導に生かせないため、評価表の工夫や評価の場を工夫する必要がある。また、自己評価に継続的に取り組むことにより、生徒は自分の学びを振り返るとともに、自己評価能力を高めることにつながると思う。

周りのグループの状況を意識することにより、自分たちの課題に対して主体的に学習することができている。実習のまとめをグループごとに発表させる等、生徒が共同実習者以外の他の生徒全員の評価ができるような場を提供することが必要である。

【授業研究3】 高等学校商業「商品と流通」において、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方

(1) 授業研究のねらい

変化の激しいこれからの社会のなかで、学ぶ意欲や将来直面する様々な課題を解決する力を重視するという国際的な流れのなか、主体的、創造的に生きていくためには、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむことが重要視されてきている。

今回、商業の科目「商品と流通」の授業において、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導について授業実践することとした。

授業実践にあたり、教材・資料などを工夫し、グループ学習などの学習形態を効果的に採用するとともに、生徒の評価に対する意識を高めるための評価方法についても工夫・改善を図ることで、生徒が自主的に学習活動を行うことのできる授業展開について考えてみた。

(2) 生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむための手だて

ア 生徒に興味・関心をもたせ、学習意欲を高めるための工夫

小売商の種類学習において、実在する地理的状况を用い、自ら起業家となり店舗運営を行うことを想定させながら授業を展開するなどし、学習に対して積極的に参加できるようにする。

イ 自主的に行動する力を付けるための学習形態の工夫

生徒22人を5つの班に分け、班ごとに会社を設立して店舗開設・運営を考えるなど「グループ学習」を取り入れることで、生徒一人一人が主体的に学習活動を行えるような場面を設定する。

ウ 自主的・主体的に授業に取り組むための評価方法の工夫

学習活動への取り組み状況などについて、「自己評価」および「グループ内評価（相互評価）」を行うとともに、他の班（他社）の生徒からの評価も取り入れることで、生徒一人一人が自身の学習活動への反省点・課題などをしっかりと把握できるようにする。

(3) 授業の実践

ア 実践クラスの実態

授業研究を行った第2学年3組は、本校商業科のなかでも流通ビジネス・簿記会計分野に関する学習に重点を置いた「ビジネス会計コース」のクラスである。「ビジネス会計コース」では、第2学年次に3単位で商業科目「商品と流通」と「英語実務」との選択授業が設定してある。第2学年3組34人（男子17人・女子17人）のうち「商品と流通」選択生徒は22人（男子13人・女子9人）、「英語実務」選択生徒は12人である。「商品と流通」選択生徒は、英語を不得意としている生徒が消去法的に受講している傾向があり、授業に対して深い関心をもっている生徒は少ない。

イ 実践内容

今回は、流通の担い手である小売商の学習において授業研究を行った。なかでも、店舗を構えて商品の品揃えを行い、来店した顧客に対して商品を販売するという業態をとる有店舗小売商について、その多様な形態の理解を深めることを目標とした。

前時の授業において一通りの解説を行っており、本時では、自主的に行動する力をはぐくみながらその理解を確実なものにするための指導方法を研究した。授業の流れは次の通りである。

(ア) 前時の学習の復習

(イ) 山形市内の特定地点における最適な小売商の形態についてグループごとに検討

(ウ) グループ代表者による検討結果の発表

(エ) 発表内容についての評価

(オ) 本時の学習活動に対する自己評価、および所属グループメンバーに対するグループ内評価（相互評価）

ウ 本時の学習指導案

教科・科目	商業科「商品と流通」		教科書	実教出版株式会社 商品と流通	
実施日	平成16年9月17日(金)		実施時間	第3時限	
実施学級生徒	商業科 第2学年3組 選択者22人(男13・女9)		実施場所	第2学年3組教室	
単元	第4章 流通の仕組みとその担い手 第2節 小売商と卸売商 2 小売商の種類				
単元目標	小売商の種類とその主要な形態や特性などについて理解する。 小売商のこれまでの動向と今後の方向性について認識する。				
指導計画	1 小売商と卸売商の働き … 1時間 2 小売商の種類 … 4時間 3 小売商のチェーン化と集積化 … 2時間 (本時はその3時間目)		4 卸売商の種類 5 卸売商の集積化		2時間
本時の目標	有店舗小売商の形態について理解を深める。				
準備資料等	教科書、山形市内地図、グループ活動用プリント、評価票 パソコン、プロジェクタ、スクリーン				
展開	時間	学習内容	学習活動	学習形態	指導上の留意点・評価の観点
導入	5分	前時の復習	有店舗小売商の分類について復習する。	一斉	前時の復習をしながら本時の展開につながるようにする。
展開	15分	店舗開設の検討	出店予定地について検討する。 開設する店舗の形態について検討する。	グループ	実在する地理的状況を用いることで、学習に積極的に参加させるように努める。 地図の状況から、予想される顧客層などを考えさせる。 出店予定地にふさわしい店舗形態についてグループ内で検討させる。机間指導などでグループの話し合いがスムーズに進むよう注意する。 【関】【知】 【評価の方法】討議・発表態度
	20分	発表	グループでの検討内容について発表する。	グループ代表	各グループで話し合った内容について、代表者に説明をさせる。 発表グループ以外の生徒からの質問も取り入れる。 【関】【技】 【評価の方法(発表者)】発表 【評価の方法(発表者以外)】態度
		評価	発表の内容について評価をする。	個別	グループ代表の発表を聞いて、その内容等について評価をさせる。 【関】 【評価の方法】記載内容・態度
終結	5分	本時のまとめ	評価票を記入する。	個別	自己評価とともに、同じグループ内の生徒についての評価も行わせる。 学習活動の反省点や課題などが把握できるように努める。 【関】 【評価の方法】記載内容・態度

※「指導上の留意点・観点別評価等」欄の【関】【思】【技】【知】については次の通り。

【関】…関心・意欲・態度 【思】…思考・判断
【技】…技能・表現 【知】…知識・理解

(4) 授業の結果と考察

ア 生徒に興味・関心をもたせ、学習意欲を高めるための工夫

生徒の学習意欲を高め、有店舗小売商の形態についての理解を深めるための教材として実在する地理的状况を用い、その特定地点に最適な店舗形態を検討させた。本校生徒にとって地元の地名と似ている「山形（ヤマガタ）」市内地図を利用したことや、自らを起業家と想定させたことによって、生徒たちは授業に対して興味・関心を示し前向きに参加していた。授業後のアンケート結果からも、多くの生徒が積極的・意欲的に学習に取り組んでいたことが分かる(図1・2)。

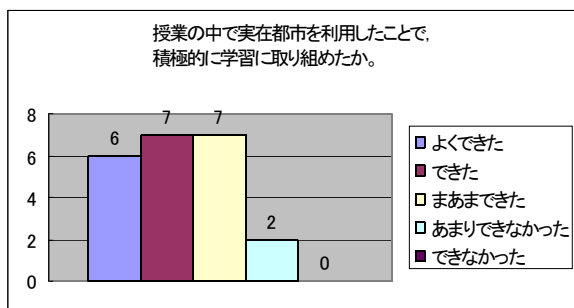


図1 実在都市利用について (人)

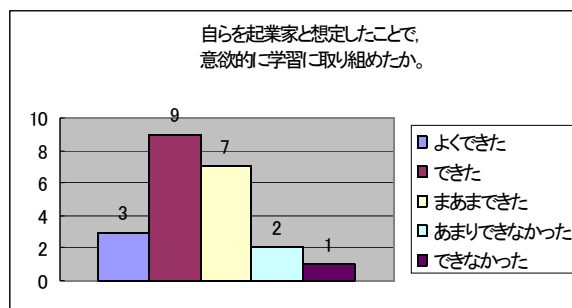


図2 起業家と想定したことについて (人)

イ 自主的に行動する力を付けるための学習形態の工夫

生徒一人一人が主体的な学習活動を行えるように、選択生徒22人を4～5人構成の5つの班に編成して「グループ学習」を取り入れた。各班の構成メンバーを生徒たち自身で決めたこともあり、無用の緊張もせずリラックスした雰囲気の中で充実した「グループ学習」が行われた。また、グループ代表者による検討結果の発表が予定されていたことも、活発な学習活動に結びついたと考える。授業後のアンケートでも8割を超える生徒が普段よりも主体的に学習することができたと回答している(図3)。

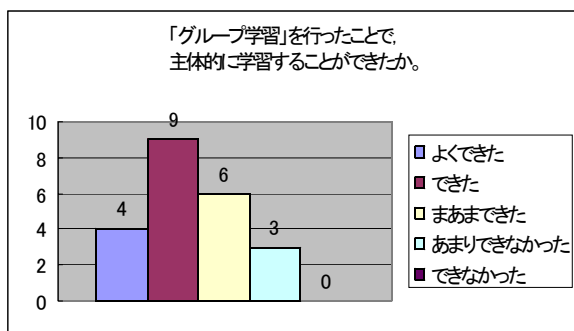


図3 「グループ学習」について (人)



「グループ学習」の様子

ウ 自主的・主体的に授業に取り組むための評価方法の工夫

生徒自身が学習活動を振り返り、その取り組みについての反省点や新たな課題などをしっかりと把握できるようにするために、「自己評価」・「グループ内評価(相互評価)」を取り入れた。さらに、各グループ代表者による発表内容に対しても評価(「他グループに対する評価」)を行った。生徒たちは、意外と仲間からの評価に関心を示し、独り善がりにならずに周囲からの客観的評価を冷静に受け入れていた(図4)。

このように評価方法を工夫することで、以後の学習活動がより良い方向へと改善されていくことが期待される。

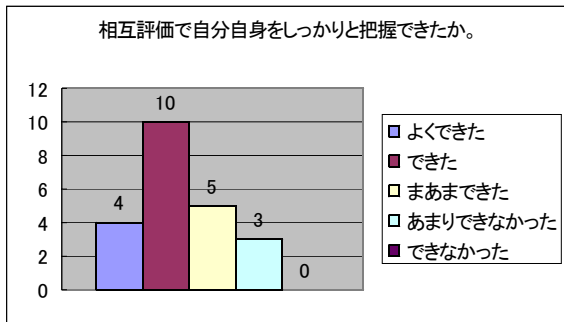


図4 評価について (人)



グループ代表者による発表の様子

資料1 自己評価・グループ内評価票

グループ学習を振り返って (自己評価・グループ内評価票)
2年3組 番氏名

1 自分自身について

それぞれの項目へ○をつける。	できなかつた	できなかった	まあまあ	できた	よくできた
しっかりと考えることができたか	1	2	3	4	5
自分の考えを話すことができたか	1	2	3	4	5
グループメンバーの意見をきちんと聞けたか	1	2	3	4	5
積極的に参加できたか	1	2	3	4	5
有店舗小売商の形態が理解できたか	1	2	3	4	5

今回の反省・課題
今回は自分としてはよくできたと思うので、今度またやる時はもっとしっかりとできるようにしたいと思います。

2 グループメンバーについて
今回の授業と一緒に取り組んだグループメンバーについて、あなたは5点満点で何点をつけてあげますか？ その理由を一言コメントを記入してください。

グループのメンバー	点数	コメント
さん	5	しっかりと発表ができていた。
さん	5	意見を尽くしてくれた。
さん	4	質問を考えて発言ができていた。
さん		

本時「グループ学習」の自己評価

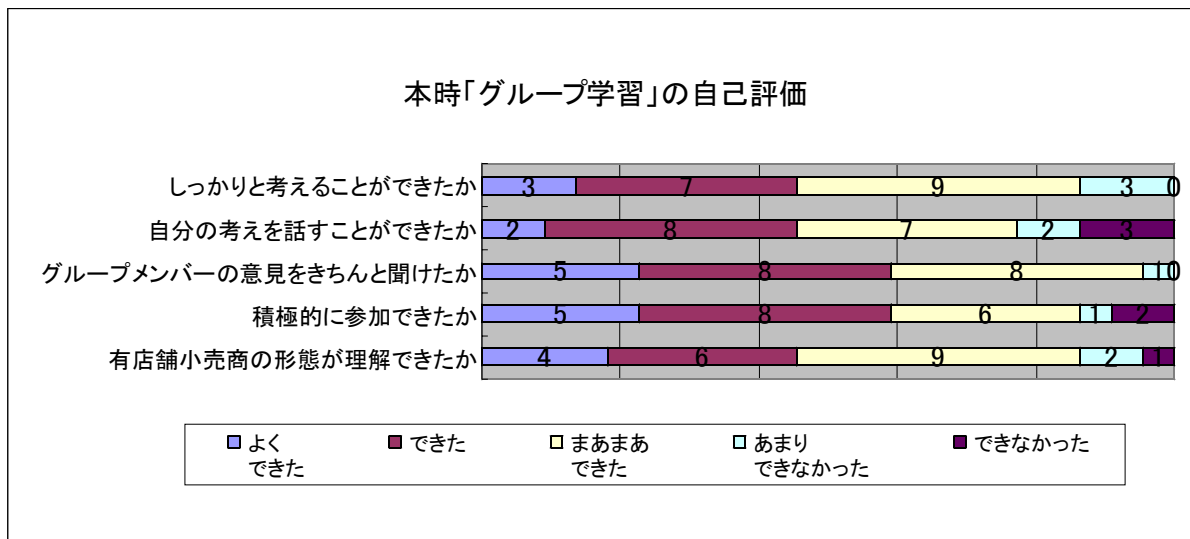


図5 自己評価集計結果 (人)

(5) 授業研究の成果と課題

ア 研究の成果

「商品と流通」は、全国商業高等学校協会が主催する商業経済検定試験の検定科目にもなっている。理論的内容が多く、講義中心となりがちな「商品と流通」という科目において、問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導を実践することは、大変難しく、授業の準備にも多くの時間を費やすこととなった。

有店舗小売商の形態についての学習では、通常、その形態ごとにポイントとなる特長を

解説するという比較的単調な授業となりやすい。そこで、実在都市を利用して「自分で実際に店舗を構えらした」と投げかけることで、生徒に好奇心をもたせて意欲的に学習活動へ参加できればと考えた。具体的な都市地図を利用したことで、生徒は、思い思いに自由な発想を浮かばせ楽しみながら授業に取り組んでいた。抽象的イメージによる学習よりも、実社会とのつながりが意識できる具体的な教材・資料などを活用することによって生徒の学習意欲を高めることが可能であることを再確認した。

また、生徒が自主的に行動する力を身に付けるために、「グループ学習」の形態を取り入れることで、生徒一人一人が主体的に学習活動を行える場面を設定した。「グループ学習」を実施するうえで最も考慮した点の一つは、各班のメンバーをどのように構成するかであった。一般的な方法としては男女別・出席番号順などがあるが、今回の授業研究のねらいは自主的行動であり、ここでも生徒の自主性を尊重したいと考え、生徒たち自身の手で班編成をさせた。この方法によって班編成をした結果、日常生活の友人関係でメンバーが決定してしまい、活発で積極的な班と、おとなしく消極的な生徒が集まった班に分かれてしまった。おとなしく消極的な生徒が集まった班の活動が心配されたが、事前に、班名（会社名）や班長（社長）を決めるなどグループでの活動を行ったり、本時の授業の流れを簡単に説明していたこともあり、授業研究時にはスムーズな「グループ学習」を展開することができた。単に「グループ学習」を取り入れれば、それだけで生徒が主体的に行動できるようになるわけではなく、グループの編成方法や生徒たちへ事前の適切なアプローチが、効果的な「グループ学習」を行うための重要な要素となることがうかがえる。

さらに、学習活動の反省点や課題をしっかりと把握し、それらの反省点・課題を生かしながら今後の授業に自主的・主体的に取り組むことによって、より良い活動へと改善されて行くことを目指し、評価方法の工夫も試みた。「自己評価」については、授業科目によってはある程度定着しつつあるが、今回は「グループ内評価（相互評価）」と「他グループに対する評価」も取り入れた。生徒は、個人的な感情に流されることなく他の生徒の学習活動を客観的に評価することができていた。これにより、生徒はクラス内の学習活動に対して関心をもつことができると同時に、生徒自身も教員側からの評価とは一味違う仲間同士のそれによって自己改革のきっかけをつかむことができると考えられる。

イ 今後の課題

今回の研究では多くの成果を得ることができたが、一方で検討すべき課題も残った。一つは、少数ではあるが普段の学習と比べあまり成果のあがらなかった生徒がいることである。「グループ学習」時にしっかりと考えることができなかつた生徒がいることから（図5）、これらの生徒の対応については、「グループ学習」の前段階において必要となる生徒自身の考えを整理する「個別学習」時点での指導方法を再度検討していくことが必要であると感じた。二つ目は、今回の授業における活動内容のボリュームが多く、時間的にゆとりがなかった点である。導入時の「一斉学習」から展開時の「グループ学習」に入る際に、教室内の机を移動したことなどは、限られた時間の有効活用のうえでも問題があった。

以上のことを踏まえ、生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむための学習指導法の実践を今後も繰り返していくことが重要であると考え、それにより変化の激しい社会のなかで、学ぶ意欲や将来直面する課題を解決する力を生徒が身に付けることができるものと確信する。今回の授業研究は、授業を改めて考察する良い機会となった。

6 研究のまとめ

本研究では農業・工業・商業科の各教科において、「生徒が問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむ学習指導の在り方」という研究主題のもとに、生徒と教師に対し、研究主題に関する実態調査を行った。その結果を踏まえ、生徒が主体的、創造的に生きていくためには、問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむことが大切であると考えた。また、生徒は実社会とのつながりを意識し、授業内容が卒業後の学習や将来の生活に生きて働くことを期待していることが分かった。そのため、研究主題に迫るためには、以下の手だてが有効であることが実態調査から分かった。授業を行う上では、効果的な教材や資料を用意し、常に問題提起をしながら授業展開をする。また、学習形態についてはグループ学習を効果的に導入する。さらに生徒の評価に対する意識を高めるための評価方法について工夫・改善を図るなど、それぞれの手だてを講じ、各教科において授業研究を実施した。

その結果、次のことが明らかになった。

- (1) 農業では、「課題研究」の授業において、生徒が制作活動を通して問題解決のために自主的に行動する力をはぐくむことに重点を置いて取り組んだ。そのための手だてとして、生徒の制作意欲を高め、集中力を持続させるための工夫や指導體制・指導方法の工夫を行った。授業においては、彫刻物の模型を作り作品の具体的なイメージをもつことで、積極的に作業に取り組む態度がみられた。また、作業の見通しをもたせることにより、制作意欲を維持し、集中して作業を持続できた。教師側は技術指導や声かけに余裕ができ、生徒がそのアドバイスをもとに作業工程や加工技術を考えて自主的に行動する姿が見られた。評価については、自己評価や相互評価により、友達との取り組み姿勢を比較、作業態度を反省したり課題を見付けるなど、今後の取り組みに前向きに考えるようになった。
- (2) 工業では、「電子機械実習」の授業において、生徒が自ら学んで問題を解決したり、自発的に学習する力をはぐくむことに重点を置いて取り組んだ。そのための手だてとして、生徒の求める好奇心や意欲のわくような授業の工夫、実践的な学習内容の工夫、他の生徒にも関心をもつような工夫を行った。授業においては、パソコン分解という項目を取り入れ、パソコン内部について学習していこうとする好奇心と意欲のわく授業を展開できた。また、電気部品及び電子部品が集約された製品の分解・組立ての経験により、工業に関する基本的な能力を身に付けることができた。さらに、グループ学習を通して、他人に対する思いやりと協調性が生まれ、周りのグループの状況を意識することにより、自分たちの課題に対して主体的に学習することができた。
- (3) 商業では、「商品と流通」の授業において、生徒が問題解決のために自主的に行動し、学習活動を行うことのできる授業展開に重点を置いて取り組んだ。そのための手だてとして、生徒に興味・関心をもたせ、学習意欲を高めるための工夫、自主的・主体的に行動する力を付け、授業に取り組むための学習形態や評価方法の工夫を行った。授業においては、実社会とのつながりが意識できる具体的な教材・資料を活用することにより、生徒の学習意欲を高めることができた。また、グループ学習の形態を取り入れ、生徒が主体的に学習活動を行える場面を設定した。さらに、自己評価や相互評価を取り入れ、特に相互評価については、他の生徒の学習活動を客観的に評価することができた。生徒は学習活動に対して関心を持ち、生徒自身も自己改革のきっかけをつかむことができるようになった。以上のことから、自主的な行動力がはぐくまれ、生きて働く学力の向上に結びついた。

研究関係者一覧

1 研究協力員

国語	大洗町立磯浜小学校	教諭	加藤 勢津子
	岩井市立岩井第一小学校	教諭	染谷 和男
	つくば市立吾妻中学校	教諭	谷口 佳之
	茨城県教育庁高校教育課	指導主事	石井 純一(平成15年度)
	(平成15年度県立太田第一高等学校教諭)		
	県立佐竹高等学校	教諭	豊田 郁央(平成16年度)
	県立古河第三高等学校	教諭	石塚 照美
図画工作・美術	水戸市立双葉台小学校	教諭	高橋 文子
	(平成15年度水戸市立千波小学校教諭)		
	日立市立成沢小学校	教諭	秋山 香
	近代美術館天心記念五浦分館(天心記念五浦美術館)	主任学芸主事	三代 博紀(平成15年度)
	(平成15年度高萩市立松岡中学校教諭)		
農業・工業・商業	東海村立東海南中学校	教諭	園部 健一(平成16年度)
	石下町立西中学校	教諭	野村 陽子
	県立真壁高等学校	教諭	藤枝 操
	県立猿島高等学校	教諭	猪瀬 仁市
	県立波崎高等学校	教諭	安藤 成男
	県立勝田工業高等学校	教諭	宇佐美 浩
	県立山方商業高等学校	教諭	荒井 智則
	県立日立商業高等学校	教諭	寺門 秀哲

2 茨城県教育研修センター

所長	大金 文郎
次長	北澤 勝行
次長兼教職教育課長	中原 一博
教科教育課長	桐原 幸一(平成16年度)
教科教育課長	山口 正雄(平成15年度)
情報教育課長	中村 一夫
指導主事(国語)	増田 年男
指導主事(国語)	渡辺 通子(平成16年度)
指導主事(国語)	宮内 健治(平成15年度)
指導主事(図画工作・美術)	坂本 一成
指導主事(農業・工業・商業)	米永 勇人
指導主事(農業・工業・商業)	今 尉(平成16年度)

研究を終えて

教育課程審議会答申（2000年12月）では、学力について「知識の量の多少によってとらえるのではなく、学習指導要領に示す基礎的・基本的内容を確実に身に付けることはもとより、それにとどまることなく、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」がはぐくまれているかどうかによってとらえる必要がある。」と示されています。

このような点を踏まえて、今回の研究では、児童生徒が実感を伴って基礎的・基本的内容を自らのものとし確実に習得し、その後の学習や生活に生きて働く学力としてはぐくむための学習指導の在り方を目指して研究を進めてきました。

教科教育課においては、昨年度と本年度は、国語、図画工作・美術、農業・工業・商業の各教科で「生きて働く学力をはぐくむ学習指導」について、実態調査や授業研究を通して実践的な研究を進めてきました。その結果、児童生徒が身に付けた知識や技能と思考力・判断力・表現力や学ぶ意欲などに関連させながら深化・総合化を図る過程を積み重ねていく学習指導の工夫改善について一応の成果を示すことができました。

また、研究報告書は本研修センターのWebページ上に公開されますので、研究の成果が一層幅広く活用されることを期待します。

今回の研究の成果をもとに、今後は、児童生徒が楽しさを感じ、生き生きと学ぶ、豊かな学びをはぐくむ学習指導に視点をおき、さらなる実践的な研究に取り組んでいきたいと考えています。

研究報告書第52号

教科に関する研究

生きて働く学力をはぐくむ学習指導

平成15・16年度

平成17年3月発行

編集 茨城県教育研修センター教科教育課

発行 茨城県教育研修センター

〒309-1722

茨城県西茨城郡友部町平町字山ノ神1410

TEL 0296(78)2121 (代表)

FAX 0296(78)2122

URL <http://www.edu.pref.ibaraki.jp/center/>